

# 〈うぶすな〉からの心理学

— 日本のトランスパーソナルに向けて —

實川 幹朗 姫路獨協大学\*

On Indigenous Psychology:  
Toward the “Transpersonal” in Japanese Tradition

ZITUKAWA Mikirou

## 【目次】

はじめに	
一 乗り越えるべきところ …………… 60	3 〈精神/物質系〉
トランスパーソナルのこれまでと日本	心が脳の中に入るまで
西欧近代世界とハイデガの居直り	1 精神の囲い込み
国木田独歩の悩みと今どきの鬱	2 「物質の心」の囲い込み
『おおきな木』の下のハイデガと道元	心は脳ではない 3 — 霊妙物質の脳?
外すべき近代の三つの「しがらみ」	心はどこに、どうあるか
〈やまとごころ〉の立場と〈うぶすな〉	
〈うぶすな〉を語る「やまとことば」	四 〈意識革命〉を捨て〈おのづから〉に … 95
二 〈一つ掲げ〉より〈お蔭様〉 …………… 70	革命の看板と偽り
『黒子のバスケ』事件と〈一つ掲げ〉の罨	意識の歴史の頼りなさ
「見えない宗教」と「唯一」のおかしさ	〈意識革命〉の三つの流派
〈お蔭様〉が無ければ「恩知らず」	〈意識一色流〉——人間が宇宙を呑む
二つの「完全」性と「能動」「積極」へのこだわり	〈意識棲み分け流〉——神様への遠慮から新たな「指導者」へ
「虚無からの創造」	〈白〉無意識の「発見」と理性の逆襲
「虚無」からの「存在のハシゴ」	〈意識植え付け流〉
〈お蔭様〉の歪みとしての「ニヒル」	〈黒〉無意識の征服は魔女狩りの衣替
「悪」の創造あるいは「想像」	〈意識革命〉の持続
三 〈心の囲い込み〉より〈お互い様〉 …………… 81	「心の専門家」の謎の力と民主主義の崩れ
科学か歌か	五 〈うぶすな〉の心 …………… 108
心は脳ではない 1 — 幻と現実とは違う	どちらが「迷信」か
心は脳ではない 2 — 山の神は幻か	修験道弾圧と「病者」の閉じ込め
〈心の囲い込み〉の歴史と仕組みのあらまし	あの世との付き合い
〈心の囲い込み〉の三通りの動き	動物も道具も〈お蔭様〉で〈お互い様〉
1 〈領域系〉	「ことだま」は「事霊」
2 〈人間系〉	万葉集の「事霊」
	事霊の裏の動き = うらなひ = 占い
	自己責任よりも前世の因縁か、憑き物
	安藤昌益に見る〈うぶすな〉の思想
	〈うぶすな〉の思想とトランスパーソナル

\* 〒670-0896 兵庫県姫路市上大野7-2-1  
zitukawa@gm.himeji-du.ac.jp

## はじめに

トランスパーソナルの運動は、いま岐路に立たされている。ということは、わがトランスパーソナル心理学/精神医学会もそうなのだ。この原稿を書いている平成29年はじめから遡ること二ヶ月足らずの11月末には、「トランスパーソナル学会」と合同で学術大会を開催した。この大会は「未来をつなぐトランスパーソナル：原点・課題・展望」を掲げていた。明るくも聞こえる標題だが、中身は必ずしもそうではない。

この数十年のあいだ、トランスパーソナルの提案に刺激され、心理学の研究範囲は「スピリチュアル」な領域や身体技法を含めた方面にも広がってきた。しかしながら、この運動そのものは拡大を止め、特徴もはっきりしなくなってきたのである。このことを公開シンポジウムのシンポジストをはじめ、多くの参加者が共通して認めた。そもそも、トランスパーソナルの実質的な創始者で、第一人者であったケン・ウィルバーその人が、すでにこの運動を去っているのだ。

どうしたことだろう—— なにか打開策は見当たらないのか？

本稿では私たちの学会が、また日本の心理学研究者が、このトランスパーソナルの行き詰まりをどう抜けるか、またさらなる課題を果たして未来へと展望を繋げられるのか、思うところを記してみたい。必ずしもトランスパーソナルの名前にこだわらずともよかろう。そろそろ「賞味期限」が過ぎるかもしれない。トランスパーソナル心理学/精神医学会の設立準備の時から、私はそう言い立ててきた。この（当時）新しい名前は、新しいだけにすぐ古くなるから、別の名前を用いる方がよいと考えたのである。

もちろん、名前を変えれば済むことではな

い。大切なのは中身である。これまでのトランスパーソナルでは考え方そのものに、時代的なまた文化的な制約が強すぎる。よそはいざ知らず、この分野の課題を担いたいなら、私たちはもっと自からの慣らわしに自信を持つべきだ。先日の大会で、トランスパーソナル学会の重鎮ティム・マクリーン氏と話したが、彼も「日本にはトランスパーソナルの要素がたくさんある」と語り、とくに「有り難い」と「お蔭様」の立場を評価していた。どうやって、私たちの宝を活かしつつ進めてゆけるかについて、まとまらないながらも綴ってみたい。

## 一 乗り越えるべきところ

### トランスパーソナルのこれまでと日本

心理学の歴史では、研究の方法や範囲を大幅に変えようとする動きが繰り返し、波のごとく襲っている。そもそもヴント、ブレンターノらによる近代心理学の誕生が大きな事件だし、その後はフロイトに始まる精神分析運動、ワトソンの行動主義、マイヤーズ、ホジソンらによるスピリチュアリズム、ブラヴァツキーらの神智学など、それぞれに個性と特徴豊かな動きが、全体としての心理学を歩ませてきた。

トランスパーソナルはと言えば、二十世紀の後半にアメリカ西海岸の「対抗文化」のなかで、西欧文明の限界への自覚から、東洋に憧れ、非西洋の発想から心の探求を学び直そうと試みた波であった。ほとんどの場合に人類の進歩の最前線を自任してきた近代西洋人たちのだから、こうした反省には、神智学と並らぶ大きな意義があったのは疑いなく、だからこそそれなりの影響を与えてきたのだ。

しかし波とは、来ては過ぎ去るものである。ことにわが国に届いたトランスパーソナルの波は、そうならざるを得まい。なにしろ日本は紛

れもなく東洋の島国で、すでにそれ自から、カリフォルニアの彼らの憧れの多く詰まったところなのだ。その宝はいま、どこにあるのか。私たち研究者は、それを大切にしているのか。このことを問い直すべき時節に来ていると、私には思われる。

外国から学ぶのは、もちろんよいことである。昨今の世界には、ポピュリズムと自国中心主義が渦巻き、わが国ではネトウヨたちが「日本すごい」と叫び立てている。そんなもの等し並みされるのはご免だが、自国の慣らわしや考え方を大切にすればすべて反動・差別主義ではあるまい。

わが国の学問の仕来たりには、なるほど困ったところが多々ある。なかでも一番いただけないのが「タコ壺作り」だと、私には思われる。「自分の専門」を決めると、他は見向きもしない。専門を「深める」との口実でどんどん、入り口の小さな、外の見えない壺の中に収まってしまふのだ。ひとたびここに入り込むと、出るのはたやすくはない。

出られない理由はいろいろある。余計なことを考えなくてよいのも心地よからう。そういう人は出られないのでなく、出たくないのだ。だが息苦しくて、外の空気が吸いたくなったら、必ずや根性の要る闘いとなるだろう。タコ壺の先住者から出る杭のごとく打たれ、同輩や後輩からは足を引っ張られるからである。

「変わったことに手を出しているね。遊んでないで、しっかり研究したまえ。」

「あの人は何を狙っているのか。物知りのようだが、雑学では業績にならないよ。」  
といった具合である。じっさいのところ、飯のタネ（エサ）もこのタコ壺の中での配給、ないし取り合いとなる。いちばんひどいのは医学の世界だが、他でも、研究職の椅子取りゲームについては似たような事情があって、外に出れば飢え死にの危険を背負うことにもなるのだ。

恐ろしいことである。しかしそれでも、学問を進めるためには、タコ壺に留まれない場合がある。解き明かしたい謎、追いかけては行かない問いが有るときは、研究を進めるにつれ、はみ出してしまふものだ。もしかするとケン・ウィルバーも、そのようにしてトランスパーソナルを去ったのかもしれない。まあ、彼くらいになれば食いつばぐれの心配はしなくてよいに違いないが。

日本の学問研究は、ほぼすべて西欧の分類に従った枠組みに収まる。そのせいもあるのだろう、本家本元の発信を何よりの大事に置き、まずは紹介に努める。こちらでの仕事といえ、西欧本家のお墨付きのちょっとした色付けに終わってしまうことが多いのだ。タコ壺からはみ出す恐れがないし、なにより王道を歩んでいるとの自信が得られる——というのでは、まことに情けない。

## 西欧近代世界とハイデガの居直り

トランスパーソナルでは、ウィルバー初期の立場への反省から、「プレ」と「トランス」を区別する。発展段階を順番に積み上げ、「まだ」及ばないと「超えて」通り過ぎたのとは、互いに似て非なるものだから、混同してはならないというのだ。このとき、どこに及んだり通り過ぎたりするかといえ、そこが「パーソナル」の地点である。「パーソナル」とは個人としての成り立ちで、そこを超えるから「トランス・パーソナル」となる。

じつは私は、「プレ」から「トランス」への発展段階説に疑いを抱いている。トランスパーソナルの概ねの構えは、個人としてのまとまりと自覚を足場にする。つまり言い換えれば、西欧近代の築いてきた個々人の自立、独立、主体性を見限らず、その上になにかを付け加えて進もうとするのだ。「自立した主体的個人」を土台に組み込むので、それを遡って個人を超えた

ところから、あるいは「個人というこだわり」を成り立たせる場から考えを進めるのが難しくなっている。そもそもトランスパーソナルは、西欧近代を超えて進もうとしたはずなのに、まだそこに足を取られていると思わざるを得ない。

そこでまず、西欧近代のもたらした景色を振り返るところから始めたい。どう進むにせよ、トランスパーソナルはここを超えねばならないからである。ハイデガというドイツ人哲学者がいる。近代哲学に「存在論」を取り戻そうと努めた人で、ナチスに進んで力ぞえし評判を落としたものの、いまでも「二十世紀最大の哲学者」などとほめる人さえいる。この男の考えは近代の個人主義そのもので、さらに言えば、人間の身勝手の極みとなっているので、乗り越えるべきところを分かりやすく説いてくれている。

ハイデガによれば——人間は、人間以外のものをすべて道具にする。近代において神聖なものは姿を隠したので、森羅万象は「世俗の世界」に他ならない。もちろん人間も、そこに住んでいる。さらにこの「世俗の世界」は、どういうわけか、人間にとって「お手ごろ」「おあつらえ向き」にできているというのだ。しかもなんと、この「お手ごろ」と「おあつらえ向き」こそ、ものごとのそもそもの有りようなのだという。これを小難しく言い回すと「存在の意味」となるが、人間とは万物の「存在の意味」を照らし出す「明るみ」だと説いているのである。

つまりは宇宙全体が、人間にとっての「お手ごろ／おあつらえ」つながりで回っている。例えば、金槌は釘を打つため、釘は板を止めるため、板は家を造るため……といった具合にできている。それが世のものごとの「存在の意味」だというのだ。森羅万象は人間が使い道具にしてはじめて、なぜ有るのか明らかになる。「す

べては資源として利用するためにある」と言った方が分かりやすいだろうか。そしてこの利用法を、万象をどう使うか決めるのが、個々人の主体的な企て・決断なのだ。

すべてが資源となり、利用されるのを待っている。しかし、人間だけは違うという。人間は自からがもう明らか、つまり「他のものを通さず、それ自からが明るみである」。近代の自立した個人は明晰な意識を備えているからで、だからこそ他を照らせるのだ。しかも、人間がなんでも道具にするのは、自分のためばかりではない。使って「存在の意味」を照らし出してやれば、森羅万象のためにもなるという。人間の都合こそこの世の光だ——とまあ、こんな図々しい話が、『存在と時間』という本に書いてある。

ハイデガは西欧近代の世界の枢要部に身を置いていた。その仕組みに気付きつつ、だが超えようとはせずに、居直ったのだ。自由な個人が勝手に振る舞えばすべてうまく行くと、近代の自由主義経済、資本主義の原理にも通ずる。しかし元をたどれば、人間が便利に使えるよう神様が万物を造って下さったとの、キリスト教の教えに連なっている。彼が「大哲学者」との評判を得られたのは、体制への巧みなすり寄りによるのである。

ハイデガは、彼の晩年に実用化したジェット旅客機が大好きだったという。この便利さに、金属や石油の「存在の意味」を見出していたのだ。原子爆弾の爆発こそが、ウラニウムやプルトニウムの「存在の意味」だったに違いない。このような土台の上に、「意識のスペクトル」を積み上げていっても、安心できる暮らしは訪れないのではないか。

## 国木田独歩の悩みと今どきの鬱

こんな世界に住んで心地よいはずがないのは、私たちの多くがよく知っているところであ

ろう。その息苦しきの「お手本」となる生き方が、すでに明治時代に見出せる。日本近代の始まりにあって、この毒にやられて命を縮めた一人、国木田独歩を考えてみよう。

「独歩」は、もちろん筆名である。こんな名前を自分で付けたのだから、思想が分かりやすい——自立した主体的な自我を育て、独立独歩で、大望を抱き真理を追究する。個人の明らかな意識で世界を照らし出すのだ。

吾に一個の自由なる心霊を與へよ。然らば吾は足る（『欺かざるの記』明治二十八年二月五日）

この「自由なる心霊」こそ「独歩」なのだ。この主体的な個人の自我がどれほど居心地の悪さをもたらしたか、調べるのはたやすい。独歩は洗礼を受けたキリスト教徒（プロテスタントの日本基督教会）だった。形だけ水をかぶったのではない。就職した大分県佐伯の鶴谷学館という学校で、信仰熱心のあまり反感を買い、追いつめられたくらいの敬虔な信者なのだ。その彼は、ある日の教会で、時間について説教を聴き、たいへん驚いた。

曰くタイムは幻のみ、吾人の行為は實なり、宇宙はホールにして過去、未来、現在、凡てを包蔵す。  
故に吾が一挙一動は宇宙に刻まれて存す。神は無窮の命にして吾が凡ては神に在りて現在なり。（同 明治二十七年七月三十日）

「タイム」と英語で書いたことから、独歩の驚きを感じ取れよう。それまで感じていた時間とは、まったく違うものが独歩に突きつけられたのだ。これはキリスト教の本流を定めただけでなく、現代科学にまで流れ込んでいるアウグスティヌスの時間論に他ならない。ハイデ

ガの説く「時間」もまた、これに類するし、個人から宇宙に広がってゆこうとするトランスパーソナルの意識にも共通するものである。

宇宙には、過去・現在・未来からなる「タイム」がある。人の一生も、そこに刻まれている。ただし「タイム」は過ぎ去ってゆくので、未来はまだ訪れず、過去はもう無い。だから、過ぎ去る時間は幻に他ならない。「實なり」と言えるのは、つまり現実とは、現在の自分の「行為」だけだ。明らかな意識のもとでの振る舞いのみが、現実だ。ただし神にとっては、過去と未来のすべても「現在」となっている。そこで人間のすべてを見渡し、評価したり裁いたりできる。ハイデガの場合には「神」を口にしないが、その代わり、未来から迫ってくる死が「良心」の声をもたらすと語るのである。

今の日本人は、すでにこうした「時間」に親しんでいるかもしれない。だがこれは西欧近代の作り上げた極めて特殊、かつ危うい考え方のものだ。明治の日本に生まれた独歩にとっては、たいへんな驚きであった。かつて私たちの〈うぶすな〉には、まったく違った「時」が流れていたのがあった。

「時」はもっと粘っこく、手応えがあった。いま生きているのは、昔のお蔭に他ならないのである。昔から人びとの築き上げた仕来たり、慣らわしに支えられて「いま」があるからには、過去はけっして消え去ってなどいない。森羅万象と〈お互い様〉で出会い、〈お蔭様〉で暮らし、〈おのづから〉生きている。その厚みこそが「いま」だったのだ。神に監視してもらわなくとも、私たちはしっかり「いま」を生きられる。その代わり、「現在」をペロリとはがして前に置くなど、できはしないのだ。

独歩は教会で、彼にとっては斬新な説教を聞き、心を打たれ、この古くから親しんできた「時」を捨ててしまった。全知全能の神の前で生きようと決意し、自分でも幻としか言えない

「タイム」に歩み込んだのだった。

「タイム」の世界では、人間が生きられるのは狭い「現在」のみだが、そこでの「行為」だけは確かに「實」だ。したがって、神に通ずる——「吾」として自由に、主体的に進もう。ところが半月余りで、この決意はみごと崩れ去った。

昨夜岸の下に盆踊りありて、夜更けまで、村女達のはねくり廻るを見物したり。

朝、忽ちにして午後、而して夜。此頃の一日は矢の如く空過す。……

無窮の時間、無窮の空間に包まれたる人生は實に不思議なり。無窮の時間と空間が人間の思想に不思議と認めらるる限りは人生は不思議なるなり。

嗚呼タイム。すべてのものこの永劫の海に浮沈生滅す。

嗚呼幻なる哉、時！昨日昨夜何処にある。すべての過去何処にある。吾！これ幻なる哉。嗚呼吾の生存を感ず。

この現存する吾！このタイム。この無窮！知らず、相関するの深意は如何。  
(同 明治二十七年八月十七日)

確信したはずの「自由なる心霊」が、村の娘たちの盆踊りを観て揺らいでしまった。キリスト者たる独歩には、おぞましい「ワルプルギスの夢」だったろう。「はねくり廻る」は蔑みを込めた言い方だ——が、その意識の裏に、古くからの〈うぶすな〉の心が跳ねついた。意識は真っ白となり、矢のように一日が暮れる。独歩はそれでも、やせた意識にしがみつき、「無窮の時間、無窮の空間」を考え続けた。しかしもう、「實に不思議なり」としか言えない。過去は、どこへ行ったのだ？……未来には、考えも及んでいない——すべてを「現在」とする神についても、もう語れない。自分の現在さえ

空白なのだ。

明らかで自由のはずの「吾」が、謎に染まってしまった。ここが引き返すべき「時」だったろう。だが独歩は、「人間の思想に不思議と認めらるる限りは人生は不思議なるなり」と語り、不思議の場に居直った。「嗚呼吾の生存を感ず」と言わしめてくれた生きた娘たちではなく、「吾」に現前するはずの「思想」を頼ろうとしたのである。彼はもはや、〈おのづから〉に生きられなくなっていた。

「現在」とは、過去と未来の間ではない。英語の「プレゼント」などを考えれば分かるおと、目の前にあるとの意味である。だからすべて明らかのはずで、隠れたところが無く、厚みも奥行きもない。これすなわち、近代的個人の意識の明証の姿に他ならない。

キリスト教の神は全知全能だから、時の流れのすべてを「現在」としている。独歩の住む宇宙の、幻となってしまった過去と未来のすべても、神にとっては「現在」なのだ。神は「ビッグブラザー」のように、すべてを目の前で監視しているはずだった——その神が消えた。わずか半月で、娘たちの「はねくり」により、消されてしまった。だから代わりに生身の彼が、「昨日昨夜何処にある」と叫ばねばならなかったのである。

「現在」に生き「行為」するはずだった「吾！」つまり主体的な自我も、そうなれば「幻なる哉」となる。なるほど「吾の生存」は感じられる——村娘らの呼び覚ましたのは、他ならぬ「現存する吾！」である。すなわち、もう神の前の「自由なる心霊」ではないのだ。その重たいものが、過剰な自意識とともに、幻の「タイム」の前に取り残されてしまった。

娘たちは独歩に、「自由なる心霊」とは違う「生存」を思い出させた。「はねくり」は、「タイム」とは別の「時」の内であらうごめいていたのだ。「時」は、流れるだけでなく、移り、また

めぐる。移った「時」は、消え去ってなどいない。季節が戻るように、村の先祖と子孫を包む「時」には、独歩もその気になればまためぐり会えたはずなのだ。

だが彼は、もうその「時」に戻らず、「生存」だけを抱きつつ取り残されたのであった。「現存する吾」が、果てしない幻の「タイム」の前に「相関」してたたずむ。しかし彼は、ハイデガとは異なり、世界を自分勝手に「明らかにする」などできなかった。なんと「現在」の行為の「實」さえも消えてしまったのである。「タイム」の狭い一瞬の「現在」で「行為」するなど、神の助けなしにできるはずがない。もう残るは「不思議」だけ——「吾」もまた幻と成り果て、幻の「タイム」のうちに「浮沈生滅」するのみだった。こうなるとは、もはや手の打ちようが無い。

ひとたび上下の序列を信じ、高みに昇ったつもりになれば、降りるのは難しくなる。この十年ほどのち、一高生だった藤村操が「不可解」の言葉を残し、華厳の滝から身を投げる。同じ悩みは、志ある明治の若者たちに行き渡っていたのだ。

かくて日は、あゝ斯くてこの日は  
古も暮れゆきしか、今も又！  
哀し、哀し、我こころ哀し。

「秋の入日」と題する詩をこう結んだのは、明治四十年、独歩の三十六歳での死の前年のことだった。「時」はもうめぐって来ず、幻の「タイム」となって過ぎ去り行くのみだ。すべてが去ったあと、自立した自我は行き場なく取り残され、やがて滅びる。みじめすぎる詩だが、これこそ近代の抑鬱の精神病理に他ならない。

「晩年の絶唱」と言われるこの詩の歌い出しは、「要するに悉、逝けるなり！ 在らず、彼等

は在らず」となっている。「現存する吾！」が、もはや消えたのであった。この「在らず」は、悟りにつながる仏教の「無」とは異なる。キリスト教の神の掌る「存在」に対する「虚無」が、ここに匂っているのである。「虚無」は無意味で、絶望で、悪ですらあり、独歩はそこに突き落とされる恐れを感じている。

振り返れば近代的な自己意識の準備は、アウグスティヌスの思想を受けて、遅くとも千五百年以上前から始まっていたことになる。完成こそ新しいが、西洋の古くからの流れの、特異な進化形なのだ。日本のトランスパーソナルをこうした土台の上に作るべきではない。

### 『おおきな木』の下のハイデガと道元

日本の〈うぶすな〉、つまり私たちの長く伝えてきた暮らしの流れは、こうではない。むしろ、ハイデガとは逆さまの立場なのだ。「自分からものごとを明らかにしようと図れば、迷いだ。万象が己れを訪れ、明らかにしてくれるから悟りとなる」——こう道元が述べたのは、七百年も前だった。この考えは道元一枚看板で、様ざまな著作のあちこちに、少しずつ違う言い回しでちりばめてある。万物に照らされてこそ自己は明らかとなり、人間が照らそうとすれば煩惱だ——道元はハイデガを、産まれるはるか前に切り捨てていたのである。

この二人の真逆さまの考え方を、アメリカと日本の二つの童話が、わかりやすく描いているので、その様子を味わってみよう。まず、アメリカの作家シェル・シルヴァスタインの童話の絵本『おおきな木』だ。ベストセラーとなり、世界中で翻訳された少年と一本の木の物語である。

子どもは木に登って遊び、木も幸せだった。だが大人になった少年は、遠くに行ってしまう。そして、ときどき帰ってきては、あれこれ求める。木はすべてに応えた。金儲けのため実

を売らせ、家を建てるため枝を払わせた。船を造るためとなれば、ついに幹を切り倒させる。しかし、やがて老いて戻った少年が、疲れたと言う。木は、もう何もあげるものはないが、と残った切り株に座らせた。木は幸せだった—— ことになっている。

シルヴァスタインは、黒人だ。この本の出た一九六四年はアメリカで、長い闘争のすえによりやく「公民権法」が成立し、法律上で人種差別の終わった年であった。のちに暗殺されるキング牧師が、ノーベル平和賞を受賞した年でもある。それで差別の実態が大きく変わったわけではないのだが——。

大きな木は、わがままな白い文明人に仕えた、心やさしい黒人奴隷を表わしている。木の幹は黒くないが、小さく密集した葉が黒人の縮れ毛を思わせる。少年はこの葉で作った冠をかぶり、「森の王様」となって遊んでいたのだ。

大きな木は、英語の原文では女性代名詞(she)で呼ばれる。西洋では、自然全体が「女なるもの」だ。だからこの大きな木は、白人の男以外の森羅万象でもある。白人の男が利用し尽くせば、みんな—— 道具も、動物も、山川草木も、有色人種も、そして女も—— 「幸せ」に決まっている。「有り難い」とも「お蔭様」とも感じず、幸せの押し売りさえするのだ。序列を定め上から見下せば、そうなるしかないのである。

この少年に、名前はない。が、「ハイデガ」と付けてもよいではないか。きっと彼も少年時代、少しは可愛かったのだ。シルヴァスタインはこうした思想と実情に、精いっぱい怒りを込め、皮肉な童話を記したのだ。

それから十年ほどたち、日本で佐野洋子が『おぼえていろよ おおきな木』を出版した。あきらかに『おおきな木』のもじりである。ただ、中身はかなり違う。

ある家の前に、大きな木が立っていた。家には、この木になにかと不満をぶつけて怒る男が一人住んでいた。木の葉が落ちた、鳥のフンが落ちた、雪が落ちた、毛虫が落ちたなど、事あるごとに腹を立て、叩き、け飛ばして憂さを晴らしていたが、ついにある日、腹立ちまぎれにその木を切り倒す。けれども、切り倒してみると、じつはその木が自分の淋しさ、悲しさ、恐れなどを、すべて受け止めてくれていたのだと気付く——。

佐野の本の木は、ただ差し出し、利用されるだけでない。人間の前に、対等以上に立ちほだかっている。木に怒る男の振る舞いは、木の「存在の意味」を明らかになどしない。むしろ木の本当の有様を、有り難さを、隠していたのだ。ついに切ってしまったとき、すなわち人間の行為がもはや不可能となったとき、やっと木の意味は明らかとなったのだ。

こちらは「道元の木」になっている。切ってしまった木に照らされ、人間以外のものによって、人間ははじめて己れを知ったのだ。しかも、木の「存在」が教えたのではない。「存在」が消えたとき、その木の「無」に教えられた話なのである。人間がけっして「自立」などしていないし、できないのもよく分かる。

『おおきな木』の物語は、木を使い尽くし、幸せが戻り、丸く取まったかのように結ばれる。しかし、その「幸せ」がウソだとは、だれが読んでも分かるに違いない。読み手の心に、やり切れない悲しみと怒りが、静かに湧いてくる—— こういう巧みな造りの本なのだ。ちょっと技巧がこり過ぎではないか、とも思えるが、こんな曲芸でないと訴えられないほどに、西洋近代の心は病んでいるのだ。

二十世紀の後半からは「環境保護」、「生態系の保全」などを唱える人が増えた。人間の身勝手への反省が、少しは含まれている。ところがこれらもよく見ると、人間が「持続可能に使う



ための計画」に過ぎない。いつまでも「お手ごろ」でいてもらうための工夫なのだ。相手の都合は考えなくてよい。人間以外のものに心はない。少なくとも「尊厳」を備えた理知的な魂はない——そう考えるかぎり、身勝手は止みようがなからう。

近ごろは犬・猫、クジラやイルカなどに「尊厳」が広がった。ちょっと違った動きに見えるが、これも「人間に似ているから」が理由なのだ。人間に似たしぐさで可愛いとか、人間並みに大きな脳を持つからで、日本でも、去勢するのは猫のため、などの思想が広まってきた。人間のいやなことは動物にもしなかった祖先の心は失われ、西洋人の口まねが尊敬を集めつつある。

### 外すべき近代の三つの「しがらみ」

西欧近代は病んでいる。トランスパーソナルはそれを乗り越えようとしたが、まだまだ歩み足りない。翻って、現代の日本を縛り、わが国にふさわしい学問の成り立ちを妨げている考え方、謂わば思想の「しがらみ」が三つある。それらを私は、〈一つ掲げ〉〈心の囲い込み〉〈意識革命〉と名付けている。あらかじめ手短かに説明しておこう。

まず〈一つ掲げ〉とは、読んで字のごとく、「一つを高く掲げる」思想のことである。圧倒的に強いもの、優れたものを高く掲げ、その立派な「一つ」を万物に君臨させる。さらに、すべてをそこから序列づける仕組みも出来てくる。なんでも一番がよい。敗者は負け惜しみを言わず従え——「勝てば官軍」という身構えで、よいものを一か所に集め、独り占めをよしとするのである。

ここまで言ってしまうと、眉をひそめる人が多からう。けれども、掲げた「一つ」のところに善さそうなことを集め、金メダルよろしくピカピカに飾り立てればどうか。真理、正義、

善、美、幸福、豊かさ、有能、積極性、能動性、創造性、指導力などなど、いかにも善さそうではないか。そうなると立派で、有り難くて、逆らえない感じがしてこないだろうか。

ハイデガの思想にも、〈一つ掲げ〉がはっきり認められる。人間は「明るみ」となって輝き、他の万物に君臨する。そこには利用する者とされる者という、支配の思想、上関関係・序列の思想がはっきり現われる。ただしその地位は、じつは最高の「一つ」そのものではない。はるか彼方の未来から、死を越えて呼びかけてくる「存在」の与える地位だからで、その「存在」そのものこそが「一つ」なのだ。「在りて在るもの」を神の別名としてきた、キリスト教神学の流れを汲むのである。

外すべき「しがらみ」の二つ目は〈心の囲い込み〉である。これも言葉のとおり「心をどこかに囲い込む」思想の動きを指す。心とは、どこにあるのだろうか？——今の科学では、脳の中とされる。ことに、大きく複雑に発達した人間の脳の内、心のありかを定めているのだが、それこそ〈心の囲い込み〉の実現の行き着いた姿に他ならない。しかしこの説に、しっかりした科学の根拠はないのである。

西洋には、人間様だけが偉いという人間中心主義が根強い。この思想から出てくる身勝手の一つが、〈心の囲い込み〉なのだ。心があるのは人間だけと考えれば、人間以外の相手に何をしても心は痛まない。人間の都合で「資源」として利用でき、快適に暮らせるかもしれない。ハイデガの思想と『大きな木』の主人公の世界は、まさにこれである。

しかし、〈心の囲い込み〉は矛盾を含んでいる。脳に閉じこめたままでは、心は外の世界とつながりようがないからで、近代西洋人でさえ、きちんと考える人はとっくにこれに気づいている。フランスの哲学者ベルクソンは、脳は電話の交換機のようなものだと言ったが、これ

は〈心の囲い込み〉への論理的な批判なのである。

今から百年ほど前、パリの電話交換局はパリジェンヌ憧れの職場であった。手動の交換機だったが、それこそ当時のITの最先端なのだった。通話は心の働きに違いなく、世界中のいろいろなことが入っている。交換機が無ければ通話はできないけれど、電話を掛けてくる外の人びとが通話の主役なのは疑いようがない。通話は交換機の外から来て、外に出てゆく。脳も同じことで、むしろ、宇宙全体を行きかう心の中継地に過ぎない。

ベルグソンによるこの批判は、今でもまったく色あせていない。古くさく感じるなら、インターネットのサーバー・コンピュータに置き換えてみればよい。〈心の囲い込み〉は、心の働きの一部にしか当たらない脳で、心の全体を呑み込もうとしているのだ。

さて、三つ目の「しがらみ」は〈意識革命〉となる。「意識」という言葉は日ごろよく耳にするが、思いの外に重大な意味のある言葉となっている。事故などの報道では、当事者に「意識」があるかないかを、よく付け加える。昔なら「息が」だったのに、「意識」が取って代わったのである。「意識」の有り様が、犯罪や不正行為の処罰を左右する。こうした事情は、近代心理学の成立の頃から、意識でなんでも解決できるとの思想が急に広まったことに由来する。十九世紀半ばの思想史の大転換である。近ごろよく聞く「意識改革」などとは違い、「意識」そのものが革命を起こし世界を乗っ取ったとも言うべき転換であった。

意識こそ人間の根源で、さらには全宇宙の秩序をさえ支えるとの思想であり、ハイデガの「明るみ」は、この〈意識革命〉の性格をよく現わしている。十七世紀半ばの「我思う、ゆえに我あり」というデカルトの言葉を、「だれが何と言おうと、俺はこう思うんだ」と言い換え

てみれば、今ではありふれた考え方になっているのに気付く。発表当時は激しい論争があり、どうみてもデカルトは劣勢だったが、二三百十年かけて世界は説得されたのだ。

では、「意識」とは何だろう？——じつは、これがよく分からない。私たちは日ごろ、見聞きし、感じ、考え、思い出したりしている。ここで「意識」が働いていることは、だれも疑うまい。ところが、それでは「何がどこまでどう意識にあるか」となると、はっきりと答えられる人はだれもいない。明らかなようできて、じつはこの上ない謎なのだ。「明らかな謎」と言い回しておきたい。

それなのに〈意識革命〉は、この「意識」こそ確実に、すべての科学技術・学問を支えると言い張った。初期の心理学を支えた実証主義は、ここから誕生したのであった。さすがに現代ではここまで言わないが、この「革命政権」は少し形を変えながら、今なお続いている。この怪しげなものを拡張し「意識のスペクトル」を作っても、うまく働くかはおぼつかないと、私は思う。

### 〈やまとごころ〉の立場と〈うぶすな〉

幕末の黒船、ペリーの艦隊は許可なく江戸湾の測量を行ない、祝砲、号砲などの名目で数十発もの大砲を撃った。この海賊のようなアメリカ人がもたらしたのは、不平等条約だけではない。そのとき、日本人の心にも砲弾が撃ち込まれたのではなからうか。放ったのは、空砲だったかもしれないが、日本人の心に響いたその音には、たっぷり毒が仕込んであった。三つの「しがらみ」の成り立ちをこれで象徴できると私は思う。音は消えたけれど、毒がまだ私たちの心の内に残って、痛みを与え続けている。

明治維新は、大砲で脅され開国させられた江戸幕府のうろたえに乗じたのだったが、担い手たちも自分らペリーの大砲を手に入れようと企

てた。すなわち西洋化を求め、日本も欧米と同じ強くて乱暴な国になろうと決めたのだった。

「四民平等」といえば聞こえは良いが、政府からの命令を全国一律に届ける中央集権の理由付けでもあった。西洋式の「文明開化」の、藩閥政府による無理じいが始まった。教科書は国定となり、「富国強兵」の旗のもと、武士とは似ても似つかぬ軍人たちが天皇の威を借りて威張りはじめた。古くからの思想は「封建的」と札貼りされ、風紀を乱す「迷信」として取り締まりを受けるに至った。

しかしながら、そうした「迷信」のうちにこそ、むしろ祖先の伝えてきた知恵が詰まっているのではないか。もう時代は変わったのだからと、「プレ」に戻るのを危ぶむ人もいよう。しかし、一直線の進歩・進化が、心・魂の事柄に必ずしも当てはまると限らるまい。鎌倉時代の末に『類聚神祇本源』を著した伊勢外宮の禰宜・度会家行は、外来の仏教を頼る本地垂迹から離れて「不二」の本性に戻るべしと言いつた。その立場が、後年の神道の柱となってゆくのである。私は、伊勢神道が日本古来の本源と信ずる者ではないし、国家神道に連なる素地は困ったところと思う。だがそれでも、直線的時間に逆らう動きには、学ぶところがあると考え

る。私たちの暮らしに根付く本性とは、別の言葉で言うと〈うぶすな〉である。漢字で「産土」と書けば、産まれた土地の意味となる。私たちは土に支えられ、生かされている。ただ、私たちの命がお蔭をこうむっているのは、土に限らない。谷川健一は、「若狭の産屋」という論文で、〈うぶすな〉の海とのつながりを説いている<sup>[1]</sup>。

敦賀湾に面した集落で、昔、お産のとき産婦のこもった小屋が残っていた。この「産屋」は畳を敷かず、海から取ってきた砂を敷いた上に、藁やムシロを重ねる。その砂を「うぶす

な」と呼んでいたのだ。この話は、古事記などにある豊玉毘売<sup>トヨタマヒメ</sup>の話に通ずる。トヨタマヒメは海の神の娘で、火遠理命<sup>ホオリノミコト</sup>（山幸彦）の妻となったが、お産に臨んで海のそばに産屋を建て、中でワニ（鮫）の姿となって子どもを産んだのだった。

土は、水とつながっている。私たちもまた、土だけでなく、海、空、水をはじめ動植物、他の人びとなど、あらゆるもの、森羅万象により〈お蔭様〉で生かされている。死んだあとも土に帰るとは限らず、水葬も風葬もある。私たちをとりまき、産み育ててくれたもの、そして帰ってゆくところ、それらのすべてが〈うぶすな〉なのだ。ここに立ち返る構えで、トランスパーソナルを進められないだろうか。

【註】 荻原哲郎氏にお教えいただいた。お礼を述べておきたい。

## 〈うぶすな〉を語る「やまとことば」

「本源」ないし〈うぶすな〉に立ち返るには、言葉も大切である。近ごろでは、英語を公用語にする企業がある。会社は儲ねばならないから、金に目がくらんでも、まあ許せる。だが、英語で授業をする大学が増え、高校にまで及んでいるらしい。外国の言葉で教育するなど、自から進んで植民地になるに等しい。なんと文部科学省さえが、会議で英語を使うことにしたそう。こんな役所に率いられた日本の教育の先が思いやられる。

私たちは日本語で育ち、日本語を使って暮らす。いくら勉強しても、外国語でじっくり来るはずはないのだ。決まった言い回しが多い科学論文や商取引きの文書なら、外国語でも不自由なだろう。だが、気持ちや考え、心がけなら、身に添った言葉でないと空回りする。外国語をカタカナで書いても、日本語にはならないのである。

さらに日本語のうちでも、日本語らしい日本語とそうでないものがある。例えば「思想」とは、別の言い方では〈心構え〉となり、その方が体に響く言葉だ。「思想」は漢語、〈心構え〉が「やまとことば」である。「やまとことば」は、漢字と中国語が入る前から日本列島で使われていた言葉、またその後、ここ日本で育ってきた言葉だ。これを使わない手はない。

「やまとことば」は分かりやすいが、語源を調べても不明なものが多い。目、手、足、水、火、石、走る、鳴く、うまい、怪しいなどの基本的な語彙、それに「てにをは」などが日本語の芯をなす。外国語のとの共通性もまず無いので、派生したのではなく「湧いて出た言葉」と言えよう。古事記、万葉集や源氏物語などを作り上げているのもこれで、多くの言葉が、記録こそないけれど、縄文時代から使われ続けてきたに違いない。昔話も、この言葉で言い伝えられてきた。だから意識の表層に留まらず、私たちの心の深いところにも寄り添うのだ。

子どもに話しかけると、私たちは概ね「やまとことば」を選ぶ。それはこの言葉が親しみやすく、分かりやすいと感じられるからだ。迷子がいたら「お名前は？おうちはどこ？」とたずねる。「住所と氏名は？」とは言わない——職務質問でもあるまいし。漢字で言えば訓読みが「やまとことば」である。音訓の区別は小学生でもできるが、憶えているのではない。直感で分かるのだ。

「やまとことば」はあまりに日本的で、外国との交流を妨げると言う人もいる。だが、そんなことはない。上田敏は訳詩集『海潮音』で、ほぼすべて「やまとことば」のみを用い、フランス、ドイツ、イギリス、イタリアの近代詩を翻訳して見せた。

山のあなたの空遠く　さいはひ住むと人のいふ

秋の日の　ヴィオロンの　ためいきの　身に

しみて　ひたぶるに　うら悲し

などは、多くの人々の記憶に残っていよう。翻訳のみごとさに加え、「やまとことば」の味わいが、私たちの暮らしの息づかいを折り込んでいるからこそ、名訳となるのだ。

「やまとことば」は論理性に乏しく、学問的な議論に向かないと言う人もいる。これもまた、間違っている。「やまとことば」にはそれなりの、筋道の流れがある。これに沿って学問を築けば、日本独自の、世界に誇れる研究が産まれるはずだ。世界遺産の富士山と同じで、余所に無いから貴重なのだ。それでこそ真の意味での国際化となる。

さて、この「やまとことば」で、私たちのトランスパーソナル心理学／精神医学を名付ければどうなるか。しいて言うなら、「やまとごころ」だろう。ここではその「やまとごころ」のうちから、先の三つの「しがらみ」をほぐすため、〈お蔭様〉〈お互い様〉〈おのづから〉の、三つの心を取り出す。「しがらみ」を取り払えば三つの「やまとごころ」がひとりでに浮かび出てくる、と言ってもよい。

三つの「しがらみ」を三つの「やまとごころ」で置き換える仕度を、次で試みたい。

## 二 〈一つ掲げ〉より 〈お蔭様〉

### 『黒子のバスケ』事件と 〈一つ掲げ〉の罫

解くべき「しがらみ」の一つ目は、〈一つ掲げ〉だった。高く掲げる一番は強く、凛々しく、たくましく、正しく、美しい。輝かしく目立つ「唯一」のこれさえあれば、世界が成り立つかのように言われる。「絶対」の価値だから、誰からも文句は言わせない。現代の日本に増殖している〈一つ掲げ〉の代表に、新自由主義の思想を挙げてもよからう。別名はアメリカンドリームだ。

しかし、掲げるには下に台が要る。下あってこそ上があるけれど、〈一つ掲げ〉は上下関係の仕組みでもあるから、勝ち負けをつける格差社会の思想となるのだ。——強いから勝ち、弱いから負ける。負け組はおとなしく低賃金で働いて、命をすり減らせ。悔やしかったら一番になれ。負け犬の遠吠えはやめよ！

この思想をわかりやすく、絵解きしてくれた出来事がある。平成24年10月に起きた『黒子のバスケ』脅迫事件である。人気漫画をめぐり大学や書店、コンビニ、イベント会場などに脅迫を繰り返した。犯人は売り場からの本の撤去、サイン会などの中止を求め、従わなければ食べ物に毒を入れる、会場を爆破するなど脅した。このため万一に備えての商品の撤去、イベントの中止、警備の拡充などで多額の被害が出た。マスコミでは評論家や心理学者が、あれこれ動機や犯人像を推測したのだった。

やがて容疑者が逮捕された。その人、渡辺博史は、逮捕直後の写真でうす笑いを浮かべていた。そして「負けました」と、奇妙に思える言葉を口にしたのだった。初公判を傍聴した評論家の江川紹子さんは、渡辺被告の「負け組」意識の強烈さに圧倒されたそうだ（ツイッター2014/03/13より）。愛すること、努力すること、自立して生きることも許されない、理不尽な罰が自分に与えられている——これが、彼の味わってきた「感覚」だったという。被告人意見陳述には、この心情がこもっていた。

上下の差別がしっかり出来上がり、下の者はひたすら惨めを味わう定めが、この被告にはずっと当たり前にかかっていた。もちろん、これは彼の認識で、そのまま事実ではない。しかし渡辺被告が、このような思想を生い立ちの中で抱くに至ったこと、これが重要である。〈一つ掲げ〉の罫にすっぽり落ちた彼を育て上げる力が、日本に入り込んでいる。

次の疑問が出てくるかもしれない。——〈一

つ掲げ〉で掲げられているはずの「一つ」、つまり上の者はどこにいるのか？ だが、彼を追い詰めたのか？ 掲げられた「一つ」など、どこにも無いではないか、と。しかし、脅迫事件を起こした渡辺被告にとって、掲げられた「一つ」はたしかに有ったのだ。彼はこう告白する。

自分は人生の行き詰まりがいよいよ明確化した年齢になって、自分に対して理不尽な罰を科した「何か」に復讐を遂げて、その後自分の人生を終わらせたいと無意識に考えていたのです。（篠田博之による報告 <http://bylines.news.yahoo.co.jp/shinodahiroyuki/20140315-00033576/> 引用は以下同じ）

「何か」が必ず有って、すべての力はそこから出てくる。〈一つ掲げ〉の思想が、そう思わせていた。「一つの何か」が、彼の心の内に居座っていたのである。

渡辺被告は逮捕時に、「負けました」と口にした。彼は勝負事をしているつもりだったらしい。まさに「一つの何か」との人生を賭けた勝負に、ついに負けの確定宣言をしたのだという。「反省はありません。反省するくらいなら最初からやりません。謝罪もいたしません」。一部の報道が伝える「ごめんなさい」は、誤報かねつ造だと、彼は断言した。そしてこの事件を「人生格差犯罪」と名付けた。

被告は自からを「人生の駄目さに苦しみ、挽回する見込みのない負け組の底辺」にいる被害者と確信していた。格差があって、自分がいちばん下なのは、はっきりしている。だが、それだけでは足りない。上から押さえつけ、罰を与え、苦しめる「一つの何か」がたしかに有る。その正体を見たい……一番上には、誰がいる？ —— そう彼は、問わざるを得なかったのでは

る。

ところが、あがいているうちに「代わりになるものが見つかってしまったのです」と、彼はさらに語る。たまたま、彼の求めて得られなかったすべてを持つ人物が見付かってしまったため、この「代わりになるもの」に彼は怒りをぶつけた。高く掲げられた「一つ」は、ほんとうは見付かっていない。『黒子のバスケ』を描いた藤巻忠俊氏に何の落ち度もないのは、渡辺被告にも重々わかっている。けれど、かりそめにも、いちばん上の「一つ」を作らなくては納得がゆかない。これこそ、〈一つ掲げ〉の罫なのだ。

渡辺被告の陳述を掲載した篠田博之氏のブログには、読者からの書き込みがある。これを読むと、被告陳述への世の中の受け止め方がわかる。傾向は、大きく二手に分かれる。彼の言葉を聞いて身勝手と怒ったり、みっともないとバカにする人がある。例えば、こんなふうだ。

自分でも言ってるけどクズすぎ。こんなにまで最悪なのに、まだプライドや自己顕示欲を感じる。モンスターだな。社会不適合格者。刑務所から出てくんな。(三富基永)

気持ちが悪い。目の前から、世の中から消えてしまえという。最悪とわかっているくせにまだ欲望があって這い上がりたいたいのだ、と解釈している。この書き込み主は、「上から目線」をきびしく注いでいるが、それこそ〈一つ掲げ〉の眼差しに他ならない。だから彼は、渡辺被告を非難しつつも、そのことばに裏付けを与えているのだ。

他方、被告をあながち非難できないと感ずる人もいる。ブログには、陳述書に書かれた気持ちにはよくわかるとの書き込みの方が、ずっと多いのだ。

なんだか、社会的に権威ある人の手記よりも、こういった、捕まった人の手記の方が、読んでいて、すんなりくる。(小杉崇夫)

意外とわたしもこういう精神状態ストレスのところに生きてるのかもね  
ってくらい(読み物として)スッキリする。  
日本の闇は私自身だわ (角田美里)

彼の文章に心打たれる人がたくさんいて、自分の気持ちを代弁してくれたと受け止めている。渡辺被告ほどには追い詰められていないし、行動に移そうとも思わないが、それでも彼の心の痛みは共にできるのだ。

渡辺被告を咎める人も、気持ちが分かる人も、ほんとうはそんなに違わない。いずれも〈一つ掲げ〉を自分に取り込んでいるからである。見下すか見下されるか、上からの目線で責めるか責められるのかの違いに過ぎない。攻撃と同情は、方向の違いでしかない。

「日本の闇は私自身だわ」と書いた角田美里さんは、自からの心を振り返りつつ、同じ闇が日本全体に広がることにも気付いている。なんだかわからないが、ともかくもう「上で」決まったから、つべこべ言わずに従う他はない——こんなふうだ、不満を抱えつつも諦めて暮らす人が多くなっている。過労死や鬱の温床だが、「上で」決まったと考える人はそこに、渡辺被告と同じく、正体不明の「一つ」を掲げている。〈一つ掲げ〉が当たり前になってきたとは、こういうことである。

### 「見えない宗教」と「唯一」のおかしさ

新自由主義をはじめとして〈一つ掲げ〉が西洋で強いのは、西欧精神の屋台骨をなすキリスト教の教義がそうになっているからである。キリスト教は「一神教」を名乗り、西洋では、日本人からは想像が難しいくらいに、社会の仕組み

や人びとの考え方の根もとに食い込んでいる。西洋思想には「唯一」「絶対」「完全」などがよく登場するが、〈一つ掲げ〉で掲げられる「一つ」は、それらをひっくるめた働きと言えるのである。

ものすごく大事なものが「一つ」だけある。つまり「唯一」だ。その「唯一」の何かを、立派だ、すごい、究極だ、至高だと褒めそやす。しかもこの「一つ」だけですべて片が付く、これだけで世界が成り立つと考える。「唯一」だから「絶対」で、「完全」となる。他は無くてもよいが、添え物として居させてやっているのだ。〈一つ掲げ〉とは、こういう「唯一」の何かを掲げる思想だった。

キリスト教では、この「一つ」が「神」となっている。すなわちキリスト教は〈一つ掲げ〉の宗教で、また〈一つ掲げ〉はこの宗教と係わりが深い。両者がニワトリと卵の関係になっているので、西洋で優勢を保ち続けられるのだ。

なんでも一つで済んでしまうと、昔の日本人にとって驚きだった。内村鑑三は明治時代に、札幌農学校で聖書を学び、キリスト教徒となった。著書『余は如何にして基督信徒となりし乎』には、あちこち神社、神様に義理立てしなければならぬのがやっかひだったから、と書いてある。一柱の神様だけを拝めばよいとは、たいへんな便利だった。

ふつうに考えれば、「唯一」の何かだけで世界が成り立つはずはない。「一つだけ」と言ったら、もう「二つめ」が思い浮かんでいる。「一杯だけ吞もう」となれば、けっきょく二三杯は吞む——甘党なら「もう一個」だ。日本人は理屈をこねずとも、〈うぶすな〉の暮らしの中でずっとそう心得てきた。立派だと褒められるものは、必ず他と比べて「一番」だとみんな知っている。「究極」でも「至高」でも、比べるから言えるのだから、「絶対」ではなく

「相対」で判断している。

そう考えれば、「唯一」「絶対」だと言い張る意味が、見えてきそう。つまり、ほんとうは相対なのに比べる相手を、二番以下を消そうとしているに違いない。出ないように押さえつけ、他を押しよける動きなのだ。こういう無理押しには、必ず争いのタネが隠れている。

キリスト教では、「唯一の神」だけで宇宙が成り立つ。この神が万物を、「虚無から創造」したからだ。神はすべてを「虚無」から、何も無いところから創り出せるという。そこでこの神は、別名が「存在」だったりする。「存在だ」とは、なんでも一切がっさいとの意味だ。「である」は、何に付けても意味が変わらないから何にでも付けてよく、およそ有るものはすべて飲み込む。なるほど、比べようのない「唯一」かとも思われよう。（ほんとうは、「存在」と「有る」は違うのだが、ここでは触れないでおく。）こうした考え方が、西欧の隅々まで染み透っているのである。

なるほど西洋諸国は、政教分離を掲げている。しかしこれは、正確に言うと「政府と教会との分離」でしかない。特定の宗教団体に肩入れしないことに過ぎず、宗教そのものをひいきしない意味ではない。キリスト教は、西洋のほとんどの国で、事実上の国教となっている。

アメリカの大統領が、キリスト教の聖書に手を置いて就任宣誓するのを思い出してほしい。ドイツやオーストリアでは、教会税という税金がある。国家がキリスト教の信者から徴収し、あちこちの教会に分配する。国家が、キリスト教の手先となって動いているのだ。宗教嫌いが多く、それでも種々雑多な宗教が入り乱れる日本にいと、なかなか分かりづらいところである。フランスでは「世俗主義」を制度化しており、公共の場で宗教を宣伝できないことになっている。そこでイスラム教のスカーフが着用禁止になった。ところが、十字架は付けてもよい

のだ。

表向き宗教と無関係に見える思想や活動にも、キリスト教の影は濃いのである。かつてガリレオは地動説を科学の真理として、教会と争った。だがこのとき、ガリレオはキリスト教を批判したのではなかった。神の教えを正しく理解すれば地動説になる——そう彼は考え、自分こそ正しいキリスト教信仰を抱くと自任して、ローマ法王庁との喧嘩に及んだのだった。真理が「一つ」なら、妥協は許されない。この「一つ」から外れれば、キリスト教は誤りの道を進む他ない——けっして「科学の真理」を振りかざして宗教を攻めたのではない。むしろ、キリスト教を護るための闘いだったのである。

このように西洋では、「絶対」で「完全」の「一つ」が、あらゆるところに君臨している。そして西洋人たちは、これを「普遍的な真理」と称し、世界中に押し付けようとする。私たちの〈うぶすな〉には毒として働くから、用心せねばならない。

### 〈お蔭様〉が無ければ「恩知らず」

「唯一」のおかしさは、明らかになったと思う。〈一つ掲げ〉とは、この「一つ」にもう一つ成分「掲げ」を加えたものだった。こんどは、「掲げ」について考えよう。〈一つ掲げ〉は、上から下に順番を付ける「序列化」の思想でもあった。

〈一つ掲げ〉は「唯一」を持ち上げつつ、「二つめ」以下を消そうとしている。「二つめ」が出て困るのは、ほんとうは「二つめ」以下のお蔭なのに、受けた恩を忘れていて、ないし隠そうとしているからに違いない。それを難しげな哲学や立派そうな教えに仕立てるけれど、無理がいつまでも通るはずはなく、しぶしぶ「二つめ」以下の登場も許さざるを得ない。このとき、序列化が始まることとなる。

〈一つ掲げ〉の思想の現代版＝新自由主義は「一番でなければ負けたんだ」と言う。新自由主義での、二番から下の役割は何だろう——二番から下は、一番を作るためにあるのだ。「一つ」を高く掲げるには、低い何かを土台に使う。すなわち、引き立て役を動員しているのだ。すると、負け組として蔑まれる二番から下の働きは、じつはけっこう大きいではないか。

「一つ」は、二番目以下のお蔭をこうむっている。〈一つ掲げ〉がはびこってきたとはいえ、日本人はまだこのことを忘れていない。なにか褒められた人は、けっして「イエイ！俺が一番だぜ」などと自慢しない。大関三十一場所目で久々の国内出身横綱となった稀勢の里は「声援はありがたかった。いろんな人の支えがあって、ここまでこられた」と涙ぐんだ（夕刊フジ平成29年1月24日）。社交辞令が含まれるにしても、こうした社交辞令の通用する世の中には、潤いと安らぎがまだしも残る。日本の〈うぶすな〉は、腐りきっていないのだ。

〈一つ掲げ〉を極めれば、低い者はただの負け組となる。「名誉ある敗者」ですらなく、劣った、悪くて醜い、嘘つきで愚かで、自己責任で落ちていった、などとバカにされるのだ。それをちょっとひねって言ったのが、あの「貧しくなる権利」である。

稔るほど 頭を垂れる 稲穂かな

日本の〈一つ掲げ〉が進んでゆけば、これがそのうち「過剰在庫を抱え、鬱を発症した状態」などと解釈されるのかもしれない。このとき勝者は、掲げられてこそ今があるのを忘れ、「恩知らず」となる。頭を下げるべき相手などおらず、たくさん儲けた者は、世界の「普遍的価値」を作り出したから勝てた。「自立」した個人の努力の成果だ——〈お蔭様〉の考えがないと、こうなってしまうであろう。



西欧諸国の植民地支配の理屈もこれだった。キリスト教世界が侵略を繰り広げたのは、「唯一」の神の「絶対」の「栄光」を世界に広げるためなのだった。強欲な商人や戦さ好きな軍人が勝手な理屈をつけただけ、とは言いきれない。至高、究極の「普遍的な真理」を追求する学問こそ、この暴虐の指揮をとる演出家だったからである。植民地主義の全盛時代には、黒人は人間か猿かが高尚なアカデミズムの重要な争点で、白人こそ人類の最高の進化形態との研究も、さかんに出回った。人種としての最高の「一つ」が白人というのだから、ここにも〈一つ掲げ〉が働いていたのである。

文化人類学者たちは、「未開の奥地」に勇敢にも入り込み、「野蛮」な民族についての報告書を上げ続けた。「未開人」がどれほど、どんなふうに遅れ、劣っているかを報告したのは、植民地支配を滞りなく進めるための助言でもあった。心理学者の解釈からわかったのは、「未開人」たちは未熟な子供や精神病患者と同じような、「自己中心性」を備えていることだった。「自分勝手な妄想を抱いている野蛮人は、無知な子供や狂った精神病患者と同じだ。だから、教育か矯正が必要だ」とまとめられる。非西洋のんびりとへの無礼に他ならず、子供や病者への差別、抑圧でもあるが、それを一流の学者たちが唱えたのだ。

強く、美しく、善なる最高の白人が支配すれば「土人」たちも幸せだ——最高の知識人たちが、本気でこう考えていた。いや、これは過去の話ではない。いまでも、本音ではこう思っている白人が多い。『大きな木』はそれを皮肉ったのだった。心理学説も、見かけを変えただけで、骨組みは同じなのだ。

「土人」たち、つまりアフリカの「黒ん坊」やアジアの「黄色い猿」は、劣っていたから支配された。なぜなら、みんな同じ「ルール」で戦い、同じ基準で測ったのだから公平なのだ

——「普遍的」な価値から見れば、こう解説せざるを得ない。日本もかつて「脱亜入欧」の旗を掲げ、中国や朝鮮を相手に、西欧と似たことを試みた。その反省を活かすためにも、このような構えで「スペクトル」の階段を登ってはなるまい。

踏みつけられた者は恨み、怒る。あるいは、絶望に打ちひしがれる。〈一つ掲げ〉はそうやって、気分の悪さを世界に広げてゆく。「普遍的価値だ」などという宣伝に乗らず、足許の〈うぶすな〉を大切に、深めて行きたいものである。

## 二つの「完全」性と「能動」「積極」へのこだわり

〈一つ掲げ〉がいかに不幸でも、はまり込んだら生き抜かねばならない。そのために西洋思想は、「完全」を求める。アメリカの国技・野球では、「完全試合」がピッチャーのあこがれだ。学問も西洋では同じで、「完全性の証明」が、論理学の重要課題となっている。論理学で「完全」とは、すべての式を証明できることだ。大風呂敷だが、これができてこそ学問の真理と考えられてきた。だから百年ほど前に「不完全定理」で、述語論理学が完全でないことが分かったと、大騒ぎになってしまった。論理学だけでなく、学問の理論は「普遍的」なのがよい、つまりいつでもどこでも「完全に」当てはまってこそ上等とされるのである。

さて、「完全無欠」と言うが、じつは「完全」には、異なる二つの意味がある。一つは「欠点がない」こと、「なによりすぐれて、悪いところはまったくない」意味だ。野球の完全試合は、ヒットを打たれたり出塁されるのを含まない。都合の悪いものは無しにしたピカピカの一番で、これを〈選りすぐりの完全〉と呼ぶ。

ところが「完全」にはもう一つ、〈丸抱えの完全〉がある。「完全無欠」なら、何も落とし

てはならない——そう考えれば、都合の悪いものでも含んでの完全となるはずだ。「清濁あわせ呑む完全」とも言え、論理学の例はこちらの方に当てはまる。「完全性」実現のためには、間違っただけは「間違っている」と証明せねばならないからである。

〈丸抱えの完全〉と〈選りすぐりの完全〉は両立しがたいが、ふだんの暮らしでは、二つを適当に混ぜ合わせて使っている。論理からすればおかしいが、生きてゆくうえでは、理屈にこだわらなくともよい。だが、具合の悪い場合もある。二つをずるく使い分けるときである。「お客様を大事にします」と言われてその気になっても、ほんとうは「金持ちのお客様」だけが大事にされたりする。景気がよくなってみんな儲かりますよ、と言われて投票すると、金持ちだけが儲かり、貧乏人はますます貧しくなる。新自由主義は、勝ち組だけを「完全な人間」と扱うからである。

日本人を育ててきた〈うぶすな〉には、もともとこんな考えがない。人間は不完全に決まっているのだから、身の程をわきまえて、ぼちぼちやればよくはないか——ずっとこう考えてきた日本でも、近ごろは「なるべくなら完全がいい」と思う人が増えている。しかし、「高い理想」は踏みつけの足場を求めがちになる。持ち場の分別、分際はあるにせよ、踏みつけたりせず、〈お蔭様〉を忘れないでこそ世の中が丸く収まる。

そう考えてきた私たちだから、「完全」と言われればつい、〈丸抱えの完全〉を考えなくなる。そこで騙されて〈選りすぐりの完全〉を押し付けられがちになるから、気をつけたい。〈選りすぐりの完全〉の求める「良いもの」「優れたもの」のうちでも、西洋でことに重んじられるのが「能動」「積極」「創造」などと呼ばれる押し・出しの構えである。「受動」「消極」「継承」など、すなわち受け、引き、守りなど

なのは排除すべき「よからぬもの」となる。これも近ごろありがちな落とし穴である。

しかし、ちょっと考えてみれば、そう言い切れないのはすぐに分かる。攻めに徹しようと、サッカー選手がみんな相手ゴールに殺到したら、裏をかかれカウンターで失点するに決まっている。守りも大事なのだ。柔道で受け身を覚え、積極的に投げばかり稽古すれば、大怪我をするか、命を失うだろう。

そもそも「完全」など、求めるには及ばない。だが、どうせやるなら〈丸抱えの完全〉が、私たちの〈うぶすな〉には似合うだろう。二つの異なる「完全」の区別はしっかり心得たいところである。

### 「虚無からの創造」

〈一つ掲げ〉の「一つ」にあこがれれば、〈選りすぐりの完全〉を求めてしまう。国木田独歩のような人をそこに引き込み、近現代の日本人を脅かす理論的な仕掛けとして、「虚無からの創造」を考えておきたい。

能動・積極の重んじをいちばんよく示すのが、「創造」へのこだわりである。他に頼ることなく完璧に「自立」し、したがって〈お蔭様〉無しで、自からの能動性のみで事を成すのが「創造」に他ならない。「創造」を重視する人は、初めてでないと欠陥があり、「完全」でないと思いたがるのである。けっして疑いようの無い「真理」ではないのだが、二千年ほどの長きにわたって西欧に染み付いた思想の癖となっている。

「創造」の大きさをなすが、「虚無からの創造」という思想である。取りまとめたのが、ローマ帝国末期にキリスト教教理の基礎を作りあげたアウグスティヌスであった。国木田独歩を驚かせたこの人物が、様々なキリスト教分派のどこでも尊敬を受けている。「虚無からの創造」はこの宗教の根本教義となり、今に至

るまで続くのである。

天と地を造るため、あなたは手に何かを持ってはいなかった。あなたの造ったのではないものが、何かを造るために、あなたの手にあるはずはない。どんなものも、あなたがいるからこそ、有るではありませんか？（アウグスティヌス『告白』）

天地を創造するとき、神様は素手で造ったに違いない。もし材料・素材を使ったのなら、何が神よりも先に「存在」していたので、神は「初めての存在」でないことになる。二番手の「汚名」となるし、受け身に回るから「能動」にも傷がついてしまうのである。キリスト教の神は別名が「存在」で、もし何かの有れば、それは神自からか、または神に由来するのでなければならない。そこで、すべてに先立って「存在」する神が、なにも無い「虚無」から世界を創造したのだ。

これが「虚無からの創造」説である。「先立ち」にこだわる様に、〈一つ掲げ〉がよく表われているであろう。もし、材料・素材が先にあったなら、受け取ったことになり、「支配された」ことになる。これが恥ずかしいので、「絶対受け取り拒否」のため、何も無い＝「虚無」と言い立て、受けようにも受けられない筋書きを作り上げたのではないか。

材料・素材が先にあった〈お蔭様〉で世界が造れた、とは決して考えないのである。〈一つ掲げ〉はもともと「一つ」だけで済ませたいので、「二つめ」が後から来てさえ邪魔になる。まず材料・素材を作り、それから森羅万象を造ってもよからうが、それでは手間が増える、ないし無駄な手順が加わると思えるのだろう。そこで材料を「虚無」と呼んで、消してしまったのである。

## 「虚無」からの「存在のハシゴ」

世の中が神と「虚無」とだけで出来ている訳ではなく、天地万物が控える。「一つ」だけで済ませるわけには行かないが、「一つ」に並びかけるものがあってもならない。そこで下に踏みつけ、さらには序列を作ることで上からの支配に組み入れ、掲げられた「一つ」の位を脅やかされないようにする。

その仕組みを指す言葉が「存在の大いなる連鎖」で、次のような意味である。——最上位は「存在」そのものの神で、最下位は「虚無」だが、これだけでは終われない。森羅万象で満ちた世の中だから、上下二つの間には三つ目以降も定まるはずだ。「虚無」ではないけれど、輝く「一つ」には遠く及ばず、踏まれる者たちに違いない。このとき踏まれ方には程度の差があるはずだから、鎖のように連なり、一列の順番が出来上がるはずだ。

「自然は真空を嫌う」との思想が、古代ギリシアよりこの方、西洋の慣らいとなっている。なぜか隙間の出来るのを嫌うのだ。このため、最高の「一つ」に最低の「虚無」が向き合えば、それらの間は、隙間なく埋まるに違いない——こういう思想が出てきて、「存在の大いなる連鎖」と呼ばれたのである。ケン・ウィルバーがこれに賛意を示したのは、驚くべきことである。

「存在の大いなる連鎖」は、別名を「存在のハシゴ」とも言う。ハシゴは上り下りするためのもので、踏み段の上下を順番どおりに踏んでゆくしかない。したがって「存在のハシゴ」のほうが、〈一つ掲げ〉の思想をよく表わすと思われる。そこで以後は、「存在のハシゴ」を使うことにしたい。

こうした思想が西洋には、とても古くからある。中世キリスト教スコラ哲学の大神学者トーマスは、次のとおり述べている。

もし被造物のあいだに、他よりも善いという仕方善さの程度がないなら、創造の最高の善は失われてしまう。……「天使は石より善い<sup>い</sup>のだから、二人の天使のほうが天使と石とに勝る」などと言う者は、推論を誤ったのだ。(『真理論』)

二人のうるわしい天使が並び立つより、一人の天使と引き立て役の石の組み合わせに軍配を上げる。差をつけて見下せる格差があつてこそ、「最高」なのだ。「下見て笑えの人生観」と言つてもよからう。石が「善く」ないかどうか、すでに大いに疑問なのだが、その点は次に述べよう。

生物の分類学は、「存在のハシゴ」が手軽にわかる例となる。人間を最上位に、すべての生き物を一列に並べるのが、十七世紀ごろまでの常識だった。「唯一」で別格の支配者はもちろん神だが、その下で高貴な天使が空を舞っている。しかし、汚れた地上に降りると、人間が支配者なのだ。猿がその下で、四足獣、鳥、魚、昆虫と、人間から遠いほど下になり、植物はもっと下だ。さらに下には鉱物、土、水、大気といった無生物を置く。単純から複雑に向かうとの原理に従い、すべてが一直線の「存在のハシゴ」に組み上がっていたのである。

天使の下が人間なので、「万物の霊長」なる人間中心思想の元もここにある。さらに、「ハシゴ」で人間の下<sup>した</sup>のものは、すべて人間のために創られたというのだ。例えば、馬は人を乗せるためにあるので、乗りやすい姿をしている。牛肉がおいしいのは、神様が人間の食糧として創造されたからだ。『存在と時間』のハイデガの思想が、これの焼き直しなのは見やすいところであろう。

この生物分類体系は、改訂を受けて今に連なっている。一列のハシゴでは無理なので枝分

かれさせたけれども、「高等」から「下等」に序列づける考えの基本は変わっていない。神学は上下を固定していたが、序列を時間に沿って動かせば進化論となる。キリスト教保守派が反対するとしても、けつして「中立・普遍・客観の科学」ではないのである。

私たちの〈うぶすな〉では、こんなふう<sup>う</sup>に考えなかった。動植物もときに神となり、敬い、〈お蔭様〉を思うべきものだった。それどころか、トーマスがいちばん見苦しい引き立て役として天使の横に置いた石も、また神なのである。彼にかぎらず、西洋では多くの思想家が、石をダメなものの代表と扱っている。

ところが〈うぶすな〉では、磐座<sup>いわくら</sup>などとも呼ばれる石神を、いまでも全国至るところで祀っている。岩手県遠野の「続石」、宮城県丸森町の「立石」、茨城県の鹿島神宮にある「要石」、兵庫県西宮市の「甑岩」<sup>こしきいわ</sup>など、まだまだいくらかもある。和歌山的那智滝は巨岩でもあり、広島<sup>ひろしま</sup>の宮島は靈石に満ちている。沖縄随一の靈場「セーファ御嶽」<sup>うたき</sup>は、巨岩のすきまにある。私の家の近所の天ヶ台山にも見上げる大きな岩があり、下のくぼみには拝み所が設けてあるのだ。

「存在のハシゴ」では人間が威張っている。天使や神に敵わなくとも、地上では「支配者」としてそっくり返る。ハシゴの中段でそんなことをすれば落ちる恐怖が出て、落ちたくないから上下を競うことになる。そこで、人間どうしのあいだでもさらに細かなハシゴ段を作ろうと、「積極性と能動性」を高めようと励むのだ。これが人びとから、ゆとりを奪ってゆくのである。

〈選りすぐりの完全〉を求めて進み、昇れば昇るほどに、落ちる恐怖が増す。選りすぐりで「完全」たろうとすればするほど、足を踏み外す機会も増える。どんな些細な欠陥でも、一つあれば「完全」を否定するに充分だからであ

る。「虚無」の設定は、この恐怖を乗り越えるためでもあったに違いない。もっとゆったり構え、いただけるものはいただき、お受けしたものに有り難く〈お蔭様〉を思えばよさそうなものである。

### 〈お蔭様〉の歪みとしての「ニヒル」

ところで「虚無」とは何者だろう？——むずかしい問いである。なぜなら、「虚無」（ラテンでは「ニヒル」）とはもともと「何者でもない」はずだから。けれどもちゃんと名前がついて、「存在のハシゴ」を、一番下でしっかりと支えている。ほんとうは「虚無」の〈お蔭様〉で、〈一つ掲げ〉は成り立っているのだ。

キリスト教の神は「虚無から」世界を創造したのだった。これを一ひねりすると、「世界の材料・素材は虚無＝ニヒルだった」とも読める。もしそうなら、「虚無」なしに「創造」は成らなかったし、後先争いでも先になるから、神様より偉いのかもかもしれない。「虚無」は名前に似合わずありありとしており、西洋で「ニヒリズム」が問題となるのはこのためである。建て前としては「ニヒル」は無いのだが、もし〈お蔭様〉が目立ってくると、蟻の一穴で〈一つ掲げ〉の秩序は崩れ去る恐れがある。

ありありした「虚無」が、悪そうなことは何でも引き受けてくれる。いや、積極・能動派の勝手な想像によって、引き受けさせられる。「虚無」は、いじめられっ子のようなものと言えよう。ただ、さらに「悪い仲間」も呼び寄せる。いや、ここでも「存在」が積極・能動で動き、仲間を新しく作ってやる。孤独ないじめられっ子とは違うところだ。「虚無」に味方する者、または近い者がつぎつぎと数え上げられ、みな「存在のハシゴ」のなるべく下の段に押し込まれる。

だから、自分から進んで「ニヒリスト」を名乗る人はまずいない。「存在」の側、つまり

「ニヒリストではない」と自任する側が、気に入らない相手に貼り付ける札となっている。自分たちこそ「絶対」に、善いと正しいと考え、この立場を「存在」とする。だから、気に入らない相手が「虚無」となるのだ。

「虚無」＝「ニヒル」は「何者でもない」はずなのに、「存在」のれっきとした対極をなしにしている。すなわち、「絶対」が建て前の「存在」に向き合う相対性の担い手なのだ。対の相手がある「絶対」とは「曲がった直線」のようなもので、もともと成り立ちようがない。しかもこの「虚無」は、キリスト教の神の相手役を演じるのだから、この宗教の「準主役」とさえ呼べるのである。

ふたたび、『黒子のバスケ』脅迫事件の渡辺容疑者が思い出される。「ニヒリスト」の言葉こそ使わないが、内容からすれば、ほとんどこれを自覚した人物なのだ。彼は「人生の駄目さに苦しみ挽回する見込みのない負け組の底辺」と自からを語り、「存在のハシゴ」の底辺にいて、「虚無」と接する自覚がある。そうなったのは、自分が「悪い」からなのだ。悪事を企んだからではない。「ほとんど虚無」と言ってよい無力な、出来の「悪い」生まれなので、「悪い」暮らしに沈んだ。それが、理不尽な「罰」なのだった。

渡辺被告だけが「悪い」のではない。他にもたくさんの人たちが、「能動性と積極性」で踏みつけられ、感謝さえ受けられずに、光り輝く「一つ」を「存在のハシゴ」の底辺で空しく支える。そのうちでも際立った者が犯罪者や「精神異常者」となる。〈一つ掲げ〉は「九九パーセントの虚無主義者」を作り出す、と言ってもよい。「一つ」は、罪や病みや裏切りによって輝き、それらの〈お蔭〉を受けているのだ。

この有り様を正すには〈お蔭様〉の歪み、ねじれを直すのがよい。「存在」と「虚無」とにも〈お蔭様〉は働いているけれども、「存在」

は「虚無」の〈お蔭〉を受けながら認めず、消そうとする。このため「虚無」は「存在」のお蔭で、罪と病まいを着せられている。支えることもできる力が、「悪」にまわされ、蔑みを受けているのだ。

掲げられた「一つ」を、素の顔に戻すのもよからう。下支えを受けるからには、「唯一」でも「絶対」でもあるはずがない。〈お蔭様〉を素直に認めれば、ほとんどの病まいと罪とを消せるはずである。

### 「悪」の創造あるいは「想像」

「虚無」とは、西洋文明の底辺に横たわる不気味な謎である。「絶対」の「一つ」だけで万事足りるはずが、じっさいは「虚無」において、無いはずの「二つめ」が、ありありと見えている——ほんとうは、こちらが「一つめ」かもしれない。だから「虚無」という名前が、もう嘘なのだ。〈一つ掲げ〉にとって何か不都合らしいもの、有って欲しくないと思われるものが、確かに有る。それを精いっぱい蔑むため、こんな名前を付けたに過ぎない。すなわち、〈お蔭様〉の歪みに他ならない。

有って欲しくないといえ、**「悪」**もそうである。じっさいキリスト教神学において「虚無」と「悪」とは同じものとされる。「虚無からの創造」の広報者・アウグスティヌスがこう述べている。

私がこれまで「どこから生ずるのだろう」とたずねていたあの「悪」なるものは、実在ではなかったのです。(『告白』)

「虚無」が最大の悪役として、しっかり「存在感」を示す。ものすごい矛盾であるが、キリスト教はこの矛盾を土台にしてしか成り立たない。「虚無」とは、「創造」ならぬ**想像**の産物なのである。トランプ大統領よろしく「気に入ら

ない」とか「お前はダメだ」と叫ぶのが本音だから、「虚無」などと有りもしない名前を付けるより、すなおに「悪」と呼ぶべきだが、「無い」ことにしておきたいからこんな名前を付けた。もし「存在のハシゴ」を転げ落ちてても、底には確かな手応えがあることだろう。

「虚無からの創造」は〈お蔭様〉を歪め、想像上の敵対者を作り上げるのである。しかしこの想像を信じ込むと、想像が想像に終わらず現実に重なる。「気に入らない」で終わらず、ほんとうに**無きもの**にしたくなるのだ。想像上の「悪」に向かって、「虚無」にしてやろうと、現実の攻撃を仕掛ける——これが「正義」の戦いなのである。

オウム真理教の元幹部(車両省大臣)の野田<sup>なるひと</sup>成人氏は、いま困窮者の生活保護申請を手伝い、住居を提供している。一連の凶悪事件には手を染めなかったが、道義的責任を感じての償いだ。野田氏は現役で東大に入り、理論物理学で素粒子論を志した。が、自分の限界が見えたとき、ふと手に取ったオウムの本に引き込まれ、入信したという。その彼が、次のように語った(毎日新聞 平成二十七年三月一五日)。

オウムの中で絶対的な善や正義を追求すれば、それが悪の要因になった。果たしてオウムだけの問題なのかと思う。一神教のように一つの価値観にとらわれればいずれ悪になる。

オウム真理教は麻原教祖を絶対の権威とする集団、すなわち〈一つ掲げ〉の教団だった。素粒子論の研究は最先端の、実用に遠い「純粋な真理」の探求である。これに賭けて敗れた野田氏だったが、「絶対」への渴望は残り、誤った道に迷い込んだ。〈一つ掲げ〉の世界では、優れた知性も、偽りの戦いに駆り立てられる。生の経験から出たこの言葉を、しっかり聞くべき

だろう。

アメリカのブッシュ元大統領が、イラクにあるという想像上の「大量破壊兵器」を追って、現実の大量殺戮を繰り広げたのは記憶に新しい。「大量破壊兵器」は、ほんとうは「虚無」だった。しかし彼は、「虚無」が攻めてくる危険を前に、「受動性と消極性」で手をこまねいてはいなかった。「能動性と積極性」を勇ましく発揮し、敵を無きものにしたのだ。

「虚無からの創造」「虚無主義」そして「虚無との戦い」は、〈一つ掲げ〉の思想をまとめ上げたものである。「虚無」は想像の産物に他ならない。それなら、沈黙を続け、いくら探しても見付からないあの「一つ」もまた、想像の産物に違いない。しかし、ここから生ずる危険は、まぎれもない現実なのだ。

攻撃は「存在のハシゴ」の足許に向かっているが、そこはほんとうは「虚無」ではない。もしかすると、『風の谷のナウシカ』の「腐海」のように、私たちを支える大ともかも知れないのだ。天に唾するより、足許を掘り崩すほうが怖い。〈お蔭様〉の目で私たちの振る舞いを見直せば、「トランスパーソナル」を語り直せるはずだ。

### 三 〈心の囲い込み〉より 〈お互い様〉

#### 科学か歌か

黒船の弾丸以来、日本人の心に残る〈しがらみ〉の二つ目は、〈心の囲い込み〉だった。心は、どこか特別なところだけにあるという。裏返すと宇宙は、心の有るところと心の無いところに分かれるのだ。「脳科学」なる分野がもてはやされ、一般向けの本もたくさん売れている。科学が「心は脳の働きに等しい」と結論づけた——と、多くの人は信じている。これが正しいなら、脳以外のところには心がないこと

になる。

「臓器移植法」なる法律があり、この考えに基づいて「脳死」の人から臓器を取り出している。取られた人はもちろん死ぬが、殺人にならない。脳が死んだら心は消えている、と考えるからだ。〈心の囲い込み〉は、象牙の塔の学説ではなく、私たちの命を左右する局面で働いている。

〈心の囲い込み〉の原則を正確に言えば、「人間に見られる大きく複雑な脳＝心」である。人間の脳の外には心のない「ただの物質」が荒涼と広がるだけとなる。しかしながらこれは、私たちの〈うぶすな〉には違う考え方があった。有名な古今和歌集の仮名序で、紀貫之はこう語る。

花に鳴くうぐひす  
水に住むかはづの声を聞けば  
生きとし生けるもの  
いづれか歌をよまざりける  
力をも入れずして天地を動かし  
目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ

生きとし生けるものが、すべて歌を詠む。心が無くては、歌は詠めまい。よい歌には、天地も感じて動く。感ずるのは、心があるからだ。生物も無生物も、森羅万象すべてが心を備えている。宇宙には肉眼に映らない神も鬼もいる。

こうした考えは、もう古いのか？あるいは、ただの「迷信」だろうか？

いや、自然のうちに心が満ちているとの考えは、いまの日本でも、けっして廃れてはいない。若者たちに聞いてみればわかる。にわかには妖怪ブームが起り、アニメやゲームの売れ行きがすごい。山川草木や、動物、人間の作った器物までが化けて出る。それぞれに思いがこもっているからだ。

「パワースポット」の流行は衰えを見せない

が、「パワー」とは、ここでは心の力だ。歴史の長い神社仏閣をはじめ、霊気を感じるところには、若者たちが訪れる。日本には霊山、霊石など、「無生物」ながら霊気をたたえたところが多い。古くから伝わる場所もあれば、新しく見出される場合もある。妖怪ブームのお蔭で、広島市中心部の稲荷神社が大人気という。「稲生物怪録」の語る稲生武太夫を祭神とするからだそうだ（産経新聞 平成二四年一二月三一日）。

「パワースポット」の条件は、人ではない。その場所に「パワー」が満ちていることだから、人間中心主義は働いていない。この力をもらいに、若い人が動いている。しかし、科学は自然の中の「パワー」を否定する。科学のこの態度には、〈一つ掲げ〉の作った「存在のハシゴ」の影も落ちている。人間の脳を特別に素晴らしいと持ち上げ、他を踏みつけているからだ——ただの「無生物」に、人間を導く力の宿るはずはない、と。どちらが正しいのだろうか？

結論から言っておくべきだろう。もちろん、古くからの〈うぶすな〉の知恵と、そして現代日本の若者たちの方が正しい。〈心の囲い込み〉は踏み破るべき妄説なのだ。トランスパーソナルもそうした知恵を「ブレ」として排除せず、大切に育てるべきと考える。

## 心は脳ではない 1 —— 幻と現実とは違う

〈心の囲い込み〉は、矛盾を抱えており、学説として成り立たない。さきに述べたとおり、ベルクソンなどからもう多くの指摘がある。なんと、二十世紀に脳科学の基を築いたエックルスとペンフィールドという二人の大学者さえ、脳と心とは異なる<sup>い</sup>と明言している。それなのに今の日本で脳科学はまだ、「心は脳の働きに等しい」と宣伝している。不思議な現象と言うべきである。

これを否定する証明は何通りもできる。背理法を使ってひとつを試みると、脳科学説に従えば、「じっさいに見ると幻が現われるのは同じ」となってしまうであろう。日本の「パワースポット」の代表格、富士山を例にとり述べてみる。

いま、あなたが富士山を見ているとする。このとき「心は脳の働きに等しい」（正確には「心とは脳神経による興奮伝達と抑制の活動に他ならない」）と考えてみる。富士山を見る働きは脳のなかにだけある——これを「前提」とする

ここで、富士山を見るのを一時中止しよう。そして仮に、あなたの脳に異常があったとする。そのため脳の神経に、富士山を見ている時とちょうど同じ興奮が起こった、としてみる——するとあなたは、まだ富士山を見ていると思うはずだ。ところがほんとうは、脳の異常でまだ見ていると思い込んでいる。それを「幻覚」と呼ぶわけである。

さて、ここで「前提」に従えば、脳の働きさえ同じなら心の働きは同じなのだから、心の働きは知覚でも幻覚でもまったく変わらないことになる。すなわち、「本物の富士山を見るのと、富士山の幻を見るのとで、心の働きはまったく同じだ」と結論せざるを得ない。「幻と現実とは同じだ」と言うに等しいが、それはおかしい。

おかしい結論になったのは、「前提」が誤っていたからである。

ゆえに、「心は脳の働きに等しい」は誤っている。

以上で、証明は完了である。

ならば、どうやって幻覚と知覚を区別するか——区別は、脳の外に求めるしかなかろう。富士山を見るとは、「富士山を見る」でしかな



い。すなわち、富士山があつてこそ、富士山は見られる——こんな当たり前を無視すれば、学問は成り立たない。

「アフォーダンス」なる言葉が、すこし前に心理学でもはやされた。日本語でわかりやすく言えば「据え膳」となろう。何かを見たとき、振る舞いはそこで終わらず、次に続いている。「見る」ことは、脳が情報を受け取るだけでなく、「音がするかも」とか「匂いもありそう」とか、「触って下さい」などの誘いを含んでいるとする。見えるものは、さわれるものでもある。さわったら見たくなる。さわれば、音も出るだろう。音がすれば、振り向きたくなる……そういう絡み合いが起こっている。しかもこの絡み合いは、相手方のものごとを、すなわち脳の外側を巻き込んで起こるのである。

五感は、脳の中のデータではない。相手方とのやりとりで、互いに支え合いながら成り立つ——「アフォーダンス」はそう説く。アメリカ産まれなので、ハイデガに似た人間中心主義も匂うが、それでも天地万物との〈お互い様〉の心を語っているのである。

## 心は脳ではない 2——山の神は幻か

もういちど富士山の心に戻ってみよう。「現実の富士山」と「幻の富士山」との違いは、富士山という山そのものと係わっているかだった。「富士山があつても、脳が傷つけば見えなくなる」と言う人がいるだろう。これは正しいが、それを根拠に「見る働きは脳だけでできる」と言えば、間違いとなる。脳はある種の心の働きに欠かせないが、それで「すなわち心」にはならない。不可欠は「等しい」ではない。見るためには視神経も欠かせないし、眼球も必要だ。神経が切れても、水晶体が濁っても富士山は見えなくなる。そして何より、富士山そのものについて、同じことが言える。

あなたの脳は、あなたが富士山を見るのに必

要だ。あなたの脳は、そのために働いている。しかしあなたの脳は、他の人が富士山を見るには役立たない。これに比べ富士山そのものは、すべての人が富士山を見るのに必要なのだ。富士山そのものは、すべての人が富士山を見るとき働いており、富士山を見るすべての人の心に含まれていると言ってよい。この働きを「富士山の心」と呼んで、かまわないだろう。

様々な人が富士山の姿を見れば、富士山の心の力がそれぞれに流れ込み、共通の感動を与える。それでこそ「パワースポット」だ。見ることに限らず聞く、さわる、嗅ぐ、味わうを加えた五感が互いに係わりつつ、相手方とやり取りをする。さきに述べた「アフォーダンス」つまり〈お互い様〉の「据え膳説」が当てはまるが、五感だけでなく「思う」も、この〈お互い様〉に加えてよいであろう。

富士山が世界遺産なのは、立派な「自然の」火山だからではない。「自然遺産」としての登録を目指したが、これはうまく行かなかった。明治以降、「そこに山があるから」と軽々しく登る人が増え、ゴミだらけになったからだ。登録できたのは「信仰の対象と芸術の源泉」としてだった。すなわち、富士山をめぐる心の働きがほめられたのだ。西洋人のしたことだから、〈富士山の心〉は認めず、山をめぐる人間の心だけを採り上げた。それでも、ほんとうは富士山に満ちた山の気、「パワー」が、そうした人間の心を動かしたに違いない。

富士山を「信仰の対象」としてほめ、「信仰」する人間を重んじるのも悪くはない。だが、人間の心だけを大事にすると、富士山の心はむしろ粗末にされる恐れがある。ゴミ拾いも、山に教えを乞う修業でなく、ただの「労働」と見なされてしまうだろう。わが国では古くから、山の神を祀ってきた。富士山は山が御神体、すなわち山そのものが神なのである。神様だから心を備えるので、人間が信仰するからではない。

矢作直樹氏は要職にある臨床医で東大教授だが、著書『人は死なない』に数々の不思議な、霊的な話を紹介している。その彼の人生の変わり目を画した体験が、山からの声だった。学生時代、やみくもに登山をくり返し、すんでのところまで死ぬほどの事故に二回も遭った。それでも懲りずにまた登ると、「もう山へは来るな」との声が響いたという。それからパツタリと山登りをやめ、学業に専念する。

矢作氏が聴いたのは、山の神の声に違いない。しかし、信仰心があったわけではなかった。登山を中心に人生が回ってたくらいの山好きでも、「山岳信仰」を実践したのではなかった。むしろ山の神が、教えを伝えるため彼を呼んでいたのだろう。いまは、人の生き死ににいつも直面する救急医療の専門家となっている。

改めて言うまでもないが、日本の山々はすべて神なのだ。それら山の神をお祀りし、力をもらう付き合いを「修験道」と呼んできた。出羽三山、蔵王、鳥海山、立山、大峰山、伯耆大山、英彦山、雲仙、阿蘇山などなど、全国に修験の山が居並ぶ。関西では大峰山、関東では大山に登りお参りして、男は一人前と認められたくらいなのである。富士山は人間が信仰し、描いたから尊いのではない。尊いからこそ人びとが拝み、姿を写したのだ。西洋人たちの考える「自然」とか、物体の有り様とはまったく異なる。

世界遺産委員会が、富士山の「遺産」資格に注文をつけている。山小屋や、物資を運ぶブルドーザーの「ブル道」が見苦しい、五合目の売店など建物のデザインに統一感がない、などという。改善しなければ、認定を取り消すそうだ。遺産候補を調査して委員会に報告する「イコモス (ICOMOS)」なる組織について、静岡県議の源馬謙太郎氏は「イコモスという組織のおかしさに疑問を持つようになりました」と記

す。この組織の調査結果が委員会の決定に大きな影響を与えるので、世界中が競って接待競争を繰り広げているという。静岡県は「イコモス」の委員を五人も海外から呼び寄せ、一人二〇万円の謝礼を支払った。彼らは、県の費用で借り上げたバスに家族ともども乗り、「視察」してまわったという (<http://blogos.com/article/111268/>)。

山の心は今も生きている。建物を建てたくらいで、山の心は死なないのだ。生駒山にはケーブルカーが上り、遊園地がある。それでも山の霊力は衰えていない。山の神々は、西洋人の考える「自然」の姿をのみ喜ぶのではない。人の営みをも受け容れ、見守り、助け、ときに怒る。人間と〈お互い様〉で交わってくれるのである。

西洋の「自然」は、人間の都合で人間との区別を置いた名前で、人間中心主義の延長に過ぎない。大いなる地球も、大宇宙の中ではゴミのようなものだし、そびえる山も、その小さな地球のかさぶたに過ぎない。私たち人間はさらにその上の埃で、「考える葦」などと気取っても、所詮は浅はかな「理性」の思い上がり過ぎない。「信仰」や「芸術」の粹付けにはすぐに西洋式の好みが入り込み、いわゆる「オリエンタリズム」とか「リゾート感覚」になる。馬場県議はこの動きを「格付信仰」と批判する。「世界遺産」の名前につられて、魂を売ってはいけない。

### 〈心の囲い込み〉の歴史と仕組みのあらまし

〈心の囲い込み〉は手短かに言えば、「心は脳の働きに等しい」だった。人間の脳に心のすべてを囲い込んでしまう。私たち日本人を育ててきた〈うぶすな〉にはもともとなじみがない。しかし本場の西洋においても、じつは今の形になったのは極めて新しい。いかに特殊な思想か、ここからも知れるだろう。

西洋でも、かつて心は宇宙に満ちていた。古代ギリシアに、〈心の囲い込み〉は見当たらないことを、有名な二人の哲学者が語っている。プラトーンは宇宙全体を、魂を備えた生きものと考えていた。宇宙には感覚も理性もある。今なら人間の脳に囲われている心が、すべて宇宙に広がっていた。アリストテレスなら、もっと美しく、宇宙は愛と憧れに満ちているというのだ。宇宙のすべての物体が目的に向かって運動するというのが、彼の物理学で、このとき運動の力は「愛」なのだ。誰でも知っている大哲学者二人が、〈心の囲い込み〉とは似ても似つかぬ立場を取っていたのである。

ところで古代ギリシアにも、原子論者がいた。まるで近代物理学のように、物質はすべて原子、つまり究極の細かい粒から成るとの思想である。デモクリトスがこの代表だが、それでも心の無い宇宙を考えただけではない。デモクリトスは、「魂の原子」があると言ったのである。そして動植物はもちろん火などの無生物にも、魂の原子は混ざっていたのだ。やはり宇宙全体に、心を認めていたことになる。古代には原子論においてさえ、〈心の囲い込み〉は気配もないのである。

〈心の囲い込み〉は、詳しく見ると、次の三通りの動きを抱えている。まず、どこに囲うか——これを〈領域系〉と呼ぶ。つぎに、人間にどれだけ引き付けるか——これを〈人間系〉としよう。そして「心は精神か物質か」との争い——これを〈精神／物質系〉と名付けておく。

中世になるとキリスト教の力が強まり、理性を異様に重視した。そこで理性についてだけ、〈心の囲い込み〉が現われはじめた。すなわち、地上では人間のみが理性を持つことになったのである。理性の人間への囲い込みなので〈人間系〉と〈精神／物質系〉の動きだが、理性以外の心つまり感覚や想像力は、人間以外にも広

がっていた。中世では、ただ「哲学者」と言えばアリストテレスのことを指したくらいで、物体の運動を「愛」で説明した彼の影響力が強かった。だから理性を別とすれば、自然のものごとに心を見出すのは、まったく当たり前であった。

西洋でも、古代から中世までは、〈心の囲い込み〉の動きはほとんど無かったと言える。〈心の囲い込み〉の強い圧力が現われるのは、西洋でも近代になってからである。十七世紀のデカルトが物質から心を奪ったのは、常識をひっくり返す事件だった。物質とはただの広がり、つまり空間の大きさだ、と彼は語った。この説は、〈領域系〉の動きにもなっている。それでもデカルト説は、すぐに定説とならなかった。支持を上回る熱心な反対に囲まれていたからである。

多くの学者たちがあいかわらず物質に感覚や想像力を認め、「石も感じるんだ」と言ったフランス革命の先駆者デイドロもその一人であった。錬金術もまだ大いに盛んで、宇宙全体に、心を備えた「精気」の充満を認めていた。なんと、かのニュートンさえその一人なのだった。彼の研究ノートの大部分は、錬金術で埋まっていたのである。

十九世紀の初めになってようやく、今の〈心の囲い込み〉に直結する動きが現われる。ドイツ人のガルという医者がその中心人物で、「骨相学」なる研究だった。人相学のように思われがちだが、中身を見てもっと科学的になっている。ガルは、頭蓋骨の形から脳の各部分の大きさを判断し、各人の能力や性格特性を推定した。心の働きを、脳の各部分に割り当てていたのだから、基本の枠組みは今の脳科学にそっくりとなっている。

この思想はしかし、やはり受け容れられなかった。占いのような面白さで民衆には人気を博したけれど、学者たちにはうさん臭く映り、

批判する者が多かったのである。このあたりを、今の脳科学の流行に重ねてみると面白からう。ガルのときと同じように、根拠の乏しい一般向けの著書があふれているけれど、証明があるわけではない。ところが近ごろでは、他の分野の学者たちも脳科学に信頼を置く。流行が、科学の名を利用していると言ってもよからう。

その流行の最盛期、つまり〈心の囲い込み〉が今の姿をとるのは、驚くべきことに二十世紀の初頭を待たねばならなかった。このころ、神経学の進歩とともに、心はなしくずしに脳に囲い込まれたのであった。しかしながら、くり返すが、「心は脳の働きに等しい」を証明する発見があったわけではない。後に述べるとおり、言えるのは、ある類いの心の働きが脳の特定部位を必要とすることまでである。〈心の囲い込み〉の確立は科学の歴史に不思議な足あとを残したので、科学史家にとって研究の余地が、まだまだあるに違いない。

近ごろいかに当たり前に見えようと、〈心の囲い込み〉が正しいとの保証はなにも無い。裏返せば、これと矛盾するからといって、〈うぶすな〉の心が歪んでいるとも言えないのである。わが国の「トランスパーソナル」は、足場をここに据えて構わない。

## 〈心の囲い込み〉の三通りの動き

### 1 〈領域系〉

〈心の囲い込み〉の仕組みのうち、まず心の場所の狭まりを考える。脳という狭い領域に心を閉じ込めた圧力、それが〈領域系〉である。脳科学の先駆者がガルだった。彼は心を、「勇氣」「親子の情」「好色」「こずるさ」「理想」「神聖さ」はては「暗殺衝動」など、たくさんの細かい働きに分け、それぞれを、脳のあちこちの部分に当てはめた。けれどもガルは、この理論を定説にできず、それどころか「脳神話学」との批判を受けた。

若かったフロイトが1891年に書いた初めての論文は失語症の研究だったが、指導教官から「脳神話学」との評価をもらった。そこでフロイトは研究の方向を変え、精神分析を作り出すことになる。指導教官マイネルトの批判は、〈領域系〉に向かっていたのだ。心の働きを研究するとき、脳の領域にだけ着目しても意味はない、と彼は指摘した。

精神分析と同じころもう一つの心理学、すなわち実験心理学が誕生した。創始者とされるヴントにおいても、〈領域系〉の弱さははっきり見て取れる。ヴントの思想は、「内観主義」と呼ばれ、個人の心の「内側」をのぞき込むと受け取られている。だがこれは、とんでもない誤解である。ヴントにとって意識は、誰のものでもなかった。彼は個人の意識を研究したのではなく、「内観」とは、ただ意識の内側を観ずることなのだ。

ヴントの実験心理学を支えた世界観は、こうだった。—— 私たちが「宇宙」と呼んでいるものは、意識が捉えた何かに他ならない。意識の内側だけで宇宙の材料は出尽くすから、宇宙は意識の内側にある。—— 言い換えれば心理学とは、宇宙意識の研究なのだ。〈領域系〉が成り立たないのは明らかであろう。

〈領域系〉の囲いを認めなかったのは、心理学だけではない。十九世紀後半の他の多くの分野でも、同じ主張が通っていた。心理学とは縁がなさそうに見える物理学でさえ、そうだった。ヘルムホルツ、マッハ、ティンダルといった十九世紀を代表する物理学者たちさえが、熱心にこの立場を語ったのである。

近代医学・生理学の方法を確立したと評価されるクロード・ベルナールは、物質には無意識の心があると考えていた。実験医学の研究とは、この無意識を意識にもたらず活動なのだ。精神分析と近代医学との、意外な共通点がここにある。ベルナールは、無意識を認めた点

でヴントラと異なるが、無意識でも心には違いない。〈心の囲い込み〉から見ればやはり、〈領域系〉の囲いをまったく認めない立場である。

哲学も事情は同じで、意識を出発点に取る説が多かったが、いずれでも〈領域系〉は働いていない。すでに述べたベルクソンや、フッセルの現象学、それに論理立証主義などの科学哲学でさえ、ここは共通していたのである。なんとマルクス主義も、この点では同じだ。世界の歴史は物質の弁証法的法則で進むが、物質は法則の「反映」として心を生み出すのだ。したがって、物質のある所には心もあることになる。宇宙が心に満ちているのだから、〈領域系〉は開いているのである。

二十世紀の前半になってなお、近ごろの「科学的常識」とは異なる学説が、数多く通用していた。しかも、水と油だったり敵対していた学派のあいだでさえ、この点だけは共通だったのである。〈領域系〉の囲い込みが、驚くほどに遅いと知れるだろう。

## 2 〈人間系〉

〈心の囲い込み〉は、〈領域系〉だけでは終わらない。なぜなら、もし領域だけを言うなら、囲い込む領域が人間の脳とは決まらないからだ。心を人間の脳に集めるには、人間を選ぶほどの圧力が必要となる。その圧力が〈人間系〉である。完成すれば、心はすべて人間の心となる。人間が心を独り占めする思想である。西洋思想は人間中心主義が強いので、〈人間系〉は古代からずっと働いてきたけれど、それでも完成するのはやはり十九世紀になってからである。

〈人間系〉は、〈領域系〉の一種と思われるかもしれない。人間は宇宙の一部だから、「人間という領域」に囲うことではないのか——けれども、人間に囲おうとすれば、人間というもの「外周」が改めて問われる。つまり、「人

間」はどこまで、どんなふうに広がっているのか。

人間の領分は、皮膚の内側と限るまい。服を触るだけで、体を触ったと見なされる。十九世紀の神秘主義に「神智学」や「人智学」があり、今でもそれなりの人気を保つ。これらの説では、ふつうは見えない人体の一部が皮膚を越えて広がっている。「アストラル体」「エーテル体」などと呼ばれ、それらで感じたり見えたりすると語る人もいる。こういう神秘主義には長い歴史があり、さまざまな意匠を凝らしつつ続いてきた。次々と新しげな説が唱えられるけれど、中身は大同小異で、起源は古代にさかのぼる。

十二世紀の女子修道院長ヒルデガルトで有名な「マイクロコスモス」の説では、人間は宇宙のすべての要素を持っている。彼女によれば人間は、要素の共通性から大宇宙の隅々とつながり、支配できるという。人間は宇宙を、「網を動かすように手中に」収めている。「マイクロコスモス」では宇宙にも心があるから、〈領域系〉での囲いはないが、宇宙が備えるのはひどく人間臭い心になっている。人間中心主義の極みだから、この点で、人間が自然の一部でしかない私たちの〈うぶすな〉とはずいぶんと違う。

しかし西洋でも、〈人間系〉の力はルネサンスになるとゆるむ。ピーコ、フィチーノ、ブルーノなどの思想は「人文主義」と呼ばれ、人間を重視した。ただし、中世で神を持ち上げ過ぎたから、それに比べての人間重視に過ぎない。他の動植物も人間と対等以上になるので、人間の地位そのものはむしろ下がっている。西洋流の輪廻転生を説く人もいたくらいである。

この後退は十八世紀まで続き、この世紀の末にメスメルが現われる。すでに別稿で詳しく述べたとおり、彼の説く「動物磁気」は宇宙に満ち心備えているから、〈領域系〉は働いていない。〈人間系〉はどうかといえば、メスメルはニュートンの後継者を自任し、自分を物理学

者と考えていた。したがって「動物磁気」は宇宙の原理であり、人間だけのものではない。すなわち、メスメル説においても〈人間系〉の囲い込みはほとんど働いていないことになる。

ところが、十九世紀以降になると、急にまた〈人間系〉が強まってくる。例えばフロイトの有名な症例には、「ネズミ男」と「オオカミ男」というアダ名がついている。ネズミとオオカミが夢と幻で大活躍するけれど、フロイトの解釈ではネズミやオオカミの心をはじめから外され、患者と父親との人間的な葛藤の「象徴」とのみ解釈を受ける。動物が夢で語りかけてくる可能性には、「迷信」としてさえ言及がない。フロイトの心へ考察は抜きがたい人間臭とともに始まり、これに極まるのである。

私たちの〈うぶすな〉では、ネズミもオオカミも神だった。「ミ」とは、神のことである。もちろん、心が備わっている。日本オオカミは絶滅させられたが、この神の祀りは今も続いており、群馬、長野、山梨などで「おぼやしない」「お七夜」などと呼ばれる、旧暦の5月に狼に供え物をする行事がある。「おぼ」は「うぶ」の変化で、漢字では「産」となる。山の神である狼がこのころにお産をすと言われ、行事で神のお産を祝い、人間の子どもを護るよう頼むのである。

西洋においてさえかつて「ネズミ男」と「オオカミ男」は、半ば人間で半ば獣の、有名な妖怪だった。近代の西洋人がこうした考えをすっかり忘れてしまったことこそ、〈人間系〉囲い込みの勝利の姿なのである。

そして極め付けが、ヴントなどの思想に出ている。宇宙全体を意識で覆い、意識の中に宇宙があるのだった。〈領域系〉の囲いはまったく無かったけれど、ここでの「意識」とは何だろうか。「純粋な意識」などと言うが、中身を見れば、十九世紀という科学万能主義の時代のインテリの意識に決まっている。彼らの意識一元

論では、特殊な人間の特殊な意識が、万能の力を得たことになる。

十九世紀に始まった近代心理学は、この人間臭い意識で全宇宙を塗りつぶした。すなわち、人間中心主義の行き着いた思想、言い換えれば〈人間系〉囲い込みの出来上がりを「心理学」と呼んだのである。少し遅れて〈領域系〉が追いつくと、二つの圧力の重なりで、近ごろの〈心の囲い込み〉の外枠が、ほぼ姿を現わす。すなわち人間の脳という領域に、心が囲い込まれるのである。私たちの〈うぶすな〉からの「トランスパーソナル」は、このような人間臭を避ける心がけで行きたいものである。

### 3 〈精神／物質系〉

〈心の囲い込み〉の圧力には、もう一つ、〈精神／物質系〉がある。この系はこれまで以上に込み入っているが、一言にすれば「心は精神か物質か」という争いである。「心か物質か」の争いでは決してないことに気をつけてほしい。心そのものを、精神か物質かに分類せねばならないということだ。

西洋人はこれで数千年、飽きもせず戦ってきた。一口に「心」と言っても、様ざまである。並らべると——精神、感覚、観念、欲望、感情、意志、知覚、想像（力）、知性、理性、認識、知識、記憶、心像、印象、表象、習慣、直観、確信、疑惑、推測、判断、心証——など、たくさんある。〈精神／物質系〉では、これらが一つずつが「精神か物質か」と問われる。心の分類問題なのだが、ただの分類では終わらない。この問題への答え次第で、心の扱い方は変わってくるからである。

私たちの〈うぶすな〉で、〈精神／物質系〉はほとんど働かなかった。だから、この系を納得するには苦勞が伴う。

月みれば ちぢにものこそ 悲しけれ わ

が身一つの 秋にはあらねど（大江千里）

このとき、「悲しい」とは精神の働きか肉体の働きかなどと問うのは、バカバカしかろう。「わが身」とは、精神でも物質でもない。そんなことを言う前に、わが身は「一つ」と決まっている。もちろんこの「一つ」は、〈一つ掲げ〉の「一つ」とは無縁である。他の人びとや天地万物とともに、月の心を感じ、〈お互い様〉で秋に沈み込む様ざまな、「あれこれの身の一つ」に他ならない。

ところが西洋では、〈精神／物質系〉の二つの極のうち、「精神」こそ心の宝だった。「精神」は非物質・非肉体的で、値打ちが高く永遠に有り続ける。さきほどのリストから取れば、理性、観念、意志、知性、認識、知識、直感などがそれである。理性ないし知性を、右代表としてよい。なんとキリスト教の神や天使の心は、「精神の心」だけで出来ているらしい。とても立派なので、〈一つ掲げ〉の「一つ」にふさわしい。

そこで、「精神か物質か」こそ人生の肝腎要めなのだった。「精神的」と「物質的」の二種類の心が命がけでぶつかりあってきたのは、キリスト教でこの区別が「永遠の救い」「永遠の命」につながるからである。はかないこの世の命より大事になるのも、分からないわけではない。

ところが、心にはもう一種類ある。物質ないし「肉体」に備わる心で、それが〈精神／物質系〉のもう一つの極をなす。さきほどのリストからは、感覚、欲望、感情などがこれに当たる。値打ちが低く、滅びる定め、はかなく永遠でない心だ。こちらを「物質の心」と呼んでおこう。

「物質の心」は、やがて滅びるだけではない。感覚や欲望が人間を誘惑し、墮落させ、罪を犯させる。つまり悪魔の道具ともなる卑しい心だ

から、精神の理性・知性はこの「物質の心」に打ち勝ち、支配せねばならない——西洋では、こういう筋書きが、数千年にわたり説かれ続けてきた。「物質の心」は動物にも備わるが、動物はこれだけで行動するから無知で野蛮なのだ——キリスト教の世界では動物をこんなふうに見下し、「存在のハシゴ」で人間以外の生き物を踏みつけにする。ネズミやオオカミの心は無視して平気な裏には、この思想も働いているのである。

ただし、踏みつけられれば反発も起こる。「精神的」な理性など無く、すべては「物質的」だと言い張る人も出てきて、自から「唯物論」を名乗った。〈精神／物質系〉の物質極寄りの動きである。「唯物論」から主流のキリスト教など、もう一つの極を眺めた名付けが「観念論」となる。両者は思想の範囲を越えて政治的な動きとなり、激しい弾圧と闘争の歴史を紡いできた。このとき主流は常に精神優位で、「唯物論」は概ね権威・権力への抵抗と位置づけられた。

西洋思想主流の立場から見て、人間はどう扱われるだろうか。人間は物質でできた「肉体」を持つので、感覚と欲望など「物質の心」を備える。ところが人間には、物質でない精神もある。キリスト教の神様からいただいたもので、この「精神の心」に備わる理性・知性を働かせれば、自然を支配でき、神様にも近付けるのだ。人間が「万物の霊長」＝地上の支配者なのは、こうした理屈からである。

そこで人間は、神と自然との「中間者」とも言われ、「存在のハシゴ」のちょうど中段に居座っているという。〈選りすぐりの完全〉には届かないが、精神の理知性を理由に、限定付きの人間中心主義が成り立つのである。西洋ではこのたぐいの思想が、遅くとも古代ギリシアから続いてきた。

日本の〈うぶすな〉から見れば偏見や思い上

がりを感じざるを得ないけれど、明治以降はかなり私たちの心にもしみ込んできている。旧軍部の「物量に打ち勝つ日本精神」も、この焼き直しに他ならない。〈うぶすな〉にそぐわない、その場しのぎのコピー思想なので、本家の「物量を操る西洋精神」の前に、あっさり敗北したのは当たり前だろう。日本発の「トランスパーソナル」でも、精神主義にこだわるのは避けねばならない。

私たち日本人もちろん、賢さは大事にしてきた。ただし、理知というものを無意味とはしないが、数ある徳の一つに過ぎないから、ことさら持ち上げるべきではない。人柄を磨いて自づと立ちのぼる香り、もれ出る光こそがうるわしく、偉い。そもそも心に、精神も物質もありはしない。日本人の心には、タマ、魂、気、気心、情、人情、志、心意気、人となり、慣らい、心がけなどいろいろある。いずれについても、「物質か精神か」など、そもそも問うのがおかしい。「観念論」では困るが、かといって「唯物論」でもないのである。

## 心が脳の中に入るまで

### 1 精神の囲い込み

以上の三通りの動きのうち、まず進んだのは、精神の人間への囲い込みであった。〈人間系〉と〈精神／物質系〉が働き、心のうちでも精神を高く持ち上げつつ、人間に独り占めさせようとしたのである。「人間中心の観念論」と言ってもよからう。そうしたなか、十九世紀が進むにつれて近代的な国民国家が生まれ、民主主義の必要が叫ばれた。急に強まったのが個人主義への動きだった。この世紀の末には、「個人すなわち人間」と言ってもよくなった。

「人間すなわち個人」なら、〈人間系〉も個人に向かうしかなくなる。〈精神／物質系〉は〈人間系〉に追随し、主流の思想にとって大事な精神を個人に送り込もうとする。個人とは狭

い領域なので、この動きには〈領域系〉も働いていることになる。すなわち三つの系が協働して、精神の個人への囲い込みに動いたのである。

精神は、個人<sup>・</sup>の心となった。つまり個人が精神の「主体」となり、理性をふるう世の中となったのである。かつてなら宇宙に満ちていた心が、個人の内に入った。天地がくつがえるほどの変化だが、心はまだ個人の内にあるだけである。脳にまで囲い込まれるには、もう一工夫が要る。〈領域系〉と〈人間系〉とは二十世紀になっても動き続け、いまや個人となった人間の内部で、いよいよ脳に狙いを定めていった。

脳への囲い込みが現われるには、伏線があった。十七世紀にデカルトが、物質と精神を引き離して見せたのだった。物質は、物質の法則だけで動くから、機械としての働きしかない。私たちの体も物質だから、精神はない。では、精神はどこかといえば——どこにも無い。少なくとも宇宙の中には無くて、「ただ思<sup>・</sup>うことにのみある」と彼は言ったのだった。

けれども脳の一部、松果腺だけは例外となった。精神をどこかで体に繋げないと、思うように動けまい。そこで松果腺を精神的に特別扱いましたが、この無理が祟って「我思う、ゆえに我、松果腺にあり」のような説になってしまった。だれが見てもわかる矛盾だとさんざんに批判を受けたし、近ごろの私たちから見ても、デカルトに勝ち目は無い。弟子筋が「機会原因論」で矛盾を解こうとしたけれど、無理があった。やはり精神は、宇宙の中のどこかにあるはずだ——十九世紀以降の西洋人は、そう考えざるを得なくなった。

しかし、もし人間以外に精神があったら、「地上の支配者」の地位を奪われかねない。精神は人間にしかないはずだから、人間のうちでも他と違って発達した脳に有るのだろう。下半身に精神があったら、イヤらしいではないか！



——なるほど脳は物質にだが、下半身から一番遠いし、神様の住む天に近い。このように考えたのである。

精神を脳に囲い込んだのは、キリスト教の物質・肉体蔑視の流れで、つまり宗教的な圧力なのだ。〈一つ掲げ〉で作られた「存在のハシゴ」が、ここでも働いているのである。イギリスの作家D.H. ローレンスはそれに反抗し、『チャタレイ夫人の恋人』で「人間は下半身でも考える」と書いたところ、ごうごうたる非難を浴びた。

ともあれ、「人間の高貴な精神」は、こうして脳のなかに居所を定めた。要するに、デカルトの説の復活に他ならない。矛盾に満ちた松果腺説を、脳全体に広げただけで、べつに科学的な根拠があるのではない。

## 2 「物質の心」の囲い込み

さて心にはもう一種類、「物質の心」があった。肉体には「感覚」や「欲望」が備わっていたが、これらの卑しい「物質の心」ないし「世俗の心」もまた、ついには脳へと囲い込まれた。どうやって押し込んだのかを、次に見よう。

十九世紀ほど科学技術への信頼の高まった時代は、かつてその後もなかった。西洋人は、自分たちの科学が究極まで進んだと思い込み、宇宙の謎はもうほとんど解決済みと見なしていた。「進歩」の自覚が、想像もつかないほど強かったのである。十八世紀に始まった産業革命がいよいよ頂点に達したと思われ、当時の「ハイテク」蒸気機関は人類史上で最高の偉業なのだった。

産業革命とは、ただ工業が発展しただけではなかった。経済が変わり、社会の仕組みを変え、人びとの暮らし全体におよぶ動きだった。そうなれば、心についての考え方も変わってくる。心を置き去りにして、物質だけが変えられる

はずはないのである。

十九世紀後半の西洋の科学者たちは、「唯物論」者を自任する者が多かった。しかし、実態は必ずしも自称通りではない——なぜなら「物質の心」をまったく考慮しなくなったのだから。自然科学と工学技術は、言うまでもなく、物質への取り組みから産まれていた。けれども、物質を大事にするものでは決してなく、むしろ物質をいかに奴隷とし、使うかを考えていた。あのハイデガの思想の先駆けで、〈一つ掲げ〉の影も見える。どれだけ速く、たくさんの物質製品を製造でき、どれだけ多くの利益が上がるか——資本主義の成立とともに、人びとの関心はこれ以外に向かわなくなった。精神による物質の支配を進め、物質を足場に「存在のハシゴ」を一段でも上ろうと考えていたことになる。

産業革命で、「物質の心」を無視できたのはなぜだろう。ここでも、物質に心がないと科学・技術的に証明できたからではない。むしろ逆さまに、「物質の心」を考えずにすまず方法が、まず多くの人の気に入った。便利だし、「進歩的」に見えたので推し進め、科学・技術と呼んだのである。

近代の科学技術は、「公共性」と「再現性」を必要不可欠と見なしている。【いつでも、どこでも、だれでも】が、同じ結果を得られることである。まるで究極の「民主主義」のようではあるが、きれい事にばかりに目を向けてはいけない。【いつでも、どこでも、だれでも】とは人間がいつでも、どこにでも手を下すことだ。人間中心主義で、〈人間系〉の横暴に他ならず、人間以外の森羅万象の都合は考えない。はみ出すものは、「面白いですが、科学ではありません」と言っておけばすむのである。

科学は「開かれた」構造をしており、事実在即して仮説を修正すると、よくと言われる。しかし、少なくとも「物質の心」に関するかぎ

り、ウソなのである。山の神の怒りや、河童やムジナの祟りが、もし事実として目の前に現われれば、科学は受け入れるだろうか——いや、けっして受け付けない。「ただの偶然」ですませておけば、無かったことにできるからである。「物質の心」は、そんなふうに使われている。

ほんとうは、山川草木・鳥獣虫魚に心が無いわけではない。だから、こういう傍若無人、いや傍若無心は、たっぷりしっぺ返しを受ける。「自然破壊」による公害、災害、人の心のすきみもそれである。それらを「天罰」と呼んで、間違いでなかろう。けれども、山の神や河童やムジナ、山川草木の精霊は、いつも同じように崇ると決まっていな。人間と同じで、神や妖怪も十人（神・怪）十色である。その時々気分や都合もある。だから人間の勝手に再現し、だれにでも見せられるわけではない。人間の都合だけを考える「公共性」と「再現性」は、当てはまるはずがないのである。

すると科学では、はじめから無いものと扱われてしまう。すなわち、あらかじめ〈無いがしろ〉なのだ。したがって「物質の心」には、科学の理論を「反証」する力が無い。もし、向こうからの働きかけで手順が狂っても、すべて人間の失敗と見なすと決めてある。たまたまの気持ちの乱れ、心のゆるみだと言えよいのである。あるいは、未知の原因による想定外の事故だったと。

科学技術が山川草木の心を、あらかじめ検閲にかけているのだ。奴隷を柙の外に置いた、古代ギリシアの民主主義と同じことで、「物質の心」は、あらかじめ「科学の民主主義」の柙外に追いやられている。産業革命以来、いまでも続く科学技術の圧倒的優位を支えるのは、論理や事実などではない。経済的な利益に加え、こうした「信仰」や「宗教」とも言うべき頑固な信念なのである。

産業革命と科学主義の圧力により、物質には心がないと思われた。しかし、そうだとすれば、これまで「物質の心」だったものはどこにあるのか——やはり脳の中だ、と考えざるを得なかった。すでに高等な精神は、人間の脳に囲い込まれている。その精神が判断し、物質についての科学と技術を進めているなら、「物質の心」も脳に囲い込むのがよい。なぜなら「物質の心」は、「感覚」や「欲望」という野卑な心だから「野放し」では危ないし、脳に囲い込めば、精神による支配で科学も進むであろう。

こういうわけで心が、「精神の心」も「物質の心」も、すっかり脳のなかに囲い込まれたのである。科学の証明によるのではない。「感覚」や「欲望」の理性・知性による支配は、キリスト教が古代以来ずっと言い続けてきたことだった。しかし、見下したり支配したりは、私たちの〈うぶすな〉の心にそぐわない。山川草木、鳥獣虫魚、天地万物の心を〈お互い様〉で認め、〈お蔭様〉で有り難く過ごしたい。人間の体のうちでも、上下・貴賤の区別なく、各おの役割を〈お互い様〉で認めたいものである。

### 心は脳ではない 3—— 霊妙物質の脳？

人間の脳は「精神の心」を宿すことになっている。しかしながら、脳は物質なのだ。それなら脳は、なんらかの仕組みにより、特別に精神的な物質だと考えざるを得ない。デカルトの松果腺説もこの立場だった。この「精神的な物質」の思想には、長い歴史の背景が連なっている。

近ごろでこそ、宇宙の物質は隅から隅まで同じ種類と見なされ、天体を作る物質は、地球上にもある。（暗黒物質の謎があるけれど、未知の物質との意見は少ない。）しかし十八世紀までなら、物質の本性には格付けがあった。古代のプラトーンから二千年あまり、地上と天体の物質とはまったく異質で、本性が異なるとされ

ていた。キリスト教の天使の体も靈妙な物質で、宇宙人も、宇宙に住むからには、地球人とは違う物質の体を備える——十八世紀までは、それで当たり前だった。

啓蒙時代の大哲学者カントも、惑星の住人を想い描いていた。『天体の一般自然誌と理論力学的起源からの全世界構築の理解の試み』というまじめに科学的な著作で、天体や異星人を造る物質は、太陽からの距離で異なると説いた。太陽は強い熱と光を放つから、近いほど惑星も住人も重くて濃い高温の物質から成り、物質原理に支配されやすい。金星では感覚や欲望がさかんで、力は強いが動きが鈍く、知性に乏しい。もし金星人が地球に来れば冷えて固まり、動けなくなるだろう。これに比べ、太陽から遠い木星や土星とその住人は軽くて靈妙な物質から成って、知性が進み冷静で、動作と判断も素速い。太陽から遠いほど、心の働きはあらゆる点で「完全」に近づくという。

近ごろならトンデモと言われそうだが、大哲学者の著作である。流れが『スーパーマン』に及ぶのは、だれでも気付くだろう。地球上の個人を越えて「トランスパーソナル」に進もうとするとき、こうした向きに迷い込まぬよう気をつけねばなるまい。

カントの著作が出たころは、ヨーロッパ、西アフリカ、アメリカを結ぶ奴隷売買の「三角貿易」が真っ盛りだった。寒い北側の白人が、暑い南のアフリカ人を見下し、人間とも思わなかった。東洋の「黄色い猿」たちの多くが白人より南に住んでいることも、もちろん彼らは知っていた。肌の色の違いはまちがいく物質の違いだが、なぜか色の薄いほうが靈妙らしく、心の格付けにも反映してくる。西洋のキリスト教徒が偉大なのは「普遍的な観念」を所有するからだ、と白人は考えていたが、「普遍的な観念」を作るのは靈妙な精神の理性・知性なのだ。

〈心の囲い込み〉は、脳を特別視する。脳は物質だが特別な権限を、何らかの理由で手に入れ、「存在のハシゴ」の上の方に乗っている。「存在のハシゴ」が人体の内部にもかかっているのだ。

脳だけに心があると言える理由を、いま科学者たちは漠然とこう考える——脳には多数の神経が集まり、たいへん複雑な構造をしているから、と。だが、地球上の精妙な大気の動き、海流、生態系のほうが、よほど複雑に違いない。太陽の活動や銀河系の動きは、もっと複雑だろう。太陽と銀河には、人間を上回る精神と感覚を認めねばなるまいが、それでは脳科学の立場は崩れてしまう。

脳には神経細胞が集まるから、というなら——脊髄や、腸に行き渡る複雑な神経はどうか。神経細胞の集積を根拠にするなら、脊髄にも腹にも心認めるのが正しかろう。背筋を伸ばし、腹を据えれば心は落ち着く。私たちの〈うぶすな〉では、「肚の据わった人」や「肝っ玉の太い人」が尊ばれる。こうした言い回しは、じっさいのところ脊髄や腸の心を表わすのだろうけれど、脳科学はこれを無理に否定する。

複雑さでも神経の集積でも、脳の特権は正当化できない。これでお「心は脳の働きに等しい」とするなら、「脳の神経は特別に靈妙な物質だ」と言うのと、なんら変わらないのである。

ガルは脳に心の機能を集めたが、これは彼が、脳に特別な物質を見出したからだだった。「骨相学」で、高級な精神作用を掌るのは、なんと脳室なのだ。脳室は、いまでは脳脊髄液入りの袋とされている。もちろんガルも、脳室の物質が「希薄」だとは、気付いていた。しかし、だからこそ彼は、脳を特別に靈妙で高等な物質と考えた。物質のうちでも、いちばん物質らしくないあたりにこそ、精神は宿るべきなの

だった。

脳科学では、心が神経の働きとなっている。とはいえ、脳を特別中の特別の物質と扱う点は、なんら変わらない。脳の物質を他と同じとするかぎり、なぜ脳にだけ心が生ずるかは説明できないからである。なるほど脳科学は「天に近いから」とか、「霊妙だ」とはけっして言わない。だが、脳という物質を理由なく特別扱いするかぎり、ガルの「脳室説」とは程度の差しかない。「骨相学」の思想が、脳科学よりずっと「ラジカル」だったというだけである。

脳科学の背後には、カントの描く「存在のハシゴ」が見え隠れする。〈心の囲い込み〉は、〈一つ掲げ〉の力を受けている。すなわち、物質や体に上下の格付けを持ち込まなければ、成り立たない差別思想なのである。

### 心はどこに、どうあるか

脳には大きな役割があり、大切だが、心の働きは脳だけで起こるのではない。むしろ、ベルクソンも言ったとおり、宇宙の万物との通信装置とするほうがよい。様ざまなものごとと〈お互い様〉で働きあい、ものごとの心を感じ取り、味わい取り、また働きかける。筋道に沿う扱い方でこそ、ほんとうに脳を大切にできるのだ。

心の働きは、脳の外側も含めて成り立つ。視野を広げてみれば、「富士山を見る」のに必要なものは、富士山そのものの他にもまだある。富士山の姿を目に届ける光は、どこから来るのか——太陽の働きがなければ、富士山は見えない。すなわち「見る」という心の働きは、太陽の光をも含む。足許も考えよう。富士山は宇宙空間に漂うのではなく、地球の上に座っている。大地に支えられてこそ、私たちの心に映ずる。私たちの体は、地球の重力がなくなれば、宇宙に放り出され、一瞬で死ぬ。したがって富士山を見る心は、大地と大気の働きなどもま

た、含んでいることになる。

ちっぽけな人間一人が富士山を眺めるだけなのに、たどってゆけば、じつは宇宙の力が合わさっているのだ。富士山でなく星を眺めれば、もっとなめらかに宇宙に繋がるであろう。何を見るにせよ「宇宙の心」が、つねに働いている。「見る」だけの話でもない。聞く、触れる、味わうなども同じことである。

さらに、私たちの心は現在だけでなく、過去も含んでいる。過去の積み重ねにより、いま現在の受け止め方は違う。自からの生まれと育ち、先祖はもちろんだが、それだけでもない。太陽は銀河系で生まれ、そのなかで働きを保ってきた。だから、宇宙を含めた大きな歴史に支えられ、はじめて私たちの今がある。未来の宇宙もまた、何らかの仕方で働いているのだろう。だから、星占いも迷信とは言いきれない——当たるかどうかは別として。

私たち一人一人の心の働きとは、大きな「宇宙の心」の一断面に他ならない、と言ってよい。その断面の中心を誰かの体が占めるとき、「その人の心」が現われるのである。その体の一部に、脳がある。

改めて結論を述べよう。「私の心」とは、正しくは、「私の体を中心にとった宇宙の心の切片」のことなのだ。宇宙の心の他の切片が、他の人の心や、森羅万象の心となる。それらは私の心と、気付かなくとも互いに係わり、働きあっている。これら無数の切片がどんな造りで、いかに働くのか、詳しいことは謎だである。しかしこの結論を認めるのには、細部まで知りきったり、次に起こることをいちいち予測できなくともよい。そこまで求めるのは、「選りすぐりの完全」への空しいこだわりであろう。

もう少し広く考えれば、これまでの考察で次のことが分かった——心の成り立ちについては、どこか一ヶ所に、一つの特別なものを設け

でもうまく行かない。これだけでも、〈心の囲い込み〉をほどく理由に充分だろう。

宇宙のすべてが〈お互い様〉で、優劣、序列抜きで付き合う。そのなかから、人間だけでない様ざまなものごと、山川草木、鳥獣虫魚、天地万物の心が生まれ出る。これらの心がまた、〈お互い様〉で係わりあい通じ合う。そう考えただけで、詳細は知れなくとも、私たちの暮らし振りの何かが変わるはずなのだ。文部科学省は近ごろ、文科系の学問を大学から追い出したらしい。しかし、心の持ちようを支える思想が、人を育てるうえで「役に立たない」はずはない。

成り立たないはずの〈心の囲い込み〉に、いまも多くの人が疑いを抱かない。日本人の心で、なにかが麻痺している——あの黒船の弾丸の毒がまだ効いて、「しがらみ」を作っているに違いない。しかし解毒には、〈うぶすな〉の心を取り戻すだけですむ。そこではあらかじめ、すでに個人を超えた「トランスパーソナル」が息づいているからだ。

#### 四 〈意識革命〉を捨て〈おのづから〉に

##### 革命の看板と偽り

黒船の弾丸の残した「しがらみ」の三つ目は〈意識革命〉で、ひとこと言えば「意識でなんでも解決できる」との思想である。「意識」がかつての絶対の支配者、すなわち〈一つ掲げ〉の「一つ」の位にいたキリスト教の神を追い落としたのだ。この革命の大義名分となったのが、「意識はなにより明らかで確実」との思想である。

神を追放したこの力強い武器は、〈心の囲い込み〉によりいまや人間の手許にある。したがって〈意識革命〉は、人間中心主義を唱えた革命でもあった。ところが、それで人間は少し

も楽にならなかった。意識がいつのまにか、人間のために「真理」を保証してくれる新しい「指導者」となっていたからである。あるいは意識が人間の道具でなく、首根っこを押さえる責め具となってゆく。

〈意識革命〉は、私たちの暮らしへの影響もとても大きい。意識が知識、科学、生活、道徳、責任、健康など、人間活動すべての元となるのである。人の安否を調べるのに、昔ならまず息を見たのが、いつの間にか意識に置き換わっていた。

意識は「真理の確実な認識」を与え、人の道を説き、心の健康さえ保証する万能の宝物、ドラえもんのエプロンのようなものとなったが、うまい話には、必ず落とし穴がある——ほんとうに意識が明らかで間違いないなら、なぜ古代からそう言われてこなかったのか？ 私たちは、自分の言動を意識して暮らしているのか？ むしろ、意識せずにできるときこそ、上手になったのではないか？

私たち日本の〈うぶすな〉では、意識で構えなくとも、物事が〈おのづから〉知れる。構えて上品振るほど品のない振る舞いはない。工夫せずとも〈おのづから〉ふさわしく、ゆかしく振る舞える人が、ほんとうに上品な人なのだ。腹の据わった人なら意識が騒いでも、心は乱れることが無い。

じつは西洋でも十八世紀までなら、意識などしなくとも正しい判断と清い行ないができるはずだった。もっとも、正しい判断と清い行ないは、神の祝福を受けた人に限られる。キリスト教の神が、人の魂にそういう違いを作ったからで、すべては神の計画どおりという「予定説」である。なかには祝福されていない人もいて品がなく、悪い、間違ったことばかりする。ともあれ西洋でさえ善人も悪人も、いずれも意識などせず、それなりに振る舞っていたことになる。

そうしたなかにとつぜん意識を、まるで〈一つ掲げ〉の「一つ」のように、持ち上げる革命が起こったのだ。結論を先取りすれば、これは全知全能の神の、変装した復活に他ならず、ツァーが「ビッグブラザー」に変わったようなものである。「真理」を与えるものは理性だが、それが精神で、また意識でもある。「理性＝精神＝意識」の新しい等式が、この革命の全般にわたり、ほぼ通用する。〈心の囲い込み〉の〈精神／物質系〉にも関わりの深いところである。

〈意識革命〉は、革命だけあって、平等思想を抱えている。そのすばらしい意識、間違いない教科書を、人間はだれでも平等に持っている——最高の宝が万人に平等だから、究極の民主思想、人権を最大限に尊重する思想、と言えそうだ。革命はいつも良いことばかり掲げるが、喜んでばかりもいられない。この平等思想からは、意識こそが「人間の条件」との結論も導ける——裏返すと「意識を欠けば人間ではない」となる。より正しくは、「正常で健康な意識を欠くと判定された者は一人前の人間でない」となる。なぜなら、「真理」を失っているのだから。

十九世紀の半ばになると、西洋の白人たちは、古いものはすべて間違いか見当外れだと言いつつ始めた。「進歩」が金科玉条となったのである。新しいやり方だけが科学的な「真理」に導くとの革命の勢いが、人類の進化の頂点に達したとの自惚れを招いていた。

捨てるべき「古い」ものの中には、西洋でない地域、白人でない人びとも含まれていた。「原始人」「未開人」ないし「土人」は、古い「迷信」に縛られているから、教育し「啓蒙」すべしと考えられたので、植民地主義は正当だった。近ごろの「脳死」の人は、もはや意識の戻る見込みがないので、死んだことになる。見かけは人間でも、もはや人間ではない。精神

病、認知症などと診断を受けた人は、意識が正常でないので一人前の人間とは扱わなくてよい。

〈意識革命〉は一部の人びとを、こうやって人間仲間から追放できる思想でもある。多くの革命が、一区切りついたあと弾圧と粛清を行なったのと同じである。古い仕組みがいつの間にか、名前を変えて復活する。かつての神と同じ仕組みが新しい「指導者」のもとで甦れば、完全な平等は究極の差別思想にたやすく変身できるのである。

では、意識とは何だろう。みんな知ったつもりで、「意識は確かですか？」と聞かれれば、「確かですよ！」と答えるほかあるまい。だが、「意識」の本当の意味を知る人は少ない。いや、いるはずがない。ためしに誰かに「意識とは何ですか？」と聞いて見れば、困った顔をするに決まっている。もし答えが返っても、人により千差万別なのだ。

日ごろ私たちは見聞きし、考え、思い出し、心がける。なるほど、そういう働きが意識によると言っても、異論はあまり出るまい。しかし、その意識の有り様を記録したり、表現したりはたいへん難しく、ほとんど不可能と言ってよい。意識を記録し表現する難しさは、大まかに言って二つある。一つは、意識がすぐ消えることである。意識は今にしかないから、証拠として残せないし、ビデオで録画もできない。国木田独歩は、これに気付いて戸惑ったのだった。

もう一つは、意識とその相手方とを区別できないことだ。——富士山を見ているときは、富士山が見えている。「富士山についての意識が」見えているのではない。私たちはふだん、人びとやものごとに取り巻かれ、当たり前で暮らしている。心は必ず、見たり聞いたり相手方と絡んでいる。このとき、どうやって意識だけを取り出し、示せるのだろうか？

だから意識は、記録も表現もできない。わざ

わざと実験してみるには及ばない。筋道からして、そうとしか考えられないのである。それなのにこの上なく明らかで、確かとされているから、「明らかな謎」なのである。

### 意識の歴史の頼りなさ

歴史を振り返ると、西洋思想史のうちでも、意識の信用は長らくとても低かった。どのくらい当てにされなかったか、かけ足で歴史をたどってみる。

古代では、プラトンの「イデア説」が、分かりやすい例となろう。彼は、私たちが日ごろ見聞きし、思い浮かべる姿や思いを「イドラ」と呼ぶ。洞窟のなかにおいて外が見えないとき、入り口から入る光が、カゲロウのようなものを天井に映す。プラトンは意識を、この程度のものと考えていた。正確で明らかなものは「イデア」だが、「イデア」そのものはこの世になく、産まれる前に天上で見えていたという。では人は、「イデア」を意識しているのだろうか？—— 私たちは「イデア」を忘れていてから、思い出さねばならない。すなわち「イデア」は、思い出すまで無意識に留まっていたことになる。いちばん確かで明らかな心が、意識を外れていたのだ。もしも「イデア」が意識できていたら、わざわざプラトンが「イデア説」を唱え、人びとに教えなくてよかったに違いない。

中世では、スコラ哲学の大成者・トーマス・アクィナスが「神の本質は表象を通しては見られ得ない」（『神学大全』）と述べている。この「表象」とは、意識の働きの一つである。感覚を材料として心に想い浮かべたものことで、私たちは「表象」で世の中を、宇宙を考え、認識する。中世には、神の認識こそ人生の最大の課題だったので、意識は、人生の肝腎要めに役立つなかつたのである。

最高の「真理」では目標が高過ぎだったかと

いうと、そうでもない。なぜなら、人生のうちでも最も「低俗」なところにさえ、意識は届かなかったのだから。西洋では、心に二種類があるのだった。神を知ることでもできる高貴な精神と、人間を罪と墮落に誘う「物質の心」とである。けれども、この卑しい「物質の心」においてさえ、意識は活躍できない。トーマスは、こうも言った。

情欲（リビドー）が原罪を子どもに伝える。だがこの情欲は、隠れた姿をしている。神の力により、生殖の行為でも、秩序をおびやかす情欲を感じない人がいる。恵みを与えられているのだ。だがやはり、子どもに原罪は伝わるだろう。（『神学大全』）

どうやら「不感症」は神の恵みらしいのだが、それほど「恵まれた人」にも「情欲」は働いている。人間の「墮落」の根源をなす原罪を運搬するのは、「無意識の情欲」と考えざるを得ないので、ここでも意識が蚊帳の外となっている。中世の意識は、善にも悪にも弱く、「真理」も「罪」も「墮落」も、意識とは係わりのないところで動いていたのである。

さて、近代になると、さすがに意識の力は増してくる。十七世紀のデカルトが、意識こそが唯一の、絶対に疑えない明らかさだと宣言し、「理性＝精神＝意識」という等式を、近代思想の旗印として掲げたのだった。しかしながらデカルトにおいても、心のすべてが意識ではなかった。知っているのに、思い出せないことがある。眠っても「我」は消えないから、「我思う」がこっそり働いているはずだ。意識で考えなくとも、込み入った仕事をこなせる。こうした事実の前で、デカルトでさえ、精神は無意識でも活動していると認めざるを得なかった。

十八世紀半ばの哲学者ヒュームも、意識を持ち上げた一人である。彼は心の働きを、「印象」

と「観念」からなるとした。五感の受ける感覚が「印象」を作り、「観念」はその名残りだ。これらが意識を作り上げる。「印象」と「観念」には、互いのあいだに「連合」ないし「連想」と呼ばれる仕組みがある。きれいな色の食べ物美味しくければ、きれいな色と美味が連合する。すると、色がよければ美味しいと判断できる。たしかに一つの秩序だが、あまり当てにはならない。とはいえ、騙されながらも、なんとか暮らしてゆける。私たちの知識とはせいぜいこの程度だ——そうヒュームは説いたのだった。

意識がそこそこ大きな顔をしている。けれども、意識を動かす連合・連想の仕組みは、ヒュームが観察や思考実験に苦心して発見し、世に問うたものだった。連合・連想の仕組みは私たちの意識に無いし、考察に苦心したのだから、ヒューム自からにさえ意識できていなかった。もし意識だけで心ができているなら、ヒュームの『人性論』は書かなくてよい著作のはずで、彼は無意識の心の動きを研究し、明らかにしたことになる。彼に影響を受けたカントにも、同じことが言える。

それから半世紀あまりのち、「ドイツ観念論」の大成者ヘーゲルが現われた。そこでは、意識の役割がさらに小さい。ヘーゲルにとって世界史とは、「理性の論理的な展開」なのだった。有と無との「弁証法」が意識無しでも進み、理性は「自己を実現する」ことになっている。ヘーゲルの立場でも、人間の自己意識は他の動物にない優れた点だけれども、意識のおよぶ範囲はとても狭い。しかもしばしば乱れ狂い、フランス革命の恐怖政治のような惨状に導いてきた。そしてこれさえも、もとをたどれば意識できない理性の働きで、計り知れない無意識の「理性の狡知」が浅く愚かな意識を操り、その集大成が世界の歴史となる。

このように十九世紀のはじめには、〈意識革

命〉の対極のような心がけが大はやりだった。二十世紀の後半まで大きな影響力を保ったマルクスにおいても、民衆の意識は指導と改造の対象でしかなかったが、それは彼がヘーゲルをそっくり受け継いだからである。

こうしてみると、思想史のなかの意識は、西洋に限ってさえいかにも頼りない。もちろん、私たち日本の〈うぶすな〉では、これ以上に頼りなかった。ところが十九世紀の半ばになって〈意識革命〉が始まり、意識は分不相応な立場を得て今に及んでいる。

### 〈意識革命〉の三つの流派

十九世紀半ばから後半には、「意識が真理を支える」「意識に拠らない学問は迷信だ」などと、様々な分野の一流の学者たちが声を揃えていた。西洋の学問が、ほぼすべてにわたり〈意識革命〉の支配を受けていたのである。西欧思想の長い意識軽視の伝統を根もとから覆す革命であった。主張には様々なタイプがあるが、三つの流派に分けて記しておこう。〈意識一色流〉〈意識棲み分け流〉〈意識植え付け流〉である。

〈意識一色流〉とは、宇宙のすべてを意識の一色で塗りつぶす考え方で、意識さえあればすべて片が付く。〈意識革命〉の本音を素直に白状している。

〈意識棲み分け流〉は、意識の力を認めつつもブレーキをかけ、意識の及ばないところに手を出さない流派である。謙譲の美を感じさせなくもないが、意識の通用する領域では絶対に支配を求める強引さも合わせ持つ。

〈意識植え付け流〉でも、意識の及ばないところを認める。ところが、そこにできるだけ意識を植え付け、征服しようと企てるのである。意識による征服志向と言え、〈意識革命〉の本性をいちばんよく示すかもしれない。



## 〈意識一色流〉<sup>いっしき</sup> —— 人間が宇宙を呑む

物理学者のティンダルは西暦一八七四年、英国科学協会の総会で基調報告を行なった。これが、賛否こもごもの大騒ぎを引き起こした。新しい進歩の時代には、自然科学こそ正しい知識への唯一の道になる、つまり科学のみが「真理」だと言い立てたのであった。英国科学協会は日本で言えば学術会議に当たる公式の権威だから、〈意識革命〉の勢いを象徴する出来事であった。『ベルファスト講演』として知られるこの報告には、多くの科学者が熱烈な支持を寄せた。一方、保守派は倫理的に危険として、激しい攻撃にまわった。保守派は「唯物論」として非難したのだが、ティンダルが持ち上げたのは、ふつうの物質ではなかった。

私たちの聴き、見、触れ、味わい、嗅ぐすべては、ただ私たち自からの変化に過ぎない。これを越えては毛筋ほども進めない。私たちの外側に、私たちの印象に應ずる何か<sup>いっしき</sup>が実在するとは事実でなく、推論なのだ。（『ベルファスト講演』）

意識は「印象」と呼ばれ、ヒュームからの流れを感じさせる。はるかな宇宙についての知識すら人間の手許にあるこの意識に他ならない、<sup>いっしきいっしきりゅう</sup>というのだ。こうした立場を〈意識一色流〉と呼ぶ。心理学者なら意識を持ち上げて怪しくあるまいが、言い放ったのは当代一流の物理学者だった。これが「唯物論」なのは、感覚がともとも卑しい「物質の心」として蔑まれてきたからである。そう思えば、物理学者がこの立場をとったのも、分からないではない。

実験心理学者ヴントも、〈意識一色流〉に属する。彼の考えはさらに徹底し、知識だけでなく、宇宙のすべてが意識から成るのだった。こ

の意識をヴントは「表象」と呼ぶ。意識は、〈心の囲い込み〉のあらゆる領域を踏み越えて宇宙に広がり、まさに意識一色だったのだ。

ヴントとよく似た立場の、もう一人の高名な物理学者エルンスト・マッハをあげておこう。音速の単位に名を残す彼をアインシュタインは、「相対性理論の一手手前まで来ていた。もうちょっと若ければ、彼がこの理論を発見していたろう」と評価している。マッハはティンダルより少し若く、ヴントと同世代だった。

赤、緑、温、寒、等々、これらはすべて何と呼んでもいいが……さらにわれわれの関心を惹き得るものは、これらの要素間の関数的相互依存関係（数学的な意味における）だ。要素間のこの関係を物と呼びたいければ呼んでいい。（『認識と誤謬』井上章訳）

宇宙は物体から成る。それはそうだが、マッハによればその「物」とは、感覚の数学的秩序のことなのだ。私たちが「物」と呼ぶのは、色や熱さ、冷たさや固さなど、感覚を組み合わせたものに他ならない。また、そうでしかあり得ないという。宇宙のものごとの知識は、すべて意識の内にある——マッハもこう言ったのだった。

ここで意識よりも「真理」に目を向けてみると、マッハもティンダルもヴントも、一つのやり方のみを絶対に正しいと考えているのに気付く。「真理」の独り占めの試みで、それを外れれば誤りとなる。すなわち〈一つ掲げ〉が、ここにも顔を出しているのである。かつてはキリスト教の神が、有無を言わず「真理」を独り占めしていた。意識がその役割を引き継ぎ、新しい「指導者」となったのが分かるだろう。意識は正体不明の「明らかな謎」だった。この点でも、神様に似ているではないか。

それなら、神と意識はどこが違うのだろう。意識なら「真理」が、建て前としてだが、人間の手許にあるけれど、神は人間を超越して支配する——人間中心主義か神中心主義かの違いなのである。キリスト教の信者にとってならたいへんな違いだが、この宗教を離れて見るなら、「真理」を独り占めする者の居場所の違い、あるいは「指導者」の名前の違いに過ぎない。

### 〈意識棲み分け流〉—— 神様への遠慮から新たな「指導者」へ

〈意識一色流〉は勢いがよく、すっきりしているが、あまりに極端、よく言えば素直過ぎて馬脚を現わしやすい。意識さえ変えれば万事解決とならないのは、みんなが知っている。もうちょっと控えめで、分別のある学説が〈意識棲み分け流〉である。

〈意識革命〉に刺激を与えた実証主義の運動を始めたのは、社会学の創始者でもあるオーギュスト・コントだった。意識の上に学問を築こうとしたコントこそ、この動きをまさに「革命」と表現した人物である。

人間の知恵の成熟の徴となる根本的な革命の要めとは、手の届かない本来の原因の代わりにただの法則を、すなわち観察できた諸現象のあいだの決まった関係を探ることなのだ。……現象がどう産み出されるかの神秘には、けっして立ち入れない。(『実証哲学講義』)

「観察できた諸現象」とは、感覚を用いて集めた情報のことである。マッハの発言と驚くほど似ているが、こちらのほうが半世紀ほど早い。

ところがここには、マッハに無い「本来の原因」という言葉が加わり、コントはそれを「追求するな」と言っている。意識とそれに基づく

学問には、力及ばないところがあるというのだ。コントはその追求をしりぞけたけれども、「原因」の存在まで否定してはいない。「本来の原因」を求めれば、世界の創造者に行き着かざるを得ない。つまり「原因」とは神秘だから、不可能なことは諦め、知りうることに学問の範囲を限るのが大人のやり方だ、と論じているのである。そうやって見付かるのが「ただの法則」だという。

コントの語りには、〈意識棲み分け流〉の謙遜と自信とが同居していた。こうした身構えのもとには、さらに半世紀ほど前のカントにある。「批判哲学」三部作で評価を高めたカントは、その後に売れっ子となったヘーゲルらの陰に隠れ、しばらくは目立たなかった。それが十九世紀の半ば、急に復活し、「再評価」どころか史上最高の哲学者とさえもてはやされたのである。そのカントこそ、〈意識棲み分け流〉の守護神であった。

カントは意識の働きを「批判」した——が、否定したのではない。カントも、感覚から来る「現象」を知識の源と考えていた。知識は意識に基づき、それ以外からは知りようがない。しかし、私たちが知りうる「表象」などは仮の姿で、ものごとの本体とは異なるというのだ。「ものそのもの」は知り得ず、もしそれを意識で語れば必ず誤る、と「批判」したのだった。コントの立場がこの説の発展なのは、見やすいところだろう。

復活したカントの影響は、西洋の学問全体にわたった。マッハより十数歳年上の物理学者に、ヘルムホルツがいる。彼のまとめたエネルギー保存則は、いまなお物理学の基本法則をなすが、そのあと心理学の研究に進み大きな足跡を残す。ヴェントは、ヘルムホルツのもとで数年間、助手を務めた人物だった。ヘルムホルツも、エネルギー保存則の論文はカントの強い影響下で書いたと、自から記している。物理法則

とは「ものそのもの」の学でなく意識の「現象」の秩序に他ならないと、ヘルムホルツもまた考えていたのである。

この仕事の完成は、現象を単純な力に委ね終え、しかもそれこそが現象に許される唯一の可能な委ね方だと、証明できたときなのだ。するとその結果は、自然把握の必然的な概念形式として証明されたことになり、そうなればまた、客観的な真理とも呼ぶべきだろう。（『力の保存について』）

「この仕事」とは理論物理学で、「力」と記されているのが、エネルギーのことである。彼は一次元の数値で表わせる単純な量として、エネルギーを定義した。エネルギーは形を変えても不変に保たれるから、計算して利用できる。理論を工夫し、現象のすべてをエネルギーに結びつけるのが理論物理学の仕事となる。理性の作り上げたものだから、理性に従うはずなのだ。そしてこの理性の細工を「客観的な真理」と呼ぶのだという。

〈意識革命〉時代の自然科学の姿の典型が、ここにある。かつて「物質の心」は、悪魔と通ずるほどの、怪しい力を備えるはずだった。いまやそれが、命令どおりに動く奴隷に落とされているのである。感覚を持ち上げた「唯物論」のようによろしく見えるが、じつは毒抜きして飼い馴らしている。

「客観的な真理」という立派なものが、卑しい物質の許にあってはならない。その「真理」は、じつは人間の側の「概念形式」に、つまり理性の内にある——これが「観念論」とされるカント思想の肝であった。「批判」とは名ばかりで、自信満々の理知主義に他ならない。ヘルムホルツはこの「指導者」の思想を、忠実になぞっていたのである。

この近代物理学は、見方を変えると、悪魔の

力を否定する思想でもある。かつてデカルトにとってなら、悪魔が感覚を乱すのは当たり前だった。理性による数学の計算さえ欺く可能性があったからには、もともと罪深い感覚を騙すなど朝飯前だ。彼はこうした徹底した疑いの果てに、ようやく「我思う」だけは確かと結論したのである。この結論は怪しいが、ともかくもデカルトは悪魔と正面から対決し、苦勞の末に意識の立場を打ち立てていた。ところがカントやヘルムホルツは、人間の理性への信用を頭から宣言したのである。怪しい物質とともに、誘惑を仕かける悪魔もまた問答無用で消してしまったが、なんの根拠も示してはいない。

さて「悪魔」とは、人間以外の森羅万象の心のことだと、説明を加える必要がある。ほとんどの日本人にとっては、意外に違いないけれど、キリスト教の教義ではそうになっている。——何であれ、定められた世界の秩序を変える者は、神か悪魔かどちらかしかあり得ない。キリスト教の神は「一つ」だから、それでなければ悪魔なのだ。だから私たちが先祖を祀ったり、天地のあちこちにいる神仏を拜むのも、すべて「悪魔崇拜」となる。

ことに御利益を願う場合には「呪術」と呼び、宗教とは似て非なるものと扱う。「呪術」を嫌うのは、人間の意思で「自然の秩序」を変えようとするからだ。キリスト教はこれを、「創造主」への冒瀆と見なす。つまり日本には「宗教」はほとんど無く、悪魔と契約する「呪術」ばかりということになるが、日本でも多くの宗教学者が、基本的にこの説に従っている。

カントは罪深い「物質の心」の本来の力を問答無用で奪い、感覚の怪しさを〈無いがしろ〉にすることで、キリスト教の神に仕えたのである。儀式こそしないが、理性の力で「完全な悪魔祓い」を成し遂げたのだと言える。あるいは、魔女狩りの完成でもある——魔女の「存在」そのものを消してしまったのだから。

意識に「与えられた」感覚は従順なデータとなり、理性の確実な働きが例外の無い秩序を作り上げる。〈意識棲み分け流〉でも、やはり意識が「真理」を掌るのである。内弁慶だが、身内に対してならまさに神様並みの力を備える。〈意識革命〉の「指導者」とかつての支配者とは、重なって見えてくるだろう。

### 「〈白〉無意識」の「発見」と理性の逆襲

物理学者さえ意識から学問を作ろうとしたのが、〈意識革命〉真っ盛りの雰囲気だった。それでも〈意識一色流〉は、さほど多くなかった。ヘルムホルツの思想には、手を出せない「ものそのもの」に加え、意識をはみ出すところがもう一つある。「無意識」の働きを言い立てたからである。

人が適切に行動できるのは、まわりの有り様に秩序を見出すからだ。複雑な判断のはずだが、その下し方を私たちは知らない。つまり、無意識で判断しているとヘルムホルツは考えたのだ。これを「無意識の推論」説と呼ぶ。高名な物理学者が精神分析よりずっと早く、フロイトの生まれたころに、無意識を口にしていた。ただしこれを「無意識の発見」と考えてはいけない。すでに述べたとおり西欧の思想史では無意識が当たり前で、むしろ〈意識革命〉が急に意識を持ち上げたため、対比して「無意識」を語らねばならなかったのである。

もっともヘルムホルツの無意識は、フロイトらのものとは大幅に異なる。臨床心理学の無意識は愚かな無知の力で、意識に変えれば心の病まが治るといふ。しかしヘルムホルツの無意識は、無知どころか科学の知識を組み上げる。だれでも日ごろ、物理学の実験と同じことを、無意識で行なっているという。こうした理知の無意識を、「〈白〉無意識」と呼んでおこう。臨床心理学の無意識の方は、病まを起すので「〈黒〉無意識」とする。

理性的な無意識、つまり〈白〉無意識の思想を抱いた科学者は、ヘルムホルツだけではない。彼の師と仰いだカントがすでにそうだし、十九世紀の後半から急速な発展を見せた数学や論理学の研究も、「無意識」の言葉こそ使わないものの、同じ発想で動いていた。アリストテレス以来の論理学者と評判のフレーゲや、大著『数学の原理』を著したラッセルらは、論理と数学の原理が意識とは別の、高度な精神世界にあると考えた。厳密な規則がどこかになければ、計算問題の正解が答案の平均値になりかねない、と彼らは主張したのだった。

数学や論理学を支える規則は、絶対に正確でなければならない。しかし、問題を解くのはたやすくはない。つまり、意識にない規則に従う〈白〉無意識なのだ。数学や論理学の体系を作ったり定理を証明する仕事は、〈白〉無意識の働きを意識に引き出す努力ということになる。

〈白〉無意識説は〈意識革命〉に反するかに思えるが、決してそうではない。絶対に正確な「真理」を両者が共有するからである。〈意識革命〉を先導した実証主義は、新しい時代にふさわしい「真理」を求める革命なのだった。意識も「真理」を与えるかぎり、理性の仲間である。〈白〉無意識も意識も、ともに「理性の真理」の仲間である。そして、そもそも意識が正体不明だとすれば、名付けだけの違いに近くなる。

じっさい、精神の理性を〈白〉無意識とする人は少なく、漠然と意識の一部と考える場合が多い。重点が「真理」にあるからである。〈意識革命〉の世界では、「理性＝精神＝意識」の等式がほぼ成り立つから、意識のところに「＋〈白〉無意識」と加え、「理性＝精神＝意識（＋〈白〉無意識）」としてよい。この等式が「真理」を独り占めにするのである。〈意識革命〉の時代の新しい「指導者」がほんとうは古い支

記者の変装だと、いよいよ気が付かれるではないか。トランスパーソナルで個人の意識を破る試みを進めるとき、このような「高貴な理性」に搦め捕られぬよう、用心に越したことはない。

私たち日本の〈うぶすな〉なら、理性の締めつけなど無くとも、〈おのづから〉歩める。震災の打撃のなかで暴動、略奪を起こさず助け合えるのは、「理性的」に振る舞うからではない。平成二七年五月の四月末に起きたネパールの大地震でも同じだった。毎日、一千人を超す被災者たちが整然と列を作り、ケンカも奪い合いも起きなかったという（産経新聞 平成二七年五月六日）。日本の〈うぶすな〉の心は、日本人が独り占めする筋合いのものではない。

かつてヒュームは、学問をふくむ人の暮らしの一枚看板に、「感覚」の作り出す意識を掲げた。五感で見る、聴く、味わう、嗅ぐ、触れる「感覚」を、キリスト教の神学は「罪深い肉体」の下等な営みと貶めてきた。ヒュームらの革命思想は、この下々の者を「真理」に祀り上げ、古い体制の転覆を図ったので、「唯物論」と非難された。なるほど、その限りでは勇ましく見える。

ところがいまや、物質は意識となったのである。物質は、かつて人間の精神を墮落や罪に誘ったあの怪しい力を奪われ、悪魔の手先のはずの感覚も欲望も、もはやただの意識に過ぎない。「ああ、感じる」だったものが「印象」と「観念」に化け、危険なはずの心が「～という意識」へと変えられた。「感覚と欲望というデータ」となって呑み込まれたのである。ヘルムホルツ以降、心理学者も物理学者もみな口をそろえて、「データ」を語る。意識に与えられた「データ」は、精神の理性が処理する。感覚も欲望も、悪魔の手先どころか、屠殺場に送られる哀れな子羊か、理性に仕える奴隷に変わったのである。

科学と技術はともに物質を計画的に扱うのだから、もともとこうした性格を備えている。つまり科学とは、理性による物質の支配なのだ。「工学の上澄みをすくい取ったのが科学だ」と言った人もいる。保守派は科学主義を、感覚や欲望の名目に反発し「唯物論」と非難したけれど、科学の理論も実践も、実質はほとんど「観念論」の勝利と言ってよい。フランス・ベーコンは、十七世紀はじめに自然観察の重要性を説いて、近代科学の先駆者との評判を得ている。その彼はキリスト教の神学者で、観察を「自然への拷問」とも呼んでいたのである。

私たちの〈うぶすな〉では、「物質の心」のあり方が違う。精神でなくとも、理性でなくとも、怪しいとか罪深いとか決めつけはしない。人びとの体をふくめ山川草木のすべてが、〈お互い様〉でいろいろと教えてくれ、〈お蔭様〉で有り難いから、奴隷化も家畜化も必要がなかったのである。

ところが、〈意識革命〉が日本に入ってくると、これを西洋の「物質の心」並みに扱いはじめた。そこで、「猥褻」とか「迷惑」とか「ハラメント」などの言葉が流行りだしたのである。毒キノコがあるからといって、キノコはみんな毒と決めつけ、マツタケを踏みつぶすようなものだ。それがいま、〈うぶすな〉の心に息苦しさをもたらしめている。

### 〈意識植え付け流〉

〈意識革命〉の三つ目の流派として、〈意識植え付け流〉を説明しよう。意識の力を信頼する点では、さきの二つと変わらない。だがこの流派はもう一步を踏み込み、敵との戦いを掲げる。憎い敵役が〈黒〉無意識である。〈意識植え付け流〉は文字通り意識を植え付け、〈黒〉無意識を消し去ろうと狙っている。「真理」を与える理性＝精神＝意識による、無知で野蛮な〈黒〉無意識への侵略・征服戦争と言ってもよ

い。

この流派でおそらくいちばん名の知れた人物といえば、精神分析のフロイトだろう。彼は、次のように述べている。

症状の意味が意識されないこと、それによって症状が成り立つのです。成り行きが意識にあれば、症状は形をとれません。無意識が意識となるやいなや、症状は消え失せざるを得ないのです。(『精神分析入門講義』)

病気になるのは、だれでも有り難くない。有ってはならないものが、無意識から起こるといふ。すなわち、敵役の〈黒〉無意識に魔力が備わるとの想定なのだ。〈黒〉無意識とは何だろう。野放しにできず抑え込むべきものとは、あの卑しくて罪深い「物質の心」に似ていないだろうか。もちろん、私たちの〈うぶすな〉をなす山川草木の心ではない。キリスト教の仕来たりが踏みつける、下等な心のことである。フロイトはまさに、〈黒〉無意識が肉体=物質から湧いてくると考えていた。

データと化し、死に絶えたかに思われた「物質の心」のかつての本領は、じつはまだ生き残っていたのだ。奴隷となった意識のデータから滑り落ちた力が、新しい時代の無意識に化けていたのである。ところが精神分析の誕生で、「物質の心」の根絶作戦が始まった。こっそり抵抗を続けていた卑しい心のゲリラ戦の本拠に、〈意識革命〉の「指導者」がついに標的を定めたのであった。

〈黒〉無意識は、怪しい欲望の固まりだ。けれども、「症状の意味」が意識に入れば病まいは癒える。しかも、意識から病まいはけっして起こらない——こう語るフロイトにとって、意識はまるで副作用絶対無しの万能薬である。

精神分析はこれまで、「無意識の心理学」と

して知られてきた。しかしこの評価は、「フロイトが無意識を発見した」とのウソを、彼の弟子たちが広めたゆえの誤解である。むしろ精神分析は、徹底的に意識を信頼してのみ成り立つ。つまり、〈意識革命〉の立派な申し子なのだ。

フロイト自からの次の言葉ほど、この事情を雄弁に語るものはない。

この研究の出発点をなすのは、どんな説明も記述も受け付けない、意識という並らぶものない事実なのだ。意識を語る場合でも、己れの経験から直かに、何のことなのかを知っているものだ。(『精神分析概説』)

意識は、説明も記述もできない——フロイトもこう認めている。「明らかな謎」なのである。しかし彼は、意識が説明も記述も要らないのは「並らぶものない事実」で、だれにでも直かに知れるからだと語る。「自分の胸に聞いてみる」との責任の押し付けで、説明できないときの騙しの手口ではなからうか。

### 〈黒〉無意識の征服は魔女狩りの衣替

さきの『精神分析入門講義』の引用の続きは、意識すれば症状が消えるとの説を、「基本となる新しい事実」と書いている。もはや説明が不要で、そこから他の説明が出発してゆくのだという。新しい「指導者」の託宣となっており、キリスト教の神の言葉と変わらない。意識という名前の「ビッグブラザー」が新たな「一つ」として登場し、耳にタコのできた物語り、見飽きた芝居が、役の名前を変えただけでまた演目に上がったのである。敵役の〈黒〉無意識も、衣装こそ新しいが、中身はすっかり昔からの悪役と同じだった。

キリスト教はこの悪くて怪しい「物質の心」と、ずっと戦ってきた。その最たるものが、

「魔女狩り」をふくむ異端審問となる。異端はつねに、感覚と欲望を通じ悪魔と手を組むのだった。したがって異端者を処刑するのは、けっして人間への圧迫ではなく、むしろ病んだ人の「精神」を健康にする「治療」なのだった。それにより魂を救い、人間の「尊厳」を取り戻させる愛の行為——オウム真理教の「ポア」の論理と同じものだったのである。

フロイトも自から、精神分析が魔女裁判だと認めていた。

ヒステリーの原因を説く新しい僕の説が、じつはもう知れ渡っていて、数百年前とはいえ何百回も公表されていたと言われたら、君はどうする？宗教裁判所が認めた中世以来の悪魔憑きの理論……拷問で引き出した自白が、なぜあれほど、心理療法の患者の語りに似ているのだろうか。（フリースへの手紙／一八九七年一月一七日）

精神分析の正体は、近代の宗教裁判だった。けっして言葉のアヤではない。魔女裁判は、「物質の心」と戦ったのだった。それが〈黒〉無意識に姿を変えているいま、精神分析こそが新たな裁判所となる。患者が「治療」のなかで語ることも、魔女裁判にそっくりなのだ。患者の言葉に基づいて、精神分析家が患者の意識を判定し、分析することが治療なのだから、分析家は患者の、人間としての基本的な条件を左右するのである。

この立場を今も、精神医療と臨床心理学のほとんどの流派が引き継いでいる。〈黒〉無意識も意識も、患者個人の「内面」にあり、本人のみが直かに触れ得るはずだ。ところが他人の「心の専門家」は、個々人に囲い込まれている心の中身を判定、操作できる不思議な力を備える。しかも病んだ精神を正しく導き、人間としての「尊厳」を取り戻させるという。

そんな力が、いくら革命とはいえ、近代のただ中に急に「無から」現われるはずはない。かつての全知全能の神の地位を、「ビッグブラザー」たる意識が受け継いだ徴しなのである。このことをいちばん鮮やかな形で打ち出したのが〈意識植え付け流〉となっている。精神についての医療や保健を導く原理は、今も昔も、異端審問なのだ。

フロイトは〈黒〉無意識の源を、「エス」と呼んだ。「それ」という意味で、論理も分別も言葉もなく、やみくもに要求を押し通そうとするだけ、と彼は記している。想像を絶するとてつもないものと思われがちだが、じつはありふれた話である。なぜなら、ずっと古くから西洋の「物質の心」の特徴をなしてきたことなから。

「エス」はどこにあるのか？

エスは……自我にぶつかる相手としてのみ記せます。エスを譬えれば、渾沌、興奮の沸き立つ釜と呼べます。身体に触れる端が開いており、そこで衝動の要求を汲み上げると、エスの中で心としての表現をとると考えられます。（『続精神分析入門講義』）

「エス」は「身体」に直結しているという。ここでの「心としての表現」はまだ無意識だから、〈黒〉無意識が「エス」の中に体から湧いて出ると語ったことになる。フロイトは「エネルギー」という、物理学で流行りの言葉も取り入れが、それで中身は変わらない。あの古い、罪深く怪しい「物質の心」が、新たに「エス」の名前で復活しただけなのである。この「エス」を開拓し、「自我」に変えてゆくのが精神分析の「治療」である。

精神分析とは、言い換えれば、「物質の心」の奴隷化・家畜化を進める業である。それは、終わりのない戦いらしい。しかし、なにしろ

「真理」を得るための戦いなので、止めるわけには行かない——〈おのづから〉に任せるなど、とんでもない。それは「真理」をあきらめ、正義と健康を手放し、ついには悪に手を貸す「怠惰」と言われるに違いない。

けれども、落ち着いて考え直せば、この戦いの止めどない欲望こそ「エス」にそっくりだと気付くだろう。両極端は往々にして一致するのである。意識で明らかにするのが解決なのだから、その「フロンティア」の拡張こそ「進歩」に他ならない——こうした考え方は精神分析に限らず、西洋起源のほとんどの臨床心理学に共通している。日本で「トランスパーソナル」を進めるに当たっては、こうした罫に落ち込まぬよう気をつけたいものである。

### 〈意識革命〉の持続

「真理」を与える理性＝精神が意識に等しいことを、医学・生理学は、表向き忘れた。だが〈意識革命〉は、まだ健在である。ことに〈意識植え付け流〉は、臨床心理学と精神医学において理性＝精神＝意識の等式を掲げ続けている。いまも表立って意識を扱い、まともな人間としての条件を評価するので、中身の乏しい割りに強い権限を備えた体制なのである。

精神分析は、三十年ほど前までアメリカで大流行だったが、いまは臨床心理学の主流を追われている。わが国では、精神分析の流れを引くユング心理学がもてはやされたけれどもいまは衰え、「認知行動療法」が力を得ている。ロジャーズを開祖とする「カウンセリング」は、それらの間であって比較的息が長く、まだ続いている。

色とりどりだが、基本となる考えはすべて〈意識植え付け流〉である。つまり、意識が〈黒〉無意識を支配する仕組みを共にしている。要するに、「物質の心」の奴隷化・家畜化に他ならない。ロジャーズの「カウンセリング」

は、政治的に精神分析と対立したが、理論ならそっくりである。「認知行動療法」も、意識の歪みを病みの原因と考える。個人の内側に「心のモデル」を想定し、気付かなかったところを正しく意識し、歪んだ考え方を直せば問題は解決するという。

認知行動療法は「行動主義」の心理学に基づいている。行動主義は、意識をはじめとする心を、「観察不能」を理由にいっさい論じないのが特徴である。〈意識革命〉に反する動きのようだが、じつはそうではない。「意識はそれぞれの人の主観だから科学的には分からない」というのが「観察不能」の意味で、意識を「個人の内面」に囲い込む思想の変形に他ならない。意識を存在しないと考えるのではないのである。行動から推定した「心のモデル」を作り、その中に意識と無意識を置く。そのモデルに従って、様ざまな「治療」を工夫するのが認知行動療法となるのである。

では、なぜ「治療」する必要があるのか？——それは、患者の意識のあり方が「現実」を外れていて正しくないから、とされている。これを直すのだから、「治療」とは意識のあり方を直すことに他ならない。言い換えれば、理性に照らし患者の心を調教することなのである。〈意識植え付け流〉のまったく色あせないのが知れるだろう。

さらに、臨床心理学の求める「正常で健康な意識」こそが、他の科学研究をも支える。自然科学者たちはほとんど意識を口にしないが、それでも自分たちの研究が「正常で健康な意識」に基づくことは疑われない。意識できない神や霊に教わった、とは言わないし、子どもや「精神障害者」に研究を任せられるとも考えていない。そのことを思えば、科学の全体に通ずる名目上の鍵は、今もなお心理学が握っているのである。

西洋の科学は、「証明」とか「実証」ができ



ないと気が済まない。近ごろでは「エビデンス」と言うが、これは訳せば「明証」のことである。すなわち、意識に現われるという「真理」への止めどないこだわりが、あい変わらずなのだ。〈意識革命〉は、表看板こそ小さくなったが、正体はいよいよ元気である。精神と理性はもともと、キリスト教の神様のものだった。この神様が、意識という名の新たな「指導者」に化けたに過ぎないので、「存在のハシゴ」の上下を決める目印が、現代では「正常で健康な意識」＝理性となっているのである。

### 「心の専門家」の謎の力と民主主義の崩れ

〈意識革命〉は、裁判という人の命を奪うかもしれない局面にまで、力をふるう。「心の専門家」の鑑定結論はしばしば一致しないけれど、彼らがこの失態で権威を失うことはない。イタリアでは、地震を予知できなかった専門家が一番で有罪となったが、心については事情が違うのだ。採用されなかった精神鑑定の作成者が罰を受けるなど、捏造や贈収賄でもないかぎり、あり得ない。鑑定ができなくても、失敗しても、権威だけは保てるのだから、やはり「心の専門家」の力は人間を超越するらしい。

裏を返せば、「専門家」でさえ意識はきちんと判断できないとの前提で、司法は動いていることになる。権威を帯びた人びとがほんとうは無力だとその前提を、裁判制度は実質的に組み込んでいるのだ。「人間の基本的条件」をめぐる意識の「明らかな謎」が、裁きの庭をも覆っている。制度が無力と認める「心の専門家」が、その同じ制度によって、意識について正しく判断できるかの如くに扱われるのである。革命の「指導者」の理性が、強権を発動したかのようではないか。

無力な「心の専門家」による判断の場面は、裁判だけではない。私たちの暮らしの様ざまなところに、根柢の無い強権が入り込んでいる。

医療では精神科、神経科、心療内科の医師がこうした専門家である。医師でなくとも、学校のスクールカウンセラーや児童相談所の職員は、意識と心について判断を下せる。「臨床心理士」という民間資格もあるが、この度びついに「公認心理師」を国家認定で定める法律が通った。これらの専門家により人の心と運命が、公認で左右されるのである。

大勢が無事に暮らすところで、少数の人がうまく立ち回れないとき、不都合の原因は少数の意識に帰せられる。不適応が「自己責任」となるのである。はみ出した少数の人の意識を手直しすれば、全体の問題が解決することになっている。

この解決法は、矛盾含みの二段構えになっている。まず一段目では、万人平等の民主的な意識所有の建て前が働いて、本人の責任を形成する。個人の意識は、本人だけが明らかに知っているし、人間なら誰でもそのはずだ。不適応の原因を知っているのは本人だけなのだから、手直しはその人の責任となる。ただし、民主主義のこの建て前は、見せかけに過ぎない。なぜなら、当人の意識が誤っていると決めるのは本人でなく、周りの大勢の立場と専門家とだからである。

本人が手直ししなければ、二段目に入る。こんどは意識の個人所有の建て前さえ取り払い、専門家が無理にでも直させるのである。他人からは知り得ないはずの心を、「心の専門家」だけが判定できる。意識が誤っていれば人間としての条件を欠くのだから、この当人は一人前に扱わなくてよく、民主主義の適用除外となる。

専門家の権威はものすごい力だが、意識や心について専門家に尋ねても、答えは得られない。意識は「明らかな謎」であり、学問の裏付けがない。なにしろ臨床心理学は基礎研究をほとんど行わず、臨床さえしていればよいとされ、その実践報告を研究と見なすのが現状と

なっている。そこに制度が権威と力を与えるのである。

二十一世紀の精神医療の主流は、向精神薬を乱発している。他人の心への薬の効きも、専門家には判定できるからである。「誤った意識を持つ」当人には心の薬の効き目は判断できず、さらには家族をふくめた周りにも決められない。素人に難しいことは分からない——専門家にだけは分かる。この権威があれば、専門家以外には効き目が不明の薬でも、処方し続けてよいのだ。

いま流行りの認知行動療法の理論は、専門家の権力をさらに強める。心は科学的には「観察不能」なのだった。したがって、心のモデルは好き勝手に作ってよい。当人をふくめ、だれもこのモデルを「違う」と言い切れない。しかし、専門家が「効果あり」と認めれば、治療に用いたモデルは正しいことになる。意識は「明らかな謎」で身を隠しつつ、「真理」を与える理性として、いまも前線を押し進めつつある。

現代は〈意識革命〉を、表向きあまり語らない。だが、専門家の権威や「人間の条件」にはしっかりと、私たちの暮らしを左右する力を残しているのである。

## 五 〈うぶすな〉の心

日本発のトランスパーソナルを試みるうえで、下地となりそうな事柄を考えておこう。ペリーの大砲の毒の名残りでできた三つの「しがらみ」は、太平洋戦争の敗戦でさらに纏れている。それをほぐすには、〈うぶすな〉の心に新たな息吹きを与えるしかない。ハイデガのように人間の身勝手に居直るのでなく、天地万物、森羅万象に〈お蔭様〉を感じ、〈お互い様〉で付き合い、〈おのづから〉道を見出して近代的個人を超えるのが、人間のみならず、地球上のすべてにとって心地よい道ではないだろうか。

## どちらが「迷信」か

現代の〈心の囲い込み〉思想の説く「心は脳の働きに等しい」には、根拠が見当たらない。政治や利権の作った制度が、人の暮らしと命に枠をはめているのだと言える。この動きを始めたのは、黒船の弾丸に狂った明治政府だった。「文明開化」を掲げた文部省は、「啓蒙」のための文書をたくさん庶民に配った。民衆を蔑んでいたわけだが、識字率が高いからこそできたやり方でもあった。高度な木版技術を生かし、浮世絵仕立てに刷ったものもある。

「日蝕は、太陽と月が一直線に並んで光が隠れるだけだ。未開の世では悪い事が起こる兆しと恐れしたが、開化の世では当たり前のこと。吉凶に係わらないから心配は要らない」などと、大がかりな宣伝に政府が動いたのであった。江戸時代の暦には「月の水が日の火を消すので、人の気も塞がる」などと書いてあったが、明治政府はこれを「迷信」と否定し、天体の動きは機械的だから心には無関係との思想を広めた。すなわち、〈心の囲い込み〉政策に他ならない。

十七から十八世紀にかけ、江戸幕府は平安時代から千年近くも使われていた宣明暦を改めた。渋川春海、西川如見らによる貞享、宝暦、寛政の改暦で、ケプラーなど西洋天文学の知識を取り入れた動きだったが、それでもなお新しい暦に、陰陽道に基づく「歴注」の書き込みを残していた。かつての日本人は、機械的な動きを重んじつつも、天体の吉凶を同列に置いたのである。

明治政府はこれを「迷信」に変えてしまった。しかし、富士山を見るのに富士山そのものが係わるなら、天体の動きの心や暮らしへの影響も、むげに否定できないのではないか。出産が満月と新月に多いのは、統計的に確からしい。天体の動きは人の暮らしの吉凶に、もしか

すると未知の仕組みで係わるのかもしれない。それを係わらないと断定するほうが、ほんとうの「迷信」ではないだろうか。

江戸時代の暦の「月の水」と「日の火」は、今の物理学で言う水や炎とは異なる。〈うぶすな〉に暮らした人びとが、月と太陽の心を読み、心を込めた言葉なのだ。水と火の心根が、日蝕に読み込まれているのである。現代から見ると正確かどうかは問題ではない。それを言うなら、明治時代の科学にも、今から見れば山のような間違いがあった。二十一世紀の科学にもまだまだ誤りがあり、未知の事柄は海のごとくあふれている。そうした科学を金科玉条に掲げ、合わなければ「迷信」呼ばわりするほうが、よほど人びとを迷わすであろう。

もちろん、日蝕が起こったからといって、直ちに凶事が起こるとは言えまい。大騒ぎしすぎてはたしかに「迷信」となる。だが、明治維新以後に初めて皆既日蝕が起こった明治二十年（西暦1887年）には、東京の日本橋で千五百戸以上を焼失する大火があった。続いて、自由民権運動を弾圧する保安条例が公布（即日施行）となり、言論を抑圧する悪法として名高い新聞紙条例も制定された。海外では、ハワイ王国がアメリカに真珠湾を奪われたのも、この年だった。

甚大な災害、そして日本の将来に暗雲を投げかける重大な出来事が、じっさいにいくつも起こったのである。日蝕とのあいだに因果関係は、ないのだろうか？——「ある」と断定しては迷信となるが、「まったく無関係」と断定するのも同じくらい迷信に違いない。「わからない」とするのが、科学的に正しい態度だろう。そして「わからない」なら、省みて慎むのが、道徳としては正しいに違いない。

東日本大震災を前にして、東京都知事だった石原慎太郎氏は「天罰だと思おう」と語った。「日本人のアイデンティティーは我欲。この津

波をうまく利用して我欲を一回洗い落とす必要がある」とも言った（朝日新聞2011年3月14日）。これがたいへんな批判を浴び、翌日には撤回に追い込まれた。批判は主に、被災者自身に天罰が下ったようで不謹慎だ、と言い立てた。被災者に責任はないはず、というのだ。しかし日本人は昔から、天変地異は悪い政治への戒めと受け止めてきた。石原発言はそのかぎりで「伝統」に沿いながら、〈心の囲い込み〉を破っていたのである。発言を批判する人は、後門の狼を追おうと前門の虎に頼ってはいないだろうか。もちろん、石原氏はまず己れを省みるべきだったのだが。

かつて日蓮は『立正安国論』などの著作で、同じ筋書きを用い、鎌倉幕府に直談判した。頻発していた災害と「邪教」の流行を結び付け、外国からの侵略を予言して亡国の警告を発したのだったが、この予言は当たった。江戸後期の田沼意次の政治は、天明の浅間山噴火や飢饉と結びつけて批判された。庶民もこぞって非難に回り、息子の意知を殿中で刺殺した佐野政言が「世直しの大明神」となった。個々の判断の当否はともかく、〈うぶすな〉の「やまところ」は、この枠組みで動いていたのである。

この「伝統」は明治以後も、しばらくは衰えなかった。大正の関東大震災の折りには、日本人に反省を求める論調を、知識人たちがもてはやしたのだ。この慣らわしは、細々ながらも続いている。例えば、陰陽道の流れを汲む「いざなぎ流」の神楽で有名な高知県の物部村では、神仏に「不都合」を行なうと「お叱り」を受ける。これを除くため神楽を奉納するが、このとき「お叱り」を受けるのは、必ずしも為政者や神仏に迷惑をかけた本人ではない。物部村に限らず「天罰」は、あるいは神罰や仏罰も、当人以外のところに下る場合が、ままある。たしかにすっきりしないが、これも私たちの〈うぶすな〉では、みんな心得ていたはずな

のだ。

「お叱り」は、必ずしも懲罰ではない。報せと受け止め、みんなで読み解こうと努める。責任者を処罰するのではなく、罪そのものを除くのである。石原発言をただの不法な失言と見なす人が増えたのは、この慣らいを忘れはじめた徴しだろう。〈心の囲い込み〉が広まり、天地や海の心を受け止めるゆとりが無くなっている。

東日本震災に伴った原子力事故の教訓を、為政者や大企業の経営者たちが忘れるのは早かった。そして何ごとにも無かったごとく、「安全神話」を再創造しようと企てている。このたびの事故さえまだ何も解決していないのに、「こんどは大丈夫」と平気で言えるし、「世界一安全」と称し外国にまで売り込もうとする。報せが胸に響いていない徴しで、これまた凶事に他ならない。

### 修験道弾圧と「病者」の閉じ込め

富士山だけが「パワースポット」の山ではない。日本の山はどこでもそうであり、修行者がいた。修業で力を得る営みが「修験道」で、その行者は「山伏」「修験者」と呼ばれる。山の神から受けた「験力」を用い、病氣直しや占いなどで生計を立てた。時代劇によく登場するのは日本中どこにでもいたからで、〈うぶすな〉の「心の運搬人」のようなものだった。しばしば「梓巫<sup>あずさみこ</sup>」などと呼ばれる女を伴っていた。

柳田國男は次のとおり書いている。

巫女が山伏を夫に持つこと、代々の修験者の細君が代々の口寄業者であることは、極めて普通の現象であつた。彼等は夫婦仲よく國々の社に於て神主と物忌とのすることを、中山流の法華寺に於て上人と因童とのする事を企てたのだ。(『巫女考』『定本』第九卷 p.245)

「口寄せ」とは人の口を通じて霊に語らせることで、梓巫がこれを行なった。「中山流の法華寺に於て上人と因童とのする事」とは、日蓮宗の寺での「憑<sup>よりぎと</sup>祈祷」を指している。「憑<sup>よりぎと</sup>祈祷」とは、霊を人の体に寄り憑かせて会話し、祈祷などして、病まいを治したり運気を高める作法である。日蓮宗では、霊を呼び寄せて子どもに憑かせ、僧侶が会話したり禳<sup>ほう</sup>ったりしていた。

日蓮宗は修験道ではないが、共通点が多かったのである。山伏たちが山の神と交わった作法は、かつてなら〈うぶすな〉で当たり前に広まっていた。ところが、明治政府は明治五年(西暦1872年)に修験道廃止令を出し、「淫祠邪教」として弾圧に向かった。明治政府の通達書に、次のとおりある。

「梓巫市子並憑<sup>よりぎと</sup>祈祷狐下ケ杯ト相唱玉占口寄せ等之所業ヲ以テ人民ヲ眩惑セシメ候儀自今一切被禁止候条於各地方官此旨相心得管内取締方嚴重可相立候事」(明治六年教部省布達第二号)

さすがに明治初年だけあって、役人の文書がまだ江戸時代の文体だが、だいたいこんなことを言っている。

梓巫<sup>いちこ</sup>、市子、憑<sup>よりぎと</sup>祈祷、狐下ケなどを名乗って玉占<sup>たまうら</sup>、口寄せなどを行ない人びとを惑わすことは、今後いっさい禁止とする。地方長官はこのことをよく心得て、管轄の地域を嚴重に取り締まれ。

「市子」は梓巫に同じで、口寄せを行なった。「狐下ケ」は、「狐落とし」などとも呼ばれる。人に取り憑いた「キツネ」の霊が悪さをするので、お祓いし、出ていってもらふのだ。祀ればお稲荷さんとなる「キツネ」だから、これも神

の一種である。けっして「悪魔」「悪霊」などではない。そうした者たちが、意識を超えたところから働き掛けてくる。それらとまた、必ずしも意識的ではない方法で付き合うのである。

禁止令がかえって、こうした出来事はたくさんあったと、教えている。〈心の囲い込み〉も〈意識革命〉も、〈うぶすな〉では成り立っていなかった証拠の一つである。修行者たちは、山の神との交わりをはじめ、様ざまなやり方で、人間の脳の外にも心を見出し、意識によらない仕方で付き合った。そういう人びとが〈うぶすな〉の心と体に、救いとうるおいと味わいとを、もたらしていたのである。

千葉県の中山には日蓮宗寺院の遠壽院があり、行僧が荒行によって験力を込めた護符を、いまも授けている。験力には、意識を外れた心の働きが含まれる。ここも明治には禁止を受けたが住職は納得せず、千葉県令のもとに出頭して、県令ほか役人立ち会いのもと、毒薬を飲んでみせた。それでも直後に護符を飲むと、心身にまったく異状を来たさなかつた。この「人体実験」により、祈祷と護符を規制しないとの公許が得られたという。

残念ながらこれは例外で、多くの祈祷者や巫女、全国に数十万人はいたと思われる山伏たちが、潮の引くごとくに姿を消してしまった。修験道の団体は解散し、山伏は天台宗か真言宗に所属せよとの命令だった。明治政府は、表向きには修験道を全面禁止せず、「仏教」としての活動なら許したことになる。しかしこれは、山の神と直かに付き合う修験道の肝を外す動きだった。そこで大多数の山伏たちが里に帰る道を選んだのである。

その分だけ、ふつうの人にも暮らしにくい世の中となった。修験道の弾圧と呼応する動きに、精神病患者への差別と閉じ込めがある。かつてなら「キツネ」など、本人でない何者かのせい、一時的に狂っている人びとだった。とこ

ろが〈心の囲い込み〉は、本人の脳に原因を求め、本人を直そうと考えはじめたのである。治療法がはっきりしないから直せないが、それでも「患者」を手放さないでいると、やがてよい解決法が思い浮かんだ——医療が治せないのではなく、患者が治らないのだ。ひどい場合には「廃人」と見なす。なにしろ〈意識革命〉時代の「心の専門家」は、完全な「明証」を以て意識を把握しているのだ。近ごろの薬漬けや長期入院の増加につながる重大な問題が、このときに始まったのである。

もちろん山伏のかつて行ったことが、すべて正しいのではない。効かない薬を売り付けたり、脅して高額な祈祷料を巻き上げるインチキの輩もいたらしい。まさに「山師」なのだ。けれども〈心の囲い込み〉や〈意識革命〉の思想は、ベテナーの山伏以上にインチキである。治験のデータを偽造して、副作用たっぷりの新薬を売り付け、億単位の儲けをあげる薬剤企業さえある。効かない向精神薬を、何種類も何十年も処方し続ける精神科医がいる。これに比べれば、山伏のインチキなど、可愛いものではないか。

山伏の験力は、科学で説明できない。しかし、科学が万能でない以上、そのことをもって山伏をすべてインチキと決めつけるわけには行かないのである。

## あの世との付き合い

脳の働きに縛られない心の有り様は、ふだん脳を頼りに生きざるを得ない私たちには、なかなかかみにくい。せめてものところ、夢や瞑想がそこに近付く道だろう。しかし、脳を頼って暮らしていても、脳の外に広がる心の、あの世にまで連なる〈お互い様〉が感じ取れる場合はある。

私の若いころ、こんなことがあった。関東で生まれ育ったが、さる事情で京都に移り、安ア

パートの二階に住んだときのことだ。車がやっとすれ違えるほどの路地を挟んだ向かいは、ごくふつうの民家だった。庭はなく、玄関が路地に面している。ある日、その家で葬式の出た様子を窓から見ていた。おじいさんが亡くなっらしい。霊柩車を見送る先頭は、白髪のお婆さんだった。

警笛を一声鳴らし、車が動きだした。このときお婆さんは、手に持つ何かを落とした。見ると茶わんで、玄関口のコンクリートに当たると、真っ二つに割れた。欠けるのでも砕けるのでもなく、真ん中からきれいに、真っ二つに割れたのだ。はじめて見る光景なのに、説明は要らなかった。お婆さんの決別の業だったろうが、茶わんが持ち主の後を追ったのもまた、しかと伝わってきた。茶わんはこの時、割れるべくして〈おのづから〉割れた——それが心の情景だった。

この世とあの世では、ものごとのあり方が裏返しになる。壊れた茶わんこそ、あの世で使える茶わんなのだ。こうした考えは、世界のあちこちにある。例えば、シベリアのツングースでは、鍋などを壊して墓に供える。死んだ人がシャマンなら、使っていた太鼓の皮を破って供える。沖縄では、儀式用のお金を燃やして亡くなった人に届ける。この世の形を失うと、あの世の人が使うにふさわしくなるのだ。

茶わんは、物質でできた道具に過ぎないから、好きなように使い捨てればよい——西洋人はそう考える。しかし「やまごころ」では〈お蔭様〉を思い、道具を大切に使う。すると道具も、人になじみよく働いてくれる。これが〈お互い様〉である。そうした付き合いが、この世に留まらず、あの世にも及んでいる。あの世は、産まれてきたところ、死んでから行くところである。そこに住む祖先たちとも、〈お互い様〉で心を通わせ、私たちは生きている。

ふだんの何気ない暮らしにも、定かでない何

者かから「報らせ」が入るのは珍しくない。精神科医に話せば「幻聴」とされそうな「声」を聴く人は、じつは意外に多いのである。その「声」が度び重なり、不快だったり恐ろしかったりすると、本人が不調を訴え周りも「病気」かと考える。しかし、心地よかったり大事なことを教えてくれる「声」もあり、そうした場合なら苦にならないから、本人も周りも直そうとは思わない。場合によっては亡くなった誰かなどが特定できる。夢枕に現われる場合もあるし、偶さかの出来事からふとした拍子に、「報らせ」の読み取れることもある。死に臨む人にはしばしば「お迎え」が来るという。

こうした出来事をただ脳内の神経現象としたり、個人内部の意識の変容に過ぎないと見ては、心が貧しくなる。「プレ」の迷信として乗り越えるのが「進歩」ではあるまい。現に〈おのづから〉働いている〈お蔭様〉と〈お互い様〉の営みなだから、これを今の世の中でどう活かすかが、私たちの「トランスパーソナル」を形作るであろう。

### 動物も道具も〈お蔭様〉で〈お互い様〉

私たち日本人の〈うぶすな〉では、山川草木、鳥獣虫魚、森羅万象に心がある。心を語るのに、特段に霊妙な物質などでうち上げなくともよい。脳にかぎらずふつうの物質、ありふれたものごとがこの世の心を備え、あの世にさえ通ずる魂を持つのである。人間が作って、人間が使う道具にでも、命と心が備わる。「創造者」を絶対の上位に置き、作られた立場を「存在のハシゴ」で見下し支配するハイデガラの立場とは、すっかり違う。

室町時代の『化物草子』<sup>ばけものぞうし</sup>という絵巻物に、こんな話が出ている。

一人暮らしの女が、<sup>かかし</sup>茶山子でもいいから男が来て欲しいとつぶやく。するとある日、

男が通いはじめた。怪しんで後をつける  
と、ほんとうに案山子だった。

精神分析などの心理学に言わせれば、性的欲  
求を溜めた女が幻覚と妄想を抱いたことになる  
う。もちろん、女も寂しかったには違いない  
が、私たちの〈うぶすな〉では、色事は罪でも  
穢れでもないのだ。優しい案山子が女の求めに  
応えて訪れた——それだけで不都合はない。

ほんとうは「化け物」など呼んではいけない。  
三輪山をはじめ、多くの神がみも、こうし  
て人間の女の許に通っていたのだ。当時の人  
も、そのまま事実としては信じなかったろう。  
しかし、もしかするとあり得ることだったに違  
いない。電気の無い時代、夜の闇は深かった。  
話を味わえるのは、じっさいの暮らしが、話の  
心を宿していたからである。〈うぶすな〉の心  
ざまが、たしかにここに現われている。

使わなくなった道具は、放っておくと化けて  
出る。多くの場合、使わなくなれば火にくべて  
焼いた。人間の葬式と同じなのである。死んだ  
者は、正しく弔いを受けないとあの世に渡れな  
いから、幽霊となって祟るけれど。同じことが  
道具でも起こる。

民俗学者の小島環禮氏によれば、口承の昔話  
にもこの類いは多い。蓑、傘、太鼓、草履、木  
箱、ザル、背負子、五徳、刀剣、槍、皿、薪、  
灰、櫛、茶わん、臼など、ありとあらゆるもの  
が化ける。縁の下に隠された金銀、財宝が化け  
て所在を知らせ、肝の太い人物が正体を見破っ  
て、長者になる話もある（以下の民俗事象は、  
国際宗教史宗教学会議 東京／IAHR 2005 での  
“Soul of Materia and Healing of Psyche in Japanese  
Belief and Customs”における小島氏の報告に基  
づく）。

日本の百姓はカゴから道具を取り出すとき、  
背負ったままではしなかった。まずカゴを降ろ  
し、正面で向き合い、それから道具を取り出し

たのだ。これに比べ、中部ヨーロッパからイギ  
リスにかけてなら、道具は背負ったままのカゴ  
や袋から、体をひねって手を伸ばすか、腰を曲  
げて地面に落とす。便利を取りたいなら、西洋  
式がよほど正しい。カゴや袋の中身が何でも、  
やり方は同じとなる。すでに西暦紀元前十世紀  
には、オーストリアの岩塩鉱山で、運んだ岩塩  
を背中から落とせる道具を工夫していたのであ  
る。背負うのがブドウでも同じで、カゴから肩  
越しに桶に落とし、ブドウ酒を醸造したのだ。

日本人でも、やろうと思えばできたに決まっ  
ているから、あえてしなかったのだ。人間の側  
の便利にだけ合わせるのではなく、世話になる道  
具に敬意を表し、きちんと向き合って扱う。ま  
た、仕事が終われば、道具も休ませねばならな  
い。手入れと収めの作法がこのために決まっ  
ている。それをしないと、使い手も身が休まら  
ないのだ。この「不合理」が「化け物」につな  
がるのは、見やすいところだろう。

日本の〈うぶすな〉ではこのように、道具と  
使い手とのあいだで、〈お互い様〉が成り立っ  
ていた。ちなみに道具のなかでも、臼は特別の  
重みを持っていた。餅はハレの食べ物で、これ  
をつく臼を、産湯にも用いた。こうした〈お蔭  
様〉は重いので、使えなくなった臼を細かく  
割ってから燃やす作法があった。中部、四国、  
九州の一部では、割った臼を近所に配り燃やし  
てもらったし、神奈川県の一部では家の主じが  
死ぬと、臼を道祖神などの神に捧げたという。  
これを「迷信」と笑っては、心が貧しくなるだ  
けである。

「花咲か爺さん」の話では、となりの爺さん  
が臼を壊して燃やしてしまった。ポチの死骸か  
ら生えた木で作った、大切な臼である。しかし  
小島氏の解釈では、見かけほど乱暴な行為でな  
かったことになる。となりの爺さんは、欲張り  
ではあったが、臼を使い終える作法に抜かりが  
なかったことになる。きちんと弔ったからこ

そ、白の灰がその後、この世ならぬ働きを持ち得たのだろう。いまもある道具の供養は、これらを受け継ぐ慣らわしなのだ。私が京都で見た真っ二つの茶わんも、この流れに浮かんでいたに違いない。

道具ですらこれだから、動物ならなおさらである。明治の初年、日本の馬は欧米人たちに、「癖が悪い」ので有名だったという。言うことを聞かないばかりか、咬みつく。馬どうしても、咬んだり蹴ったりで喧嘩し合う。理由の一つは、牡馬を去勢しなかったからだが、馬に〈お蔭様〉を強く感じ、人間以上に大切にしていた徴である。

日本の田舎を旅したイザベラ・バードは、次のように書いている。「人びとは馬を大変こわがっていて、うやうやしく扱う。馬は打たれたり蹴られたりしないし、なだめるような声で話しかけられる。概して馬のほうが主人よりよい暮らしをしている」（渡辺京二『逝きし世の面影』より）。動物を、人間に役立てることしか考えないキリスト教の慣らわしからは、不合理的きわまりない。だが、日本では馬を、有り難い手助けの仲間と考える。だから〈お互い様〉で、人のいやがることは馬にもしない。

バードははじめ、馬の「癖が悪い」のは、調教でのいじめ過ぎからと思い込んでいた。「存在のハシゴ」に慣れた人には、動物とはまず痛い目にあわせ、思い通りに操るものである。馬にハミをつけさせようとして、日本人に「どんな馬だって、食べるときと噛みつくときしか口は開けませんよ」とたしなめられ、ようやく「癖が悪い」のはむしろ大切にされているからと気付いた。それでも西洋人には、甘やかされて増長した馬でしかなかったのである。

この〈うぶすな〉の心は、まだ死んでいない。先ごろ亡くなった工業デザイナー柴久庵憲司えくあんけんじさんは、敗戦直後の広島で道具たちの声を聞いた。焼き尽くされ、破壊され、ねじ

曲げられたモノたちが、「元に戻してください」と助けを求めていたという。このとき「モノを作るとは、モノの心を生むこと」と直覚したという。それを足がかりに、モノの心を活かすデザイン思想で、卓上しょうゆ瓶、鉄道車両やロゴなどを作り、第一人者となったという（広島の夕景＝玉木研二 毎日新聞 平成二十七年二月十日）。今の若い技術者にも、こうした気持ちで優れた仕事を進める人がまだいるに違いない。

賀茂真淵にいまなびは『新学』で、「世の中の生きるものを人のみ貴しとおもふは愚かなことなり、天地父母の目よりは人も獣も鳥も虫も同じことなるべし」と説いた。人は人間の両親から産まれるが、そもそも人間はどこから来るかと考えれば、人間の父母は天地なのだ。天地の間の者たちはみなハラカラとする。〈うぶすな〉の「やまごころ」の〈お互い様〉が、ここに極まる。

道具や動物に人なみの尊さを認めるのは、面倒といえは面倒だろう。しかしそこに、森羅万象とともに生きる幸せもある。それが世の中全体の気分、心構えのゆとり、豊かさにも連なってゆく。

## 「ことだま」は「事霊」

山川草木、森羅万象には心、あるいは魂が満ちている。これを言う古い言葉が「ことだま」である。「ことだま」は「言霊」と書くことが多い。このためしばしば、言葉の持つ霊力と受け取られてきた。「火事」と言うとはんとうに火事が起こる、などだ。折口信夫など、著名な学者もこの解釈を採ってきた。しかし、通説を簡単に信じてはいけない。

「言霊」は、宛て字に過ぎない。言葉とは「こと+ハ」すなわち「事の端」はで、事の小さな一部という意味である。「ことだま」は「コト+タマ」であって、「言葉+タマ」ではない。



だから漢字で書くなら、「事霊」か「事魂」がふさわしいのである。

「ことだま」とはもともと、「コト」に備わった「タマ」だった。事そのものが魂を持ち、訴えかけてくるのだ。事はあれこれ理由をつけては起こらない。意識の計らいを超えたところから、〈おのづから〉起こる。事が「出で来る」と言ってもよい——「出来事」なのである。出来事が起これば喜んだり、驚いたり、恐れたりする。「大地震が起こった」と聞けば、ハッと息を飲む。が、このときは大地震という事に驚くのであって、言葉の力に動かされるのではない。

事霊<sup>ことだま</sup>を備えるのは、大事件ばかりではない。日々の暮らしに〈おのづから〉起こる小さな、当たり前前に思える出来事にも、みなそれぞれの魂がある。「いい天気だな」「あ、こんにちわ」「お腹が空いたな」などなど、私たちは日々、小さな驚きを重ねながら暮らしている。意識によるばかりでないし、科学的な説明に頼るでもない。頼ろうにも、ほとんどの出来事の詳細は科学の枠外にある。木の葉一枚が落ちる軌跡さえ、じつは計算不能なのだ。私たちは〈おのづから〉生かされているわけで、それこそが事霊の働きなのである。

私たちの〈うぶすな〉には、脳ばかり大事にする〈心の囲い込み〉とは、まったく別の心の世界が開けている。その世界は、〈意識革命〉の合理主義、人間中心の支配とはまったく別の仕組みで動いているのである。これに気付いたのは、いまは故人となった田無神社の宮司・賀陽濟氏の言葉からだった。賀陽さんは、幕末に田無神社を預かった岡山藩の侍医の子孫で、精神分析に精通する精神科医でもあり、東西の知識と実践に通じた人物だった。

その彼が言った——毎朝勤める太鼓の音には「ことだま」がある。巫女の舞いにも「ことだま」がある。——それまでは私も、「ことだ

ま」とは「言霊」と思い込んでいたのだった。太鼓の音にも巫女の舞いにも言葉はないので、はじめは首をひねった。ややあって、ようやくハッと「事霊」に気付いたのである。言葉にまったく力が無いと言うつもりはない。この気付きには、たしかに言葉が働いていた。言葉も「こと」のうちだから、力を持つのである。しかしこのときはそれより、賀陽宮司の神主兼医師としての行ないの、「事」の力が勝ったのは間違いないところである。

### 万葉集の「事霊」<sup>ことだま</sup>

そこで調べてみると、万葉集にも柿本人麻呂の次の例などが「事霊」と記している。

事霊 八十衢 夕占問 占正謂 妹相依  
(卷十一 二五〇六)

ことだまの やそのちまたに ゆふけとひ  
うらまさにいへ (ふ) いもあひよらむと

「事霊」と書いてあるのだが、注釈書などでは「言霊」と書き改めるものが多い。さて、原文の文字は、ただの書き間違いだろうか？——そうではあるまい。歌の心から考えてみたい。

人麻呂は、「夕占<sup>ゆうげ</sup>」に問うたという。万葉集には、他にも「夕占」を詠んだ歌がある。たそがれの「逢う魔が時」に、占いを立てる慣らわしがあったらしい。どのような作法かは伝わらず、「片袖を置く」ことだけが知られている。「占正謂」は、「うらまさにいふ」と訓むなら、「占いがしっかり言ってくれた」との喜び、「まさにいへ」なら「言ってくれ」との願いとなる。「妹相依」は、「あの娘が想いを受け容れなびいてくる」である。

さてこれに、「事霊<sup>ことだま</sup> 八十衢<sup>やそのちまたに</sup>」が、かぶさっている。「数えきれないくらいたくさん事霊が行き交うところで」と言っているのだ。歌の

大意は——「ことだま」が数えきれないほど行き交う「衢」<sup>ちまた</sup>で、夕べの占いをしよう。さあ、言ってくれ、あの娘は迎えてくれると——くらいになろう。

他の歌でも「夕占」は、「衢」<sup>ちまた</sup>(街)に結び付くことが多い。「衢」は分かれ道、交差点で、「辻」とも言う。こうした所には様ざまな靈魂が集まり、出会うとされているが、人麻呂は夕暮れに分かれ道まで出向いて占ったのだろうか——そういう説もある。しかしながら、道が八つならまだしも、八十にも分かれるなどあり得ない。「衢」は譬えて、文字通りの分かれ道ではない。そもそも「チマタ」の原意は「千股」なので、具体的な形を意味していない。

では、この歌の「衢」は何を指すのだろうか。賑やかな市場を「衢」に譬えた例もある。市場は、人や物資がたくさん行き交うから「衢」なのだ。出入りする道の数を言ったのではない。今でも「ゴールデン街」などの名前は、分かれ道でなく、人の集い行き交うマチを指している。だから、万葉集はあくまで、「数えきれないくらいたくさんの事靈が行き交うところ」で、までしか記していない。

では、事靈が行き交う「ところ」とは、どこなのだろう。なるほど、じっさいの分かれ道、辻もそうした「ところ」に違いない。辻にはもともと、だれもいなくてさえ、靈魂が行き交うとされる。そこに占い師や巫女がいれば人も集まり、言葉もたくさん飛び交うだろう。それなら「事靈 八十衢」は、「たくさんの言葉の飛び交うところで」と取ってよく、このとき「事靈」は「言靈」に読み替えられる。じっさい、そう説く解説書も多いのである。

しかしこの説は、時代考証に難がある。いくら都とはいへ、古代の辻・街に近ごろの都会の盛り場を思っでは見当外れである。室町時代なら辻占もあつたらしいが、ここは奈良時代なのだから、街灯など無い。大仏殿など、大きな建

物には灯明が上がつたらしいけれど、ほとんどは月か星明かりが頼りで、曇れば闇夜となる。したがって日暮れになれば、人通りは希となるはずなのだ。

夕暮れの道は静かだが、それでも分かれ道には、言葉も音もなく魂が通り過ぎる。だからこそ、占いが成り立ちうるのである。夕暮れの淋しい辻に、もの言わずたたずんでも、例えば、はじめにどちらの道から人が来るかで、占いはできる。行き交う魂が、人の姿を借りて教えてくれるからだ——男か女か、どんな服装か、年寄りか若者か、荷を持つか持たぬか、など。たくさんの「ことだま」が行き交うのに、言葉は必ずしも要らない。夕暮れの「衢」に、数えきれず行き交うのは「事」そのもの、すなわち「事靈」・「事魂」なのである。

さらに、分かれ道まで出向かなくとも、「八十衢」が向こうから訪れることもある。部屋に一人座っていても、恋する人には思いがあれこれ湧くであろう。「あの子はなびいてくれるか」「戸を開けてくれないのではないか」「途中でだれかに見られはすまいか」「先に恋敵が訪れていないか」などなど。これでもう、「八十衢」なのである。「今も昔も同じ恋の悩み」と言えば分かりやすそうだが、誤解を招く。〈心の囲い込み〉の進んだ近ごろでは「個人の内面の悩み」——一人だけの心の内で思いと悩みが渦巻く、と受け取られてしまおう。だが、古代なら、そうではなかった。「思い」は「内面」に閉じていないから、思いが産まれるとは、まさに事靈が押し寄せていることなのだ。

分かれ道を様ざまな「こと」の魂が通り過ぎるように、一人座る男の胸にも、様ざまな事靈が訪れ、通り過ぎる。思いの行き交うところ、どこにでも「事靈」<sup>ことだまの</sup>「八十衢」<sup>やそのちまた</sup>は現われる。このとき、乱れて行き交う事靈をさばき道を見出すために、占いをするのである。

「占部をも八十衢も 占問へど 君を相見む

たどき知らずも」（万葉集三八一二）という例がある。ここでは「八十衢」を、「占部」と並べて用いている。「占部」に占わせても「八十衢」で占っても、あなたに会う術は知れない、と取れる。もしかすると、「八十衢」という名前の占いの作法があったのかもしれない。名前とすれば「あれこれ行き違う事霊をさばき、道筋をつける占い」の意味となろう。

もしそうなら「事霊 八十衢 夕占問」は、「事霊を知る八十衢の占法で、夕べの占いをした」となる。この場合でも、言葉の霊力を用いたとは考えにくい。「八十衢」の占い作法が「事」の魂をさばき、答えを教えてくれるのだ。

古代の世界の事霊は〈心の囲い込み〉を受けず、世の中に行き交っていた。また意識の支配など受けず、〈おのづから〉動いていたのである。取り戻したい〈うぶすな〉の「やまとごころ」が、ここにある。今でもほんとうは事霊が、私たちの周りに行き交う。黒船の弾丸の毒が効いて、気付けなくなっているだけなのだ。

### 事霊の裏の動き＝うらない＝占い

「ことだま」とは、「事霊」なのである。古代の話でない。今でも〈心の囲い込み〉を捨て、〈意識革命〉の偏見を取り去れば、すぐにでも、事霊の〈お互い様〉で行き交う有り様を感じ取られる。いま、この生き様の〈おのづから〉の支えこそが、事霊なのだ。

占いは、今も大はやりである。ただ、近ごろは、未来や遠くの出来事を当てるだけとの受け止めが多い。言い換えれば、「ただ観測するだけ」と見なされている。自分がどう受けとろうと「内面」のことだから、相手には係わりが無いとする。

古代ではしかし、そうではなかった。〈心の囲い込み〉が成り立たないから、占いは「事霊」の「事」に、つまり相手方の事霊に直かに係わってこそ成り立った。〈意識革命〉に拠ら

ない係わりは、意識の知らぬ隠れた経路をも含んでいるのだ。これも柿本人麻呂の歌に、次のものがある。

百積 船潜納 八占刺 母雖問 其名不謂  
百積の船潜り入る 八占さし母は問ふとも  
その名は謂はじ

（万葉集卷十一 二四〇七）

「百積の船」とは、大きな船である。「百積」の意味には諸説あるが、とにかく大船に違いない。この船に男を譬え、浦つまり入り江には娘の身と占いとを重ねているのが、この歌である。「うら」の音は「占い」に連なり、船を入れる姿がわが身となる。大船をすっぽり隠すほどの入江は、深く陸に入り込み、水深も深い。

「大きなたくましい男が、いく度もこっそり通ってくる。大船を隠す深い浦に竿[sao]を差しても、底には届きません。だから、お母さんがいくら占いを差し込んで探しても、あの人の名は言わない。それほどに想いは深いよ。あの人の大きな体も太い竿も柱も、私は深く呑み込んでいるんだから。」

人麻呂は、娘の身になりこう歌ったのだった。男は大きいのがよいらしい。古代では、力の強さが暮らしに欠かせないから、今より評価が高く当たり前だ。ところが娘の懐は、男の大きさより深い。だから、けっして男尊女卑ではないのである。もちろん猥褻でも淫行でも、まして「ポルノ」でもない。これら偏見の言葉は、キリスト教の「物質の心」への蔑みから出たもので、私たちの〈うぶすな〉にはふさわしくない。

古代の占いが、遠くからの一方的な「観測」でないことも分かる。「言わない」と拒むのは、占いが娘の心に探りを入れるからである。恋の想いも、事霊のひとつに間違いない。〈心の囲い込み〉の成り立たない世界では、占いはその

事霊を直かに探りに行く。努めれば、隠せるかもしれない。が、力およばず、心の底を探り当てられるかも知れない。だから「言いません」と頑張っているのである。「不謂」は「占いに出来ない」とも読めるが、大意に変わりはない。占いは、相手とつながる手だての一つなのである。

それなら、先に引いた歌の「事霊 <sup>ことだまの やそのちまたに</sup> 八十衢 <sup>ゆふけとふ</sup> 夕占問」も、別の見方ができる。運勢を読み取るだけでなく、様ざまに乱れ行く事霊に、占いで道筋をつけようとしたのではないか。「占正謂 <sup>うらまさにいへ</sup>」と、事霊に命じたのかもしれない。もし「妹相依 <sup>いもあひよらむ</sup>」と夕占が告げれば、占いの力が思いを受け容れさせたのである。事霊が、つまり事そのものが伝わって、妹との相思相愛がまさにその時、開けたことになる。

さきほど「ただ観測するだけ」と書いた。だが、ほんとうは科学の観測も、「見るだけ」ではすまない。こちらの知識のみの変化ではないのだ。物理学でさえ、観測により素粒子の有りが決まる。発掘し調査すれば遺跡は壊れ、病理解剖が遺体を傷つける——考えてみれば当たり前で、心も、囲い込まなければこれと同じである。悲しみは、共にするだけで癒されるのではないか。「客観的な観測」とは十九世紀の、もはや古くなった考え方に過ぎない。

「うらない」とは、裏で行なうことなのだ。表からは見えない事霊が、裏で行き違い、からみ合う。それをほぐし、道行きを見出し、また繩を <sup>な</sup> 縛うように整える。意識では取り仕切れないので、隠れて働く事霊の〈おのづから〉に、上手に任せる。「うら」から行ない、通い会うこと——それが「うらない」なのだ。

夕占を行なった場合は、衢ばかりでない。万葉集によれば、「岐」や「門」でも行なっている。「岐」とは川、峠、森の入り口、坂や道の始まりなど、分かれ目、境目となる場である。門と同じく、出入りするところで、二つの縄張

りを分ける場とも言える。「岐」には塞の神（道祖神）がいて、外から好ましからぬ事霊の入り込むのを防いでいる。

なるほど、これらは占いにふさわしい場である。だが「八十衢」は、分かれ道そのものと限らないのだった。岐・衢・門も同じことで、地理上の場所ではなくてよい。事霊の分かれ目、境目の現われるところならどこでも、岐・衢・門となり得るのだ。ただし、場所に向向く意味を軽んずるわけではない。各おの土地には心があり、折節の出会いに事霊が動くのである。身を運んでの占いには、またそれなりの重みがある。

占いを、怪しげな「迷信」と考えてはいけない。特殊な能力や仕かけの要る、特別な業でもない。〈心の囲い込み〉と意識へのこだわりを捨て、事霊に直かに係われれば、だれでも要領は〈おのづから〉に呑み込める。私たちの祖先が〈うぶすな〉の暮らしのうちで、ずっと当たり前に行なってきたことなのである。

## 自己責任よりも前世の因縁か、憑き物

宗教の教義や戒律が無くとも、私たちが神仏、靈魂を祀り続けるのは、なぜだろうか。昔から続いているというだけなら惰性で、長続きはするまい。形を作ると気持ちが落ち着くのも、小さな満足に過ぎない。一銭にもならず、それどころか手間と金のかかることを、何百年、何千年と、惰性と思ひ込みで続けられるはずがない。〈うぶすな〉に抱かれた私たちは、行事、儀礼を通し、確 <sup>しか</sup> と靈魂に係わってきた。すなわち、そうした係わりの事霊 <sup>ことだま</sup> があるのだ。意識してもしなくても、その実感が私たちを支え、〈おのづから〉導いたからこそ続けられたに違いない。

さてしかし〈うぶすな〉にも、よい事ばかりはない。困ったことも起これば、困った人もいる。それは「悪い人間」が自からの意志で悪事

を企んだのだろうか？——いや、そうではない。悪い心が起こるのは、悪い虫が付いたからで、虫の居所が悪いと気に入らないことが増える。「虫」は靈魂を、軽く言ったものである。もうちょっと重いと「憑き物」になる。

「やまとことば」の「モノ」とは、もともと物体を指すのではない。正体はわからないながら、心の重みとなる何かのことである。「ものすごい」とか「ものさびしい」また「ものぐるおしい」などと使う。「化けモノ」もそうで、なぜ出るかと問えば、前世の因縁が呼び寄せるのかもしれない——私たちの祖先はそんなふうと考えてきた。これらが「迷信」と思われるのは、〈心の囲い込み〉を信ずるからである。あるいは〈一つ掲げ〉に騙され、心のあるべき唯一の尊い場所を探して、脳に至ったからだ。脳以外に心が無いとするから、靈魂との出会いもあり得ないことになる。

「精神障害」とか「心の病まい」と呼ばれる出来事も、かつては「虫」や「モノ」のせいだった。〈心の囲い込み〉に従う近代の心理学や精神医学から見ると、外から靈魂が取り憑くなどあり得ない。そこで患った当人の問題、個人としての「である」を問う「自己責任」となるのだ。だから面倒になると「不治の病」と診断を下し、病院にとじ込めるし、そうでなくともむりやりに薬を飲ませる。

ところがこの薬は、症状を抑えるだけで、病氣そのものを治す力がないのである。向精神薬には副作用があり、習慣性もあるので、薬の種類も量も増えて「薬漬け」に至る。なんとDVやイジメなどの被害者にさえ、薬を飲ませようとする。身内に不幸があつて嘆くだけで、「鬱病」と診断されかねない。〈心の囲い込み〉により、心の問題は当人の内部＝脳神経にあるとしか考えられないから、こうした事態に至るのだ。

人の「本質」を問うのではなく、「人という場」

に立って考えるのがよい。すると、だれかの責任を追及せず、何かの「せい」にしてよいのが分かる。「虫」や「モノ」のせい、因縁のせいなのだ。学校に行けない子どもは怠けているのではないし、精神障害でもない。そういう「虫」の居所なのだ——いや、やはり怠けかもしれない。ただし「怠け」とは「鈍気」なので、ダラダラする「気」がかかっているのだ。本人が「怠け者」であるのではない。

「虫」は取めたり追い出したりできる。「憑き物」も祓ったり、教え諭す道がある。前世の因縁も、解ける見込みがある。だれでもその「存在」が罪人とか、困った人とか「である」のではない。責任を追及するのではなく、罪や穢れを祓い、流す考え方がよい。はじめから個人の責任など無い——少なくとも、事柄を産み出すのに十分な「主体的」意志や、決定する明確な意識など無いと受け止めれば、楽になる。日本の〈うぶすな〉に沿い、〈お蔭様〉を忘れず、〈お互い様〉で支えあうほうが、私たちには似合う。

責任逃れではなく、人を憎む謂われがないのだ。むしろ、はじめから「無責任」でよい。そのほうが〈おのづから〉楽に生きられる——近ごろは努力、頑張りばかりだが、「楽」は大事なことだ。仏教では「極楽」を、石田梅岩らの心学では「安楽」を目指したのだった。

脳への〈心の囲い込み〉は、いまだ証明のできない仮説に過ぎない。脳科学はいくら流行ったところで、土台がない、蜃気楼のような説なのだ。それなのに、科学の権威者たちがお墨付きを与え、憑き物を落とすかのように臓器を取り去り、また他の人に入れる。「憑き物落とし」がもし迷信でも、同程度の迷信が科学の名でまかり通っていることは、心しておかねばならない。

## 安藤昌益に見る〈うぶすな〉の思想

文部科学省は、大学から人文学を追い出したらしい。困ったことだ。が、学者にも落ち度はある。日本の学者たちは西洋思想の受け入れに忙しく、自分で考えない。したがって、人間中心主義をしっかりと批判できず、天地万物との〈お蔭様〉や〈お互い様〉を論じられないのである。

「哲学者」と呼ばれる人びとは「西洋哲学の紹介者」に過ぎないから、批判的な検討を許さず、どの尻馬に乗るかだけを競うことになる。いまだにカントやハイデガなどを担ぎ回し、驚いたことに「ハイデガと道元は同じ立場だ」などと、仏教に無理やりこじつける人さえいる。心理学者、社会学者もアメリカ直輸入しか考えず、効率と利害に結びつけられれば説明できたと心得る。さもなくば、誤訳だらけの意味不明な文章を「現代思想」と称する。役人につけ込まれる隙があるわけで、わがトランスパーソナルもその轍を踏まぬよう気をつけたいものである。

わが〈うぶすな〉に腰を据え、考え続けるなら、お手本はいくらもある。例えば、江戸時代中期の思想家・安藤昌益は、武家政治を批判し平等主義を説いて有名である。彼の思想の要めは「互性」すなわち〈お互い様〉で、違うものどうしの共働きにより宇宙はめぐると考える。互いに支え合うので、「お互いの〈お蔭様〉」とも言ってよい。

これ転定にして一体、日月にして一神、男女にして一人……転を去れば定も無し、定を去れば転も無し、月を去れば日も無し、男を去れば女も無し。一切、二儀と見ゆるは、皆この如し。ゆえに自然なり。(刊本『自然真営道』)

「転定」とは「天地」のことで、昌益の作った宛て字である。天は転じ、地は定まる質<sup>たち</sup>を帯び、この二つが〈お互い様〉で係わり合う。転じと定まりとの働きが二つ、互いに出会って、万物を容れる天地が成り立つのである。同じように日月、男女も、二つかと思われるが、相手方あってこそだから、ほんとうは一つなのだ。昌益は、そうした有り様を「自然」と呼び、仮名を振って「ヒトリスル」と訓ませている。

「男女」と書いては「ヒト」と仮名を振る。独立した人格の男女が「自立」しつつ協調するのではない。男は、女がいるから男なのだ。男の本性は、女の許にこそ現われる。もちろん、逆もまた然り。男も女も、互いのお蔭で成り立つのだから、二つに分けられず、一組で「ヒト」となる。女とは男の働きのこと、男とは女の働きに他ならない。広げて言えば、「あるものとは他の何かの本性の現われに他ならない」となる。

昌益はまた、「互性」とともに「一つ」と、くり返し記す。「一つ」でなければいけないというのだ。しかしこの「一つ」は、〈一つ掲げ〉の「一つ」とまったく異なる。「虚無からの創造」とは違って、「二つめ」とけっして比べられないからである。したがって、上下の序列が付かない。

一に住せず、二を出ださざる活真、自感、互性の妙道を知らず、一貫を論ずる者は偏惑・妄失なり。(稿本『自然真営道』)

真の「一」はあくまで「一」だから、そこに留まらねばならない。「二」を出さない「一」なのである。一貫性を大切と説く人は多いが、ほんとうに「一」に留まっているか、と昌益は問うている。「互性」による万物の妙なる道を知らなければ、「二」が出てしまう。それでは「一」を踏み破ることとなり、まことの一貫で

なくなる。

したがって昌益に言わせれば、「統一的な基準」による順位・序列付け、つまり「存在のハシゴ」の思想こそ「偏惑・妄失」の極みとなる。「統一」とは言うものの「二を出ださざる」でなく、二以下が際限なく続くのが序列である。順位が増えるほどに、真の「一」は壊されて行く。「活真」「自感」も昌益独自の用語だが、込み入ってくるので、ここでは説明を省こう。

〈お互い様〉の「一つ」に徹すればこそ、「二つ無しの一つ」となる。〈一つ掲げ〉の掲げられた「一つ」は、必ず「二つ」を出す「偽の一つ」なのだ。ほんとうに「一つ」にまとまるなら、丸く収まる。「選りすぐりの一つ」でなく「丸抱えの一つ」でこそ、違っていても「一つ」になれる。宇宙のすべてが一つで、何かを特別に切り分けないから、勝ち組も負け組もいなくなる。

「互性」とは、ちょっと見に独立と見えるものでも、違う相手によりはじめて成り立つ仕組みのことである。男女、転定、日月などの組み合わせが無数に見あたる。だが、一対一で閉じるのでもなく、三つ以上の絡み合いはもちろんある。昌益は、陰陽五行思想を取り入れ、次のように述べた。

一念の機ざしは乃ち五行の一感なり。……木の発生は始めに似れども、木のみならず、木中に五行をそなひて一連の機ざしなり。（刊本『自然真営道』）

「木火土金水」の五行は、宇宙の様ざまな働きを示す。事の起こるときは、まず「木」が表に立つ。「木」は兆しで、そこから始まるようだが、じつは違うという。「木」の動くときもうすでに五行すべてが感じ、「火土金水」すべてが「木」の内働いているのだ。他の「火土

金水」各おのが表に立つ場合も同じことで、どの面が出るかの違いに過ぎない。この世の全ては互性で通じ合うからこそ、ほんとうの「一つ」になっている。

### 〈うぶすな〉の思想とトランスパーソナル

ケン・ウィルバーは最新の著書『トランプと脱真理の世界（“Trump and a Post-Truth World”）』でトランプ大統領の誕生を受け、選挙結果の意味とアメリカの心のこれからを論じた。副題に「進化の自己修正（an Evolutionary Self-Correction）」と添え、トランプの当選を自からの「統合心理学（Integral Psychology）」に至るための必要な調整と位置づけている。ウィルバーは一方向の進化を信じ、真理であり誰にも止められないと考える。進化の行き着くところが「統合」の段階だと、彼は説く。

オバマ政権に極まるここ二、三十年の動きは、多様性と相対性を金科玉条としてきた。すべてが状況に応じ相対的に決まるとし、何であれ普遍を掲げる者を、すべて抑圧者と見做してきた。これを「緑」の段階と彼は呼ぶ。ところがこの「緑」の人びとは、相対主義を言い張りながら自分たちの立場こそ「絶対の真理」とする自己矛盾に陥り、これより力を失ったというのである。

選挙戦で民主党のクリントン候補は、トランプ氏の支持者たちを「嘆かわしい」人びとと呼んで蔑んだ。トランプ陣営はこれに憤激して反撃を強め、勢いをつけたのだった。ウィルバーはこの流れのうちに、「緑」の自己矛盾を読み取った。「嘆かわしい」との決めつけは相対主義の絶対化に他ならず、「相対性」を誰にでも押し付ける振る舞いとなった。それが見境の無い狂気をはぐくみ、見捨てられたのだという。

「緑」の相対主義者があらゆる真理、価値、序列を否定するとき、虚無主義（ニヒリズム）と自己愛（ナルシズム）がはびこるとウィル

バーは言う。彼はピアジェなどの心理発達理論を、二十世紀の残した「もっとも意義深く、証拠に富んで長持ちする成果」と讃えている。普遍的な真理は、発達段階を踏んでの進化の内に、動きとして現われるというのだ。発達は自己中心性から始まり、自己を相対化できる客観性に目覚め、客観に向き合う自己意識を確立して能動的に動き、やがて世界全体を考え、判断できるようになる。だから無秩序に退行すれば、現われるのは自己愛となる理屈である。

「緑」は世界を視野に入れ、抑圧からの解放と多様性を導き入れようとした。この点で、それまでの発達段階にない真理を備え、最近までは「進化の先端」を担っていたのだが、肝心なことを見失った。進化の諸段階の間には序列があり、高い進化段階は複雑かつ意識的で、より多くの真理と価値を備える——これを否定したため、「緑」は「進化の先端」を外れてしまったという。トランプの大統領就任は「進化の先端」を建て直すための一時的な後退で、歪んで凝り固まった「緑」をほぐす役割があると、ウィルバーは考えている。

進化の諸段階はそれぞれに必要なだが、後に来る段階の方が序列で上になる。ただし、低いものを見下してはならない。クリントン支持者らの「緑」が敗れたのは、自分たちを固まった「真理」と見做し、統合の動きをやめて、違う立場の人たちを切り離して蔑んだからだ、とウィルバーは言う。それは「支配の序列」に他ならず、彼の唱える「統合の序列」とはまったく異なる。トランプやその支持者は、思いやりを以て抱え込んでやるのが正しいやり方なのだ。そうやって統合を進めてこそ、「進化の先端」を再び作り出せるとウィルバーは考えている。

「進化の先端」は、開拓の「フロンティア」を思わせ、いかにも「アメリカ的」である。米大統領選挙を扱った分だけさらにアメリカ的著

作となったが、こうした発想の元を辿れば、必ずしもこの国に特有ではない。「ビッグバン」に始まる系列が単純から複雑へ、無意識の衝動から意識的な理性へと進化するとの思想は、昔の直線的生物分類をなぞっている。現代科学に添いつつも、かつての「存在の大いなる連鎖」すなわち「存在のハシゴ」を受け継ぎ、したがってキリスト教的と言うべきものである。

アメリカのキリスト教保守派には進化論を否定する人が多いけれど、プロイセンのご用学者と言われたヘーゲルの歴史主義がすでに進化論の先駆けであったし、ウィルバーも賛意を示す定向進化説はキリスト教右派から出たものである。「進化の先端」は輝かしい一番であり、聖書に記されアメリカの国是となった「丘の上の街」に重なる。〈一つ掲げ〉の匂いを感じざるを得ないのである。

ウィルバーは「存在のすべての次元・象限を顕わにし、発達のあらゆる水準と筋立てとで育ち切り、啓蒙、気付き、解脱、悟り、満中陰などと呼ばれる意識の有り様を目覚めさせ、感情の伝染病を煽る我われの暗黒面をぬぐい去る」と語る。この勢いには、〈意識革命〉の〈意識植え付け流〉が顔を出している。人間の立場での進化だから人間中心主義であり、〈心の囲い込み〉の原則にも沿っている。

自からの進化の図式を「真理」とするなら、下位の諸段階は劣った乗り越えるべきものとなるから、「進化の先端」は、〈選りすぐりの完全〉を言い立てるあのピカピカの「一つ」に似てくる。なるほどウィルバーは支配と抑圧の排除を語り、思いやりで優しく包むと言い立てる。が、独裁者も常にそんな風に言うのではなからうか。下位は「プレ」に過ぎず、「進化の梯子」の下部の一段として踏まれるなら、私たちの〈うぶすな〉の心も、「過去の遺物」として新たな統合の部品にしかならない。

「遅れた」者にはそれなりの扱いがふさわし



い——これが西欧による植民地支配の、またアメリカでの黒人差別の論理なのであった。ウィルバーは発達下位の諸段階を「赤」「橙」「琥珀」などと色付けし、「緑」に次ぐ「統合」の色は「空色（トルコ石色）」としている。あのカントの惑星人分類に似たところがありそうだ。肌色と見られそうな「白」「黒」「黄」を避けているが、「青い瞳の人」は白人に他ならないではないか。

「単純な自己中心から複雑な統合へ」の進化論は、百年あまり前のハーバート・スペンサーの社会進化論と共通点が多い。複雑さと意識の拡大を上位ないし進化と見るのは、スコラ哲学以来の流れと、十八世紀以降の実証主義、進化主義との結合である。ウィルバーの乗る「進化の先端」は一人輝かしく、〈お互い様〉ではない。積極的・能動的に下位の段階を統合するのだから、〈お蔭様〉でいただくわけでも、〈おのづから〉に任せるわけでもない。

結びの言葉はこうなっている。

かくしてすっかり解放され（夢を終わらせ）、しかも完全に満ち足り（夢を叶え）て、いずれもが一つの同じ瞬間に奇跡のように、今から今へまた今へと果てしなく起こり続ける。

これは国木田独歩を慄かせたあのアウグスティヌスの時間、すなわちキリスト教の神の時間である。元を辿ればプラトーンのアデア、ないしアリストテレスの説く「完全実現態」の、永遠の時間に他ならない。ウィルバーは東洋の思考に刺激を受け、初期の著作で西洋の伝統に異議を唱えようと試みたものの、結局は己れの文明の本流に逆らえなかったのである。

安藤昌益の説では心が宇宙全体に満ち、薄っぺらな意識をこえて〈おのづから〉に、〈お互い様〉で動いている。〈心の囲い込み〉も〈意

識革命〉も見当たらないし、〈選りすぐりの完全〉を目指して二番目以下を下に見ることがないから、〈一つ掲げ〉はあり得ない。五行は科学で用いる元素でなく、天動説のようなので、近ごろの科学に照らせば時代遅れとも感じられよう。しかし、心の有り様を見直すためなら、その点は妨げになるまい。ペリーの弾丸の毒を消し心の「しらがみ」を解くには、こうした〈うぶすな〉の思想が使えるはずである。

#### 参考文献

- Aristoteles / アリストテレス “Ta meta ta physika” 出 隆 訳『形而上学』岩波書店, 1959
- Aristoteles / アリストテレス “Physikes akroaseos (Physica)” The Physics 「自然学」 Philip H. Wicksteed and Francis M. Cornford, William Heinemann, Loeb classical library, 1968
- Augustinus, Aurelius / Augustine, Saint, Bishop of Hippo / アウグスティヌス “Confessiones” 397-8, <http://www.augustinus.it/index.htm>
- 安藤昌益 刊本『自然真営道』『安藤昌益全集』第13巻, 農山漁村文化協会, 1986
- Bergson, Henri / ベルクソン “Matière et Mémoire” Alcan Press, 1968, Universitaire de France org. Paris :1896
- Comte, Isidore A. M. F. / コント “Cours de philosophie positive” 『実証哲学講義』1. Philosophie première (Cours de philosophie positive ; leçons 1 à 45); présentation et notes par Michel Serres, François Dagognet, Allal Sinaceur. 2. Physique sociale (leçons 46 à 60); présentation et notes par Jean-Paul Enthoven. Paris : Hermann, 1975, org. 1830-42
- Freud, Sigmund / フロイト Bemerkungen über einen Fall von Zwangsneurose, org. 1909, “Gesammelte Werke” 7, Fisher Verlag, 1941, pp.381-463, 「強迫神経症の一例に関する考察」(「ネズミ男の症例」) 小此木啓吾訳『フロイト選集』16, 日本教文社, 1969, pp.1-105
- Freud, Sigmund / フロイト Aus der Geschichte einer infantilen Neurose, org. 1918, “Gesammelte Werke” 12, Fisher Verlag, 1947, pp.27-157, 「ある幼児期神経症の病歴より」(「狼男の症例」) 小此木啓吾訳『フロイト選集』16, 日本教文社, 1969, pp.207-367
- Freud, Sigmund / フロイト “Das Ich und das Es” 『自我とエス』 org. 1923 Internationaler psychoanalytischer Verlag, “Gesammelte Werke” 13, Fisher Verlag, 1940, pp.235-289
- Freud, Sigmund / フロイト “Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse” 『続精神分析入門講義』

- org. 1932, “Gesammelte Werke” 15, Fisher Verlag, 1944
- Freud, Sigmund / フロイト (ed. Masson, J. M.) “Sigmund Freud Briefe an Wilhelm Fliess / 1887-1904” Frankfurt, 1986
- Heidegger, Martin / ハイデガ “Sein und Zeit” Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1972, org. 1927
- Helmholtz, Hermann L. F. von / ヘルムホルツ “Über die Erhaltung der Kraft : eine physikalische Abhandlung” Bruxelles : Culture et Civilisation, 1966, Reproduction of 1847 edition, Druck und Verlag von G. Reimer, Berlin, 高林武彦訳「力の保存についての物理学的論述」『世界の名著』65「現代の科学 I」中央公論社, 1973, pp.231-283
- Kant, Immanuel / カント “Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels oder Versuch von der Verfassung und dem mechanischen Ursprunge des ganzen Weltgebäudes, nach Newtonischen Grundsätzen abgehandelt”: Königsberg, 1755, <http://www.mala.bc.ca/~Johnstoi/kant/kant2g.htm>
- Kant, Immanuel / カント “Kritik der reinen Vernunft” 『純粹理性批判』1.Auflage (A), 1781; 2.Auflage (B), 1783
- 国木田独歩『欺かざるの記 事實=感情=思想史 後編〈抄録〉恋愛日記』(大正七年十二月)新潮社, 1918, 国会図書館永続的識別子: info:ndljp/pid/914609
- Lawrence, David Herbert / D. H. ローレンス “Lady Chatterley’s Lover” 伊藤整訳『チャタレイ夫人の恋人』新潮社, 1996
- Lovejoy, Arthur O. / ラヴジョイ “The Great Chain of Being: A Study of the History of an Idea” Harvard University Press, 1936 内藤健二訳『存在の大いなる連鎖』晶文社, 1975
- Mach, Ernst / マッハ “Erkenntnis und Irrtum : Skizzen zur Psychologie der Forschung” org. 1905, Leipzig : Johann Ambrosius Barth 井上章訳「認識と誤謬」『世界の名著』65「現代の科学 I」中央公論社, 1973, pp.379-420
- Myers, Frederic W. H. / マイヤーズ “Human Personality and its Survival of Bodily Death” Abridged ed. Norwich / Pelegrin Trust in association with Pilgrim, 1992
- Oppenheim, Janet / オッペンハイム “The Other World: Spiritualism and Psychical Research in England, 1850-1914” 和田芳久訳『英国心霊主義の抬頭——ヴィクトリア・エドワード朝時代の社会精神史』工作舎, 1992
- Platon/Plato / プラトーン Republica 田中美知太郎他訳『国家』『世界の名著』7「プラトンII」中央公論社, 1969
- 佐野洋子『おぼえているよ おおきな木』講談社, 1992
- Schipperges, Heinrich / シッペルゲス “Der Garten der Gesundheit Medizin im Mittelalter” 大橋博司・浜中淑彦訳『中世の医学——治療と養生の文化史』人文書院, 1988
- Silverstein, Shel / シェル・シルヴァスタイン “The Giving Tree” 『おおきな木』HarperCollins; Re-issue版, 2003
- 谷川健一『常世論——日本人の魂のゆくえ』平凡社選書, 1983
- Tyndall, John / ティンダル “Address Delivered Before the British Association Assembled at Belfast”, with Additions (The Belfast Address) 『ベルファスト講演』London: Longmans, Green, and Co. 1874 / Victorian Overview Science and Technology (The Victorian Web)
- Thomas, Aquinas / トーマース・アクィナー “Sancti Thomae de Aquinatis SUMMA THEOLOGIAE” 高田三郎・稲垣良典・山田晶ほか訳『神学大全』創文社, 1960~
- Wilber, Ken / ケン・ウィルバー “The Spectrum of Consciousness” Theosophical Publishing House, 1977 吉福伸逸・菅靖彦訳『意識のスペクトル』春秋社, 1985
- Wilber, Ken / ケン・ウィルバー “Trump and a Post-Truth World” 『トランプと脱真理の世界』Integral Life, 2017
- Wundt, Wilhelm / ヴント “Logik : eine Untersuchung der Prinzipien der Erkenntnis und der Methoden wissenschaftlicher Forschung” Stuttgart : F. Enke, 4. neubearbeitete Aufl, 1919.
- 柳田国男「巫女考」『定本柳田国男集』第九卷, 筑摩書房, 1971, p.245